

福岡市博多区

席田遺跡群

久保園遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第91集

1983

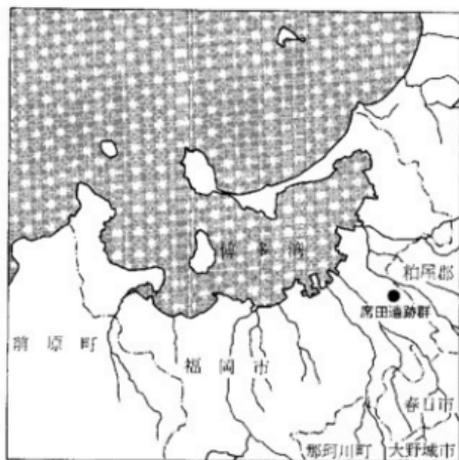
福岡市教育委員会

福岡市博多区

席田遺跡群

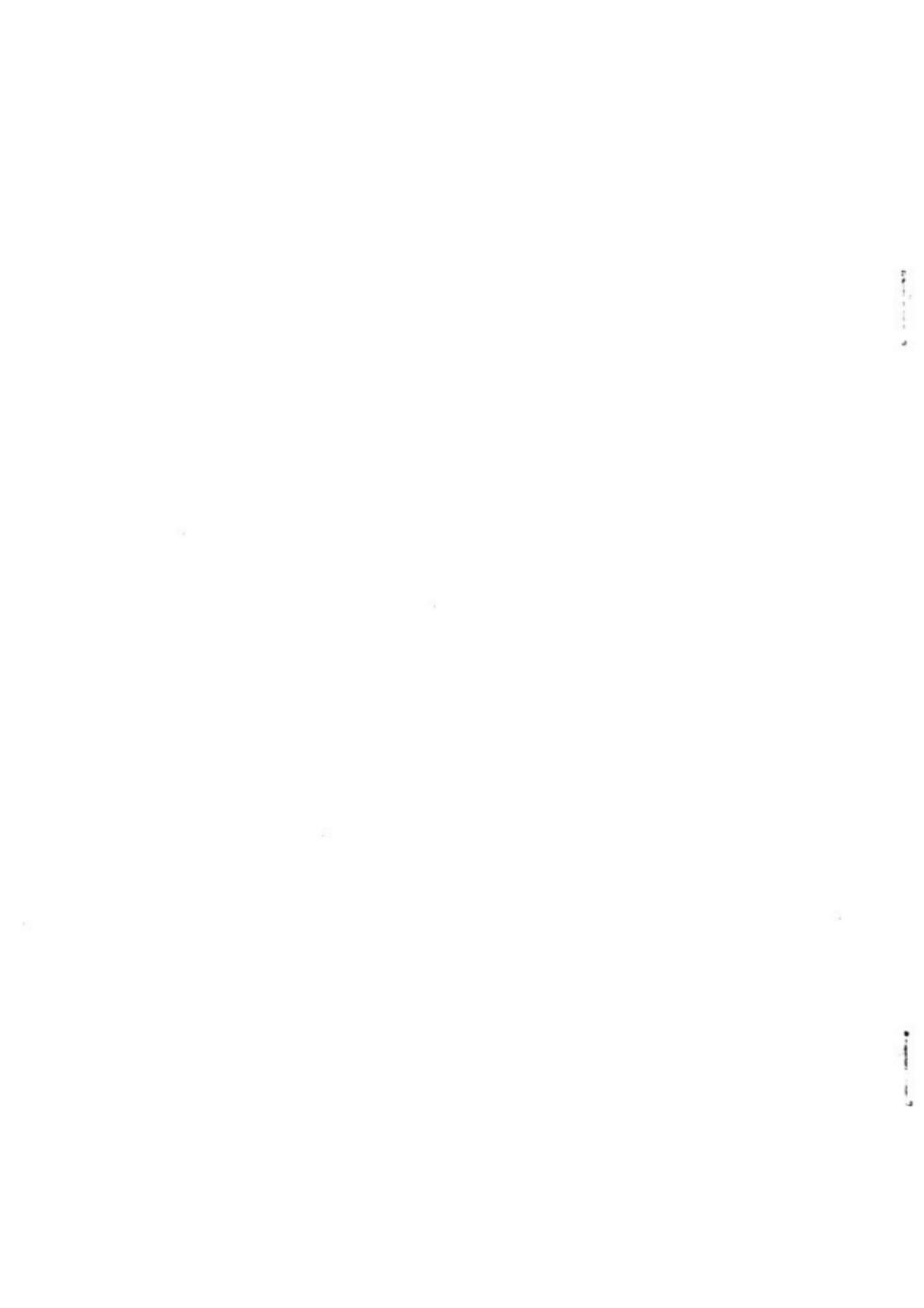
久保園遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第91集



1983

福岡市教育委員会



序 文

昭和47年8月、米軍板付基地弾薬庫跡地約75haが福岡市に無償貸与されて以来、福岡市都市計画局は東平尾総合運動公園の整備計画を進めております。都市計画局の埋蔵文化財調査依頼に基づき福岡市教育委員会では、昭和49年度に分布調査を行ない、昭和50年度から毎年発掘調査を実施し、現在に至っています。

本書は、昭和52年に調査を実施した久保園遺跡について報告するものです。報告書に見られるように弥生時代の住居跡の検出をはじめ多くの成果をあげることができました。

発掘調査から資料整理に至るまでの多くの人々の御協力に対し、心から感謝の意を表します。

本書が、埋蔵文化財への理解と認識を深める一助となることを願うとともに研究資料としても活用いただければ幸いです。

昭和58年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西津茂美



例 言

1. 本書は、福岡市都市計画局公園緑地部公園建設課の東平尾総合運動公園内における野球場建設工事によって大部分が破壊された久保園遺跡の発掘調査報告書です。
2. 東平尾総合運動公園（席田遺跡群）内における発掘調査は、昭和50年度から開始され、これまでに8次の発掘調査が実施されています。今回報告する久保園遺跡は、第3次の発掘調査に当ります。
3. 本書に掲載した遺構、遺物の総尺は、各々統一し、遺物写真についても土器、石器などの遺物ごとに統一しています。また、遺物番号は、時代、種類ごとに通し番号とし、この番号は、実測図、写真、観察表とも一致しています。
4. 遺物写真の撮影、焼付には、福岡市教育委員会文化課の大庭康時氏の協力をえました。また本書の作成にあたっては、資料整理から校正に至るまで、花畑照子、清門博子、武原邦子、安武裕子、岩崎純子、美沢祥子さんのご協力をえました。
5. 本書に掲載した遺構、遺物の実測図、写真などの記録類は、収蔵施設である福岡市埋蔵文化財センターに一括保管されていますが、出土遺物については、室見収蔵庫にも一部分収蔵されています。
6. 遺跡の空中撮影については、福岡市消防局消防航空隊のご協力をえました。
7. 本書の題字は、牧野貞一氏よりいただきました。
8. 付録にした小冊子は、発掘調査期間中に地元作業員への説明用に作成したものです。今回、写真を加えるなど再編集しました。

本文目次

第1章	はじめに	9
1.	発掘調査に至るまで	9
2.	第1～8次発掘調査の概要	15
3.	発掘調査の組織と構成	21
第2章	発掘調査の記録	22
1.	発掘調査の概要と経過	22
2.	遺構と遺物	25
1	竪穴住居跡 弥生時代	25
	第1号住居跡	25
	第2号住居跡	32
	第3号住居跡	42
	第4号住居跡	54
	古墳時代	56
	第5号住居跡	56
2	掘立柱建物 弥生時代	62
	第1号掘立柱建物	62
	第2号掘立柱建物	66
3	墓 弥生時代	71
	第1号石棺墓	71
	歴史時代	72
	第1号土城墓	72
	第2号土城墓	74
4	土器溜 弥生時代	78
	第1号土器溜	78
	第2号土器溜	91
	第3号土器溜	94
5	その他の遺構と遺物	98
3.	出土土器観察表	109
第3章	おわりに	128
付録	久保園遺跡とその周辺	

挿図・表目次

1	席田遺跡群と周辺の遺跡 (縮尺1/25,000).....	10
2	席田遺跡群周辺航空写真 (縮尺1/15,000).....	11
3	月鏡丘陵航空写真.....	12
4	月鏡丘陵航空写真.....	13
5	貝花塚1号墳.....	15
6	席田遺跡群周辺地形図 (縮尺1/5,000).....	16
7	席田遺跡群周辺地形図 (縮尺1/5,000).....	17
8	新立表1号墳.....	18
9	貝花塚2号墳.....	18
10	大谷遺跡.....	18
11	久保岡遺跡.....	19
12	中尾遺跡 第1地点.....	19
13	中尾遺跡 第2地点.....	19
14	中尾遺跡 第3地点.....	20
15	北ノ瀬遺跡.....	20
16	赤塚ノ稻遺跡.....	20
17	赤塚ノ稻遺跡出土の銅鑄鋳型片.....	21
18	丸尾2号墳.....	21
19	久保岡遺跡全景航空写真.....	22
20	久保岡遺跡トレンチ配置図.....	23
21	久保岡遺跡グリッド図.....	23
22	久保岡遺跡遺構航空写真.....	24
23	久保岡遺跡全体図 (縮尺1/2,000).....	24・25
24	第1号住居跡実測図 (縮尺1/80).....	28
25	第1号住居跡.....	27
26	第1号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/3).....	28
27	第1号住居跡出土遺物 (縮尺1/3).....	29
28	第1号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/3).....	30
29	第1号住居跡出土遺物 (縮尺1/3).....	30

30	第1号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/2)	31
31	第1号住居跡出土遺物 (縮尺1/2)	31
32	第2号住居跡	32
33	第2号住居跡実測図 (縮尺1/60)	33
34	第2号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/3)	34
35	第2号住居跡出土遺物 (縮尺1/3)	35
36	第2号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/3)	36
37	第2号住居跡出土遺物 (縮尺1/3)	37
38	第2号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/3)	38
39	第2号住居跡出土遺物 (縮尺1/3)	39
40	第2号住居跡土器出土状況	40
41	第2号住居跡土器出土状況	41
42	第2号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/2)	41
43	第2号住居跡出土遺物 (縮尺1/2)	41
44	第3号住居跡発掘作業	42
45	第3号住居跡	42
46	第3号住居跡	42
47	第3号住居跡実測図 (縮尺1/60)	43
48	第3号住居跡	44
49	第3号住居跡遺物出土状況	44
50	第3号住居跡遺物出土状況	44
51	第3号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/3)	46
52	第3号住居跡出土遺物 (縮尺1/3)	47
53	第3号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/3)	48
54	第3号住居跡出土遺物 (縮尺1/3)	49
55	第3号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/3)	50
56	第3号住居跡出土遺物 (縮尺1/3)	51
57	第3号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/2・1/3)	52
58	第3号住居跡出土遺物 (縮尺1/2)	52
59	第3号住居跡出土遺物実測図 (縮尺1/2)	53
60	第3号住居跡出土遺物 (縮尺1/3)	53
61	第4号住居跡	54

62 第4号住居窠实测图 (缩尺1/60).....	54
63 第4号住居窠出土遗物实测图 (缩尺1/3)	55
64 第4号住居窠出土遗物 (缩尺1/3)	55
65 第4号住居窠出土遗物实测图 (缩尺1/2)	56
66 第4号住居窠出土遗物.....	56
67 第5号住居跡.....	56
68 第5号住居窠实测图 (缩尺1/60).....	57
69 第5号住居窠出土遗物实测图 (缩尺1/3)	58
70 第5号住居窠出土遗物 (缩尺1/3)	58
71 第5号住居跡.....	60
72 第5号住居跡出土遗物实测图 (缩尺1/2)	61
73 第5号住居跡出土遗物 (缩尺1/2).....	61
74 第1号掘立柱建物.....	62
75 第1号掘立柱建物实测图 (缩尺1/100).....	63
76 第1号掘立柱建物出土遗物实测图 (缩尺1/3)	64
77 第1号掘立柱建物出土遗物实测图 (缩尺1/2).....	65
78 第1号掘立柱建物出土遗物.....	65
79 掘立柱穴断面图 (缩尺1/40).....	66
80 掘立柱建物全景.....	66
81 第2号掘立柱建物实测图 (缩尺1/100)	67
82 第2号掘立柱建物出土遗物实测图 (缩尺1/3)	68
83 第2号掘立柱建物出土遗物 (缩尺1/3)	69
84 第2号掘立柱建物出土遗物实测图 (缩尺1/3)	70
85 第1号石棺墓实测图 (缩尺1/30).....	71
86 第1号石棺墓.....	71
87 第1号土坟墓.....	72
88 第1号土坟墓实测图 (缩尺1/20).....	72
89 第1号土坟墓出土遗物实测图 (缩尺1/3)	73
90 第1号土坟墓出土遗物 (缩尺1/3)	73

91	第1号土城堡	73
92	第2号土城墓遺物出土状况	74
93	第2号土城墓実測図 (縮尺1/20)	74
94	第2号土城堡	75
95	第2号土城墓	75
96	第2号土城墓出土遺物実測図 (縮尺1/3)	76
97	第2号土城墓出土遺物 (縮尺1/3)	76
98	第2号土城墓出土遺物実測図 (縮尺1/3)	77
99	第2号土城墓出土遺物 (縮尺1/3)	77
100	第2号土城墓出土遺物 (縮尺1/2)	77
101	第2号土城墓出土遺物実測図 (縮尺1/2)	77
102	第1・2号土器罐	78
103	第1・2号土器罐実測図 (縮尺1/10)	79
104	第1号土器罐	80
105	第1号土器罐遺物出土状况	80
106	第1号土器罐遺物出土状况	81
107	第1号土器罐出土遺物実測図 (縮尺1/3)	82
108	第1号土器罐出土遺物 (縮尺1/3)	83
109	第1号土器罐出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/4)	84
110	第1号土器罐出土遺物 (縮尺1/3)	85
111	第1号土器罐出土遺物実測図 (縮尺1/3)	86
112	第1号土器罐出土遺物 (縮尺1/3)	87
113	第1号土器罐出土遺物実測図 (縮尺1/3・1/4)	88
114	第1号土器罐出土遺物実測図 (縮尺1/3)	89
115	第1・2号土器罐出土遺物実測図 (縮尺1/2)	90
116	第1・2号土器罐出土遺物 (縮尺1/3)	90
117	第2号土器罐	91
118	第2号土器罐出土遺物実測図 (縮尺1/3)	92
119	第2号土器罐出土遺物 (縮尺1/3)	93
120	第3号土器罐実測図 (縮尺1/40)	94
121	第3号土器罐	95
122	第3号土器罐	96

123	第3号土器器山十遺物 (縮尺1/3)	96
124	第3号土器器山十遺物実測図 (縮尺1/3)	96
125	第3号土器器山十遺物実測図 (縮尺1/3)	97
126	土器(Y'74)出土状況	98
127	久保園遺跡出土遺物実測図 (縮尺1/2)	98
128	久保園遺跡出土遺物 (縮尺1/2)	99
129	久保園遺跡出土遺物実測図 (縮尺1/2・1/3)	100
130	久保園遺跡出土遺物 (縮尺1/3)	101
131	久保園遺跡出土遺物実測図 (縮尺1/3)	104
132	久保園遺跡出土遺物 (縮尺1/2)	105
133	久保園遺跡出土遺物 (縮尺1/2)	106
134	久保園遺跡出土遺物 (縮尺1/2)	107
135	土製人物像板 (縮尺1/1)	108
136	出土土器觀察表	109
137	出土土器觀察表	110
138	出土土器觀察表	111
139	出土土器觀察表	112
140	出土土器觀察表	113
141	出土土器觀察表	114
142	出土土器觀察表	115
143	出土土器觀察表	116
144	出土土器觀察表	117
145	出土土器觀察表	118
146	出土土器觀察表	119
147	出土土器觀察表	120
148	出土土器觀察表	121
149	出土土器觀察表	122
150	出土土器觀察表	123
151	出土土器觀察表	124
152	出土土器觀察表	125
153	出土土器觀察表	126
154	出土土器觀察表	127

第1章 はじめに

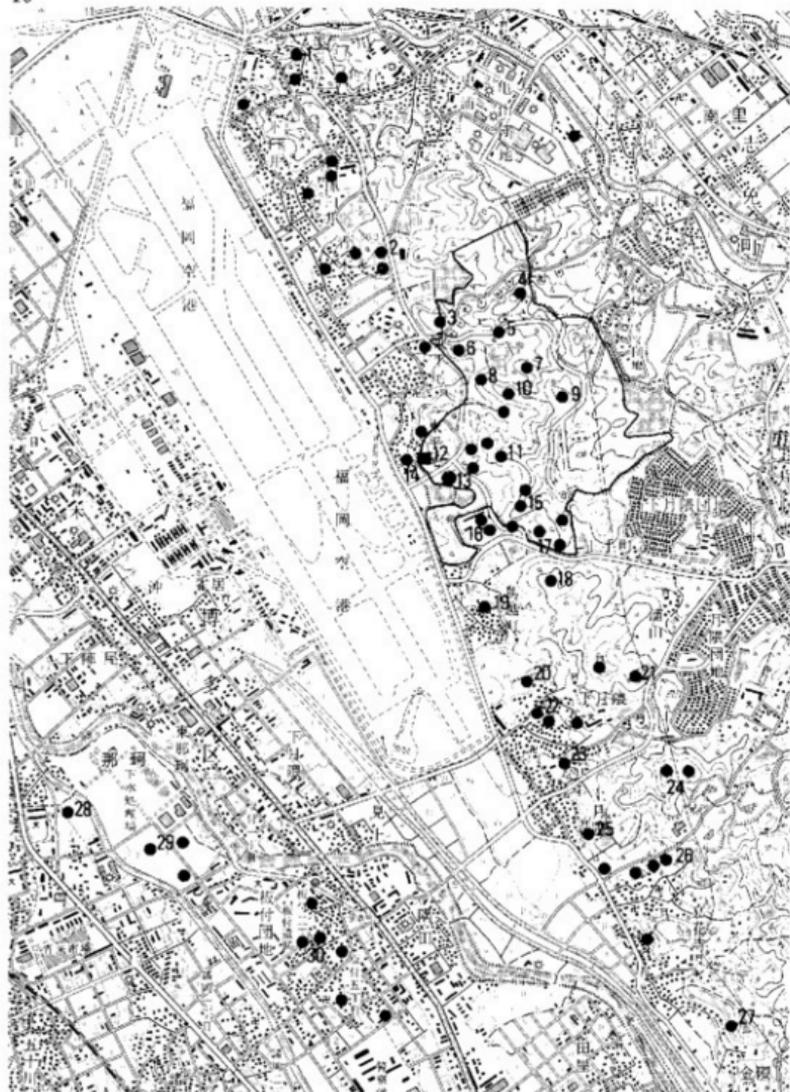
1. 発掘調査に至るまで

席田遺跡群における発掘調査は、1975年より着手し、1982年度までに8次に及んでいます。この間、第1次と第2次発掘調査の成果については、その一部が概報（福岡市埋蔵文化財調査報告書第44集 第46集）として公にされているものの、それ以降は、調査担当者の怠慢から、正式な報告は出されていません。今回、第3次発掘調査の久保園遺跡分について、どうか資料整理を終え、本報告書作成まで辿り着くことができました。

東平尾総合運動公園内におけるこれまでの発掘調査は、調査委託者である公園建設課の工事計画に先行する形で実施してきました。このため調査地点は各年度ごとに点々としており、また工事計画地以外は、できるだけ緑の自然を残すことにしているために、遺跡の拡がりの確認などに限界があります。また各発掘調査地点の名称については、年度ごとに第何次としていますが、別称としては、第1次発掘調査からの呼び方を踏襲しています。つまり「席田遺跡群」の「席田」は、発掘調査対象地一帯が1933年（昭和8）4月に福岡市に編入されるまで筑紫郡席田村であったこと、あるいは、この「席田」が古くはこの地区の郡名として延喜式等にみられるなど歴史的に由緒あるということで、個々の遺跡の総称」とし、また、各々の遺跡名は、現在の字図をもとにして小字名を付しています。中尾遺跡のように同一小字名内を数回にわたって発掘調査した場合は、席田遺跡群中尾遺跡第1地点、第2地点のように呼んでいます。古墳の場合も同様で同一小字名内においては、その発見、あるいは発掘調査順に席田遺跡群貝花尾1号墳、2号墳のようにしています。したがって席田遺跡群という呼び方は、各遺跡の関係を明確にした一つのグループとしての群という意味ではありません。もちろん各遺跡は、関係なく成立、存在したとは考えられませんので、これらの関連追究は、これからの発掘調査の大きな課題の一つです。

さて、席田遺跡群の発掘調査は、すでに述べたように総合運動公園建設工事に先行して実施してきましたが、1990年（昭和65）の国民体育大会の主要会場に決定するに及び、その利用目的にも大きな変化が生じ、自ずと発掘面積や発掘件数が増大しつつあります。この地が米軍から返還されてからの経過については、第1次発掘調査概報に詳しいので引用し、さらに最近の状況をまとめておきます。

『福岡市は、国際的な競技大会を目指し、1978年の第8回アジア競技大会を誘致すべく財界、スポーツ関係者、行政関係者等による主競技場の建設専門委員会を1971年（昭和46）2月に設置し、主競技場の建設地として福岡空港東側山間部、香椎浜埋立地、南庄地区、野多日の国立



1 席田遺跡群と周辺の遺跡 (縮尺1/25,000)

- | | | |
|-------------|-------------|------------|
| 1 下臼井築棺墓遺跡 | 2 青木築棺墓遺跡 | 3 席田北ノ浦1号墳 |
| 4 席田北ノ浦2号墳 | 5 席田塚ノ上遺跡 | 6 席田中尾遺跡 |
| 7 席田新立表1号墳 | 8 席田貝花草1号墳 | 9 席田新立表2号墳 |
| 10 席田貝花草2号墳 | 11 席田大谷遺跡 | 12 席田久保園遺跡 |
| 13 席田赤穂ノ浦遺跡 | 14 席田林崎遺跡 | 15 席田丸尾古墳群 |
| 16 宝満尾遺跡 | 17 宝満尾東遺跡 | 18 上ノ池古墳群 |
| 19 雀尾古墳 | 20 下月隈天神森遺跡 | 21 下月隈古墳群 |
| 22 下月隈宮ノ後遺跡 | 23 上月隈築棺墓遺跡 | 24 上月隈古墳群 |
| 25 文殊寺古墳群 | 26 谷頭古墳群 | 27 金隈遺跡 |
| 28 那珂深ツサ遺跡 | 29 那珂君休遺跡 | 30 板付遺跡 |



2 埼玉道群周辺航空写真(縮尺1/15,000)

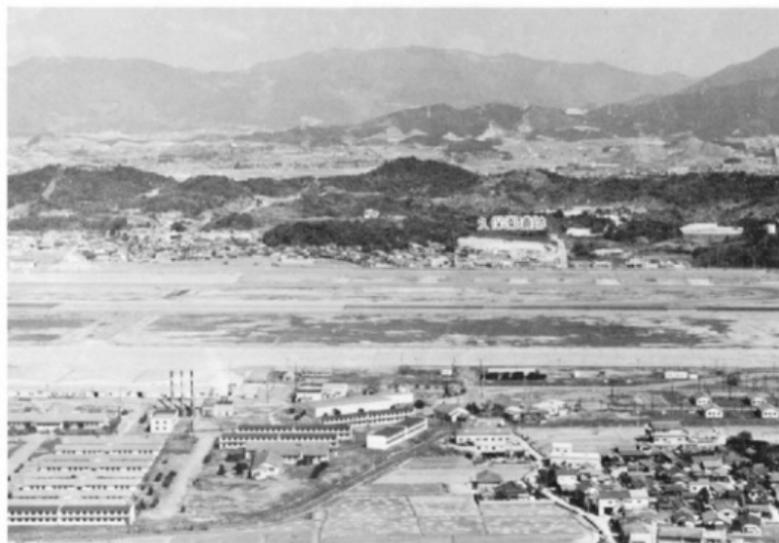
12 発掘調査に至るまで

がんセンター用地、雁ノ巣飛行場跡の五カ所の候補地を挙げ、その後の関係者等の現地調査で候補地を福岡空港東側山間部にしばった。1972年（昭和47）初め、福岡空港東山間部の米軍板付基地弾薬庫跡地が米軍から返還され、同年8月、国有財産審議会で返還された跡地の中の約75万㎡を福岡市に無償貸与することが決まった。

一方福岡市は、1977年（昭和52）完成を目標に、総合運動公園建設の計画を進め、1972年9月26日、建設を推進する窓口である、福岡市都市計画局公園緑地部公園建設課より、計画予定地内に予想される、埋蔵文化財の分布調査の依頼が、福岡市教育委員会社会教育部文化課埋蔵文化財係にあった。

直ちに文化課は担当者を現地に派遣し、埋蔵文化財の分布調査を実施した。しかしながら現地は、樹木、下草等が繁茂して十分な踏査ができなかったため、これらの伐採ののち、再度、埋蔵文化財の分布調査を実施したが、少なくとも図示した個所は試掘の必要がある旨の意見を添えて1973年（昭和48）3月末に公園建設課に分布調査の結果を報告した。

1973年7月9日、公園管理課より文化課に現地の下草刈作業が終了（900万円をかけて2月3日から3月24日にかけて実施したとのこと）したので、埋蔵文化財の分布調査を再度実施してもらいたい旨の依頼があった。これと前後して、6月23日・26日に総務局スポーツ青少年対策室スポーツ振興課、都市計画局公園緑地部緑地課、教育委員会社会教育部体育課等と協議が



3 月隈丘陵航空写真（西から）

もたれ、現地踏査の要請を受けたため、文化課では6月29日に未踏査区域の埋蔵文化財の分布調査を実施した。しかし、現地は立木、下草等が繁っていて、またもや充分な調査ができる状況ではなく、その旨の意見を添えて、7月18日に公園建設課に報告した。

福岡市は、1973年7月、埋蔵文化財の分布調査の結果に基づいて、社団法人日本公園緑地協会に基本設計を委託し、翌1974年（昭和49）1月にその報告を受けた。

その間に、第8回アジア競技大会が、シンガポールで開催されることになり、当初の目的を失った。そのため、事業計画の大幅な変更を行ない、1975年（昭和50）から10カ年で完成させ、当初考えていたような、国際競技を目的とした施設ではなく、総合公園（東平尾公園）とし、その中に市民の健全なる憩いの場としての運動施設を設置し、既存の樹木をできるだけ残して、緑の保全を図るという基本方針が打ち出された。

その後、第8回アジア競技大会開催国に決まったシンガポールも、経済的な理由から開催を返上し、一時はバキスタンが開催を申し出ていたが、これも経済的な理由から開催を返上し、加盟諸国で経費を負担して、タイのバンコクで1978年の12月に開催することが本決りになった。1974年4月22日、都市計画局より第一期計画分としての「サイクリングロード・遊歩道等建設予定地内」の埋蔵文化財発掘調査の依頼があり、文化課では、昭和49年度後半の事業として予定に組み入れ、東平尾公園建設予定地所管の大蔵省北九州財務局に対して、旧米軍板付基地



4 月隈丘航空写真（南から）

内立入及び施設等の借用を申し入れ、福岡市博多区大字東平尾229番1に位置する、旧米軍の弾薬庫を発掘調査事務所として利用できるように整備した。

しかしながら、昭和49年前半の事業の実施が年度一杯かかったため、予定地内の埋蔵文化財の再度の分布調査にとどまった。

1975年(昭和50)4月25日、公園建設課より「サイクリングロード・遊歩道等建設予定地内」の埋蔵文化財の分布調査の報告を求められたため、図面を添えて4月30日報告した。

6月11日、文化課埋蔵文化財係では、昭和50年度の事業の打ち合わせを行い、8月1日より3ヵ月間の予定で「サイクリングロード・遊歩道等建設予定地内」の第1次発掘調査を実施することになった。その後、第2次発掘調査は、公園建設課の要請により、サイクリングロード建設予定地と併行して、遊歩道と管理広場建設予定地での試掘、本調査を実施しました。文化課と公園建設課との協議ルールも整備されたと思われたころ、公園建設課は、文化課との事前協議を無視し、「野球広場」建設予定地において、突然工事に着手してしまいました。文化課は、破壊から辛うじて免れた外野部を、第3次として発掘調査することになりました。この第3次が今回報告する久保園遺跡ですが、この時の両者の反省は、文化課作成の席田遺跡群分布地図で、遺跡の存在が確認されている範囲はもとより、遺跡の存在が未確認部においては、事前協議を綿密にすること。踏査、試掘さらに本調査によって重要な遺構が確認された際は、工事計画を変更し、遺跡保存に務めること。また工事計画は、できるだけ早く文化課へ提出することなどで、その後の協議の教訓としました。第4次は、管理広場建設予定地にあてられている中尾遺跡でしたが、公園建設が一段落したことや、席田遺跡群以外での発掘件数が増えたこともあり、一時休止の期間がありました。この期間中に先の教訓が生かされず、遊歩道の路線変更で現状保存されることに決定していた貝花尾2号墳は、いつのまにか新設道路の下に埋まってしまいました。この原因は、建設工事業者に、保存部分が徹底していなかったことばかりではなく、文化課と公園建設課との協議、公園建設課内での連絡事項の不徹底、あるいは文化課担当者が、席田遺跡群に常駐していないことなどが挙げられます。特に同じ行政内における事件だけに許されないことです。さらにもう一つの原因を挙げるとすれば、東平尾総合運動公園が、1990年(昭和65)に福岡県で開催される国民体育大会の主会場とテニス会場に決定し、建設工事が急がれはじめ、公園建設課独自の公園計画が大きく変更されつつあることです。第7次の北ノ浦遺跡と新立表2号墳は、国体施設の予定地であり、第8次の赤穂ノ浦遺跡は、野球場で国体期間中は、選手、観客送迎バス駐車場に考えられている所です。1983年1月には国体用諸施設の配置も最終決定し、これらの建設工事は自然環境を大きく変貌させることでしよう。

発掘調査の体制、期間など文化課の充分な対応、公園建設課とのさがる緻密な協議が望まれてきました。

2. 第1～8次発掘調査の概要

福岡平野の東側は、福岡空港の滑走路が大部分を占め、さらに滑走路に接する東側の月隈丘陵も1972年までは、弾薬庫などの米軍基地があったことから、発掘調査はもとより遺跡の存在すら知られていませんでした。ここ数年の乱開発で福岡平野では多くの遺跡が発掘調査され、水稲農耕を主とする弥生時代からの人々の生活が明らかにされつつあります。しかし、これらは御笠川より西側のことであり、東側については、国史跡に指定されている金隈遺跡や青銅鏡を出土した宝満尾遺跡が発掘調査されているにすぎませんでした。これらはいずれも共同墓地であることから、墓地に埋葬された人々の集落、あるいは経済的基盤であったと思われる水田などの生産跡が明らかでなく、むかしの福岡平野を語るうえで大きな障壁となっていました。このような意味で長期かつ広範囲な席田遺跡群の発掘調査は期待されました。

1972年の分布調査以来、予想されていたことですが多くの遺跡が眠っていることがわかりました。ここでは8次の発掘調査について、その概略を記しておきます。

第1次発掘調査 1975年度 8月～2月

本調査に入る前に何回となく分布調査を試みましたが、現地は雑木林で地表下の遺跡を捜すのには限界がありました。このため試掘を優先して、この結果をもとに文化課と公園建設課が協議し、設計変更あるいは本調査という方法をとるということでスタートしました。

貝花尾1号遺跡 (サイクリングロード)

全長約60mのL字形をした溝状遺構と、弥生時代の遺物包含層を確認しました。溝状遺構の時期や性格については明確ではありません。

貝花尾2号遺跡 (遊歩道)

標高40～50m前後の尾根部にあたり、丘陵を切断したと思われる溝状遺構と小ピットを検出しました。溝状遺構からは弥生時代中期の土器が多量に出土しました。

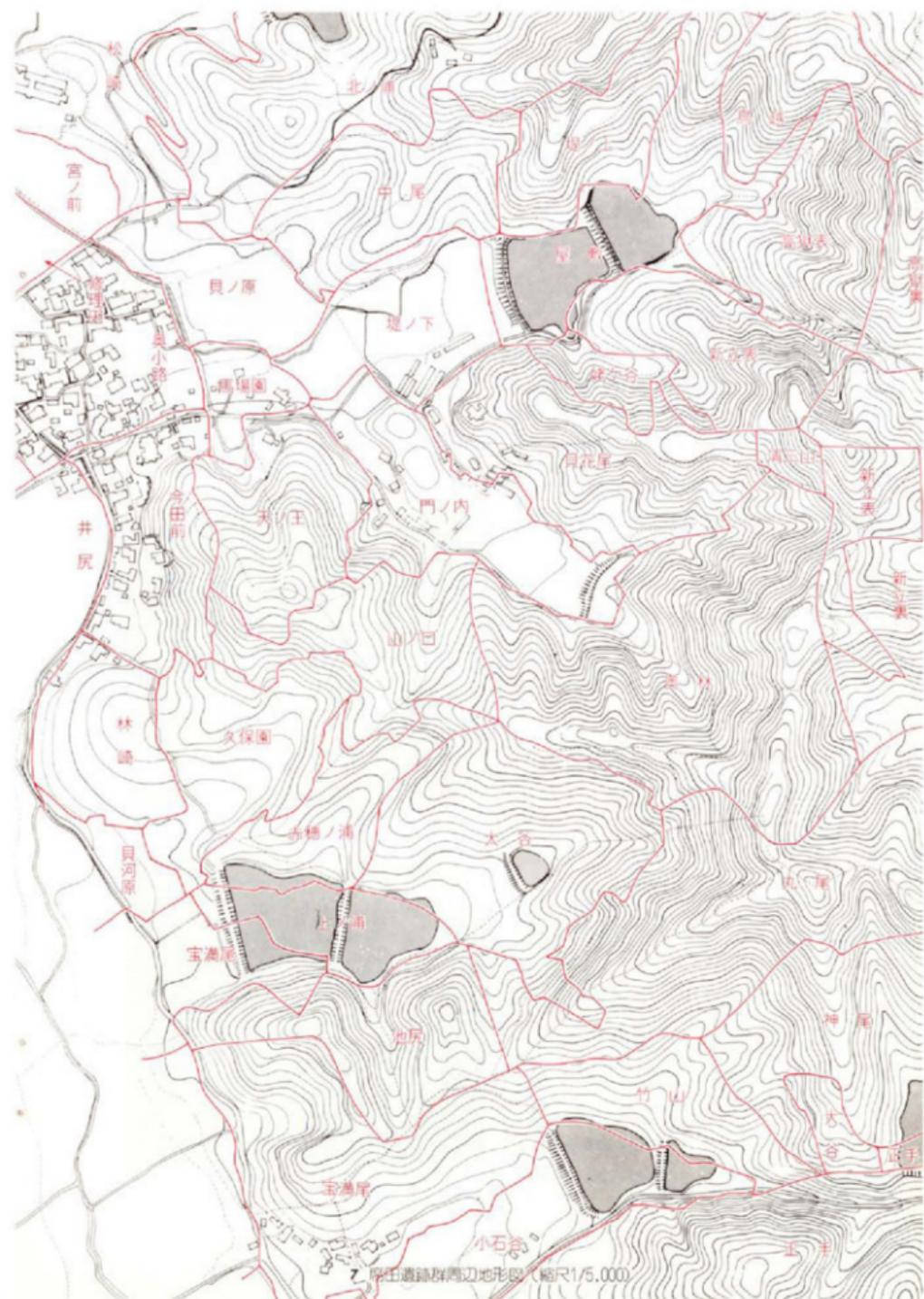
貝花尾1号墳 (遊歩道)

貝花尾1号遺跡よりさらに高い稜線上に位置する直径約12mの円墳です。石室は小型竪穴系横口式と呼ばれる構造で、長さ約2.25m、幅は奥壁で1.03mを測ります。床面には敷石があり、直刀、刀子、鎌、鋤先、毛抜きなどの鉄製品や須恵器、土師器などの副葬品が出土しました。



5 貝花尾1号墳





2 甲田遺跡群周辺地形図(縮尺1/5,000)

第2次発掘調査 1976年度 10月～1月前年に引続き、サイクリングロードと遊歩道の調査とともに新たに管理広場予定地である中尾、堤ノ上地区での試掘を行いました。

新立表1号墳 (サイクリングロード)

墳丘、石室の大部分がすでに破壊され、石室の腰石だけが残っていました。石室は両袖の横穴式で、直径10m以上の円墳と考えられます。設計変更で現状保存されることになり、石室床面などの精査はしていません。



8 新立表1号墳

貝花尾2号墳 (遊歩道)

席田遺跡群で見つかった古墳のほとんどは、山頂部か尾根上に築造されているのに対し、貝花尾2号墳は、丘陵南側斜面の裾部に位置しています。石室は、腰石だけでしたが長さ約2.8m、幅約2.5mの横穴式石室でした。床面には石が敷かれており、盗掘を免れた杯、高杯、甕、壺、提瓶などの須恵器、直刀、鏃、斧などの鉄製品が出土しました。特異な石室構造や豊富な副葬品などから、重要な古墳と注目されることとなり、設計変更で現状保存されたのですが、徹底せずに破壊されてしまいました。



9 貝花尾2号墳

大谷遺跡 (遊歩道)

赤穂ノ浦遺跡にのびる尾根上で、竪穴住居跡9軒、溝状遺構、土壇2基などが検出されました。住居跡は、出土遺物から弥生時代後期の時期が推測されます。同じ時期の墓地が谷を挟んだ宝満尾遺跡にあることから、集落と墓地という関係が考えられましたが、なぜ集落が平野部になく、現在の村落からも遠い山間部に営まれたのか問題となりました。



10 大谷遺跡



11 久保園遺跡

第3次発掘調査 1977年度 4月～10月 久保園遺跡 (野球広場)

公園建設課は、事前協議のルールを無視し、突然野球広場の建設工事に着手して久保園遺跡の大半を削り取ってしまいました。発掘調査の結果については本書で報告しているように、8間×5間の掘立柱建物や祭祀遺構と思われる土器溜、さらに弥生時代から古墳時代の住居跡などがあり、全面発掘が実施されていれば、大規模な遺跡になったことが予想されます。その後、南側に隣接する赤穂ノ浦遺跡で銅鐸型片が出土したことから、銅鐸造の工房跡があった可能性もあり、遺跡の全容を把握できなかったことは、あらためて悔まれます。



12 中尾遺跡 第1地点

第4次発掘調査 1978年度 2月～3月 中尾遺跡第1地点 (管理広場)

第2次の試掘調査で遺跡の存在が確認されていました。調査対象地は、あまりにも広範囲におよぶことから3地点を3年度に分けて発掘調査しました。中尾遺跡は、貝花尾1号遺跡の北側丘陵にあり、間には幅広い谷が西に開口しています。第1地点では、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡が重複して検出されました。この他に複椋の甕棺墓が1基あり、東側の堤ノ上遺跡の試掘結果から見て、付近に弥生時代の共同墓地があるのではないかと考えられました。



13 中尾遺跡 第2地点

第5次発掘調査 1979年度 4月～6月 中尾遺跡第2地点 (管理広場)

第2地点も同じように丘陵の南側斜面にあり、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡7軒、

掘立柱建物1棟、溝状遺構などを検出しました。弥生時代の住居跡は、円形プランで中期の遺物が出土しました。特に未製品の輝緑凝灰岩製石庖丁は注目されます。古墳時代の住居跡は、方形プランでほとんどが切り合っており、著しいのは4軒の重複が見られました。掘立柱建物は2間×2間の柱柱で高床倉庫と思われま。

第6次発掘調査 1980年度 2月～3月
中尾遺跡第3地点 (管理広場)

第2地点より1段高い位置にあり、弥生時代の竪穴住居跡2軒を検出しました。傾斜面のため、階段状に造成して平坦面に住居跡を掘り込む工夫をしています。

第7次発掘調査 1981年度 6月～8月
北ノ浦遺跡 (テニスコート)

東平尾総合運動公園が、国体会場の候補地となり、建設工事の推進が急がれました。北ノ浦地区はテニスコ場に計画され、大規模な造成工事が予想されることから、試掘を先行し、遺跡の数、範囲などをつかむことになりました。この結果、3地点で遺構や遺物包含層を確認しました。

新立表2号墳 (陸上競技場)

標高79mの山頂部で竪穴式古墳1基を確認しました。この古墳と北ノ浦遺跡の一部は、1983年度に本調査の予定です。

第8次発掘調査 1982年度
赤穂ノ浦遺跡 (野球広場) 4月～9月

3月の試掘に継続して本調査を実施しました。発掘対象地は、西側の平野部にのびる小丘陵と谷部で、久保園遺跡の南側隣接地にあ



14 中尾遺跡 第3地点



15 北ノ浦遺跡



16 赤穂ノ浦遺跡



17 赤穂ノ瀬遺跡出土の銅鐸鋳型片



18 丸尾2号墳

たります。さらに南には池を挟んで宝満尾遺跡が対峙しています。丘陵部では、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡4軒、掘立柱建物、柵などが検出されました。谷部の遺物包含層から多量の弥生式土器とともに横帯文銅鐸の鋳型片が出土し、九州では4例目の重要な発見となりました。このため工事計画は延期され、各遺構を砂で覆い発掘前の地形にもどしています。

丸尾古墳（草スキー場）12月～1月

丘陵北側斜面にある2基の古墳を発掘しました。1号墳は、竪穴式石室で、鉄刀、鉄鏃、土師器、ガラス玉が副葬されていました。

2号墳は、直径12mの円墳で、副約3.5mの溝がめぐっていました。石室は横穴式で、副葬品には、鉄刀、鉄鏃などの武器や馬具、管玉や水晶製切子玉などの装身具、須恵器などが残されていました。2基の古墳とも保存されています。

3. 発掘調査の組織と構成

調査委託 福岡市都市計画局

調査主体 福岡市教育委員会社会教育部文化課埋蔵文化財係

飛高憲雄 力武卓治（発掘調査担当）

木村義一 古藤国生（事務担当）

調査作業員 西村浅吉 古賀益雄 山根正人 百武謙治 安川信男 関アサ子 鶴田サヨ子

関加代子 関ヒサ子 倉光澄枝 野添嘉子 安川初枝 関スマ子 山内タツ子

安川菊代 中山政子 稲永初子 関政子 国崎キヨ子 長谷津ミエ子

橘爪チズ子

若草の萌え出したころから開始した発掘調査は、地元作業員をはじめ多くの方々のご協力をえて、銀木犀の白い花が咲きかけたころ無事終了しました。この間、野球場の歓声を聞くたびに破壊の原因となった協議の不手際を考えると、何度もその責任を感じ非力さを痛感しました。

第2章 発掘調査の記録

1. 発掘調査の概要と経過

福岡平野と東の粕屋平野の間には、南東から北西方向にのびる標高100～150mほどの月隈丘陵が、長さ約7kmにわたって横たわっています。この月隈丘陵は平野部に向かって多くの小丘陵が派生し、遺跡立地に適した環境をつくっています。久保園遺跡も、地元の人達が天王山と呼んでいる丘陵の南側斜面に位置しています。現地は、すでに記したように突如の工事で大部分が破壊されましたが、旧地形を示す戦前の地図を見ると、南に向かって緩やかな傾斜をなし、最も低い所には小さな池がありました。西側の林崎遺跡が、飛行場や宅地造成で削平されたのに対し、久保園遺跡は、戦後の米軍接收後も大きな変化を受けず守られていたのです。

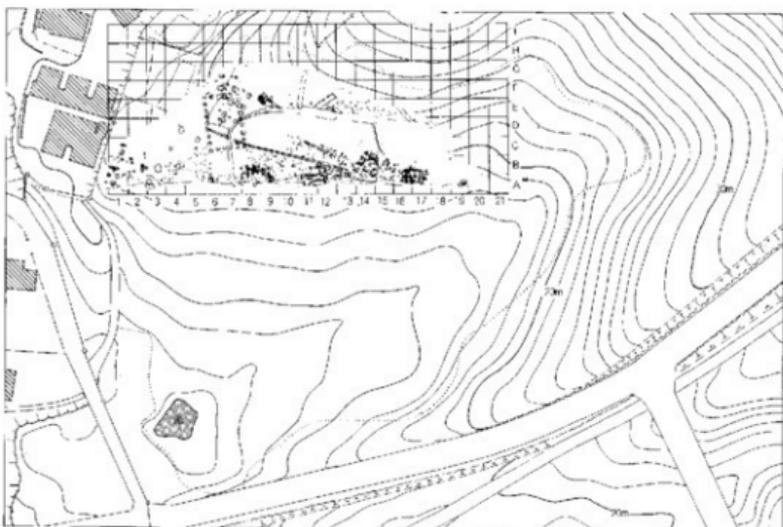
発掘調査は、雑木、下草の伐採後、4段に整形されている各段にトレンチ（試掘溝）を設定し、遺構の性格、範囲などを把握することから開始しました。Aトレンチは、野球場グラウンドの境界と平行に長さ約100mにわたって設定しました。Aトレンチでは、畑耕作土下に地山面が現われ、グラウンドとの崖面には、数か所で柱穴状や竪穴住居跡らしい落ち込みがあり、この中には土器や滑石片が含まれていることから遺構と考えられました。Cトレンチでも竪穴住居跡のコーナーが現われ、Dトレンチでは土器片が集中する箇所がありました。調査対象地の東寄りに設定したFトレンチとGトレンチでは、遺構、遺物とも数少なくなり遺跡の中心よりはずれているのではないかと考えられました。また、Aトレンチを除く他の南北方向のトレンチでは、トレンチの北寄りである畑崖面に近いほど遺構、遺物が少なくなる傾向がありました。これは、緩傾斜面を畑に耕地化した際に削平を受けたためと想像されました。これらのことから、遺跡の中心部は、調査対象地の西側寄りにあり、かつ各段の崖面上に遺構がよく残されているという判断をしました。このため5m方眼のグリッドを組み、西側より発掘を開始し、10月に終了しました。この間のべ120日間の現場作業をし、弥生時代から古墳時代の竪穴住居跡5軒、掘立柱建物2棟、土器壺などの遺構を検出しました。また白磁、青磁を副葬した歴史時代の土壇墓も2基見つかったこともあり、東平尾に残る石塔や古い伝説などを現場作業と併行して調査し、8月に小さな冊子を作成しました。



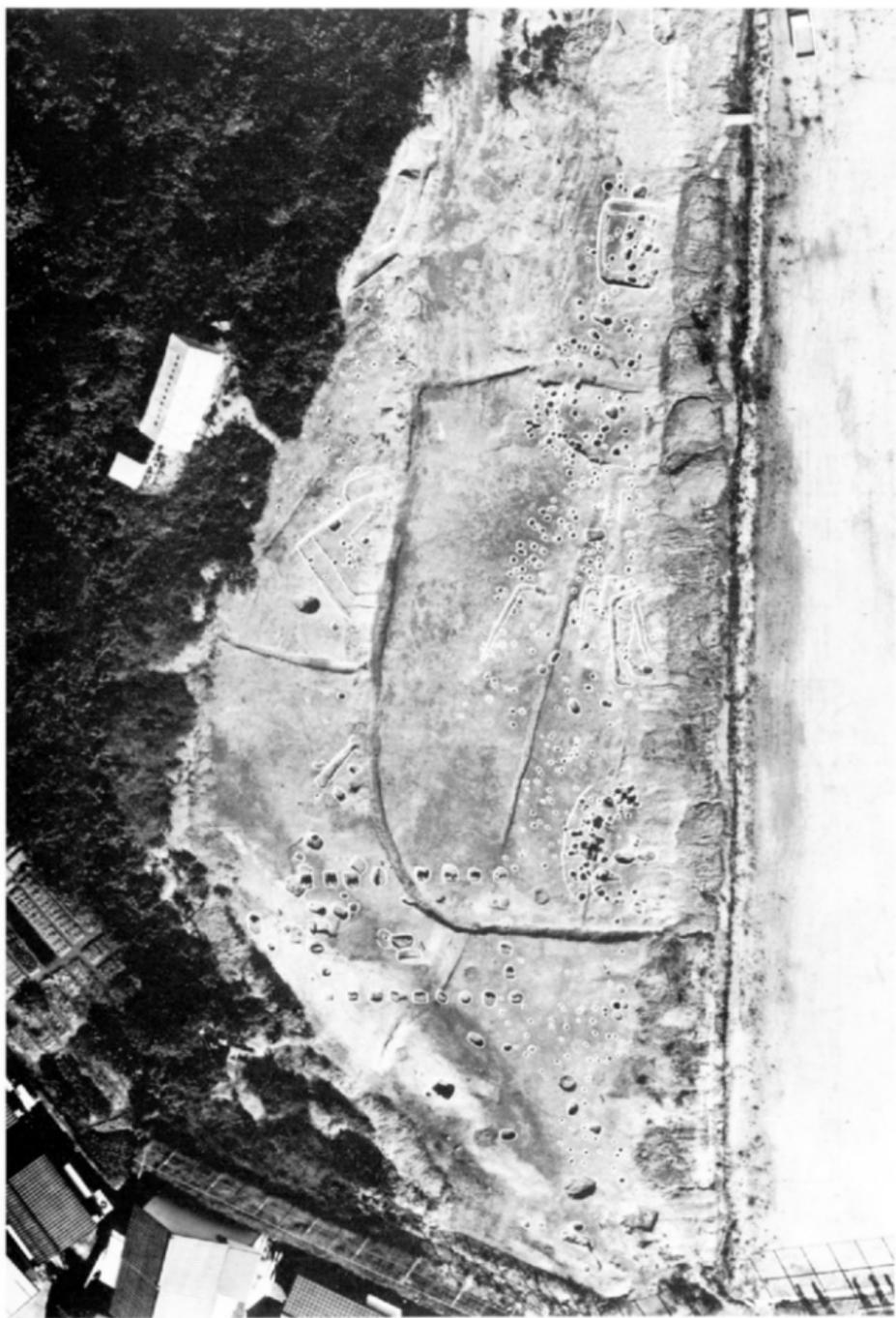
19 久保園遺跡全景航空写真



20 久保遺跡Aトレンチ配置図



21 久保遺跡Aトレンチ配置図



▲ 22 久保岡遺跡遺構航空写真



23 久保岡遺跡全体図 (縮尺1/200)



2. 遺構と遺物

発掘調査によって検出した遺構は、竪穴住居跡、掘立柱建物、墓、土器溜、小ピット、不整形の竪穴などです。これらの遺構のうち出土遺物で時期が判断できるものについて、時代ごとに弥生時代、古墳時代、歴史時代（奈良時代以降）に分け記していきます。竪穴住居跡については、発掘順に番号を付しましたが、ここでは時期の古い順に並べかえ新たな番号を付しました。また遺物については、各遺構ごとに掲げ、その写真も対比できるように配置しました。このため遺物についての記述が充分でなく、その欠を補うために巻末に観察表を作成しました。

1 竪穴住居跡

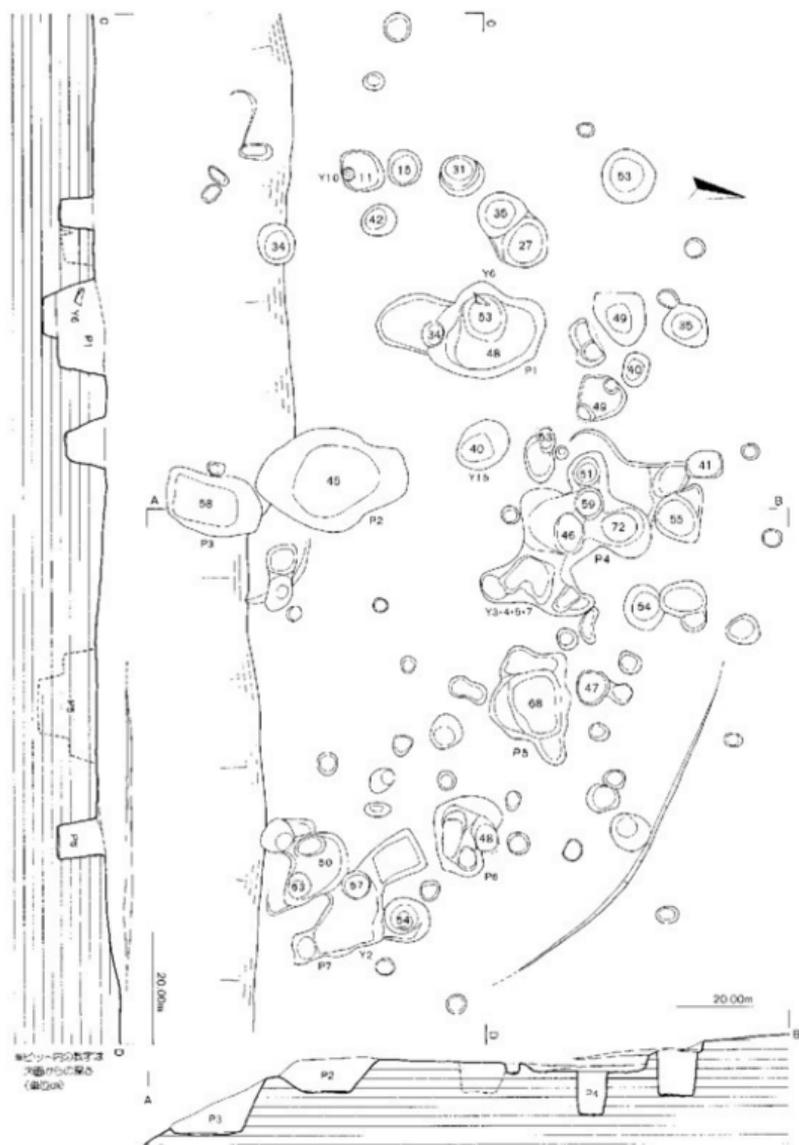
第1号住居跡（弥生時代）(24・25)

第1号住居跡は、発掘区中央部のA・B-8・9グリッドで検出しました。第2号住居跡の西側約21mの位置にあり、住居跡全体の1/2が野球場工事で削り取られています。しかも、検出部も削平されており、きわめて悪い遺存状況でした。住居跡と判断したのは、わずかながらも壁が残り、この内側に柱穴と思われるピットが集中していること、出土遺物に大きな時期差がないことなどを根拠としました。残っている壁は全長約2m、高さ約8cmを測ります。弧状にのびたそのカーブとピットの位置から、直径約10.5mの円形住居跡が考えられます。床面も削平されているために、床面での出土遺物はなく、また炉と思われる焼土や炭化物は認められませんでした。柱穴と思われるピットは、直径約30～50cmの大きさのものが多く、深さは約50cm前後を測ります。またP1・2・3のように柱穴よりひとまわり大きい不整形円形のピットが掘りこまれており、遺物の出土も多く見られました。これら柱穴と思われるピットの重複や数から2回以上の建てかえが行なわれたことは確実ですが、建てかえ回数や各ピットがどの建てかえ時期のものかは明らかではありません。第1号住居跡は、出土遺物から弥生時代中期の時期が考えられ、当時の住居跡としてはやや大きめの床面積を持っています。

出土遺物（26～31 表136・137）

弥生時代の生活用土器のセットである甕形土器、壺形土器、器台形土器、高杯形土器、鉢形土器のうち鉢形土器を除くすべての器種が出土しました。これらのほとんどは細片で、図化できたのは15点のみでした。

土器（Y1～15） Y1～7・12は甕形土器で、口径の大きさや突帯の有無から2類に分けられます。Y1～5は口径25～33.4cmを測り、いずれもL字形の口縁部をもっています。Y1は口縁上面が平坦でなく丸みがあり、内端部は小さく突出しています。Y4には胴部にやや張りが見られます。口縁部は横ナア調整されていますが、胴部は剝離したものが多く、調整痕は観察できません。Y6・7・12は口縁下に断面三角形の突帯をめぐらしており、口径は43～46



●ピット・P50以下の
 穴の中心の位置
 (●50cm)

24 第1号住居跡平面図 (縮尺1/50)

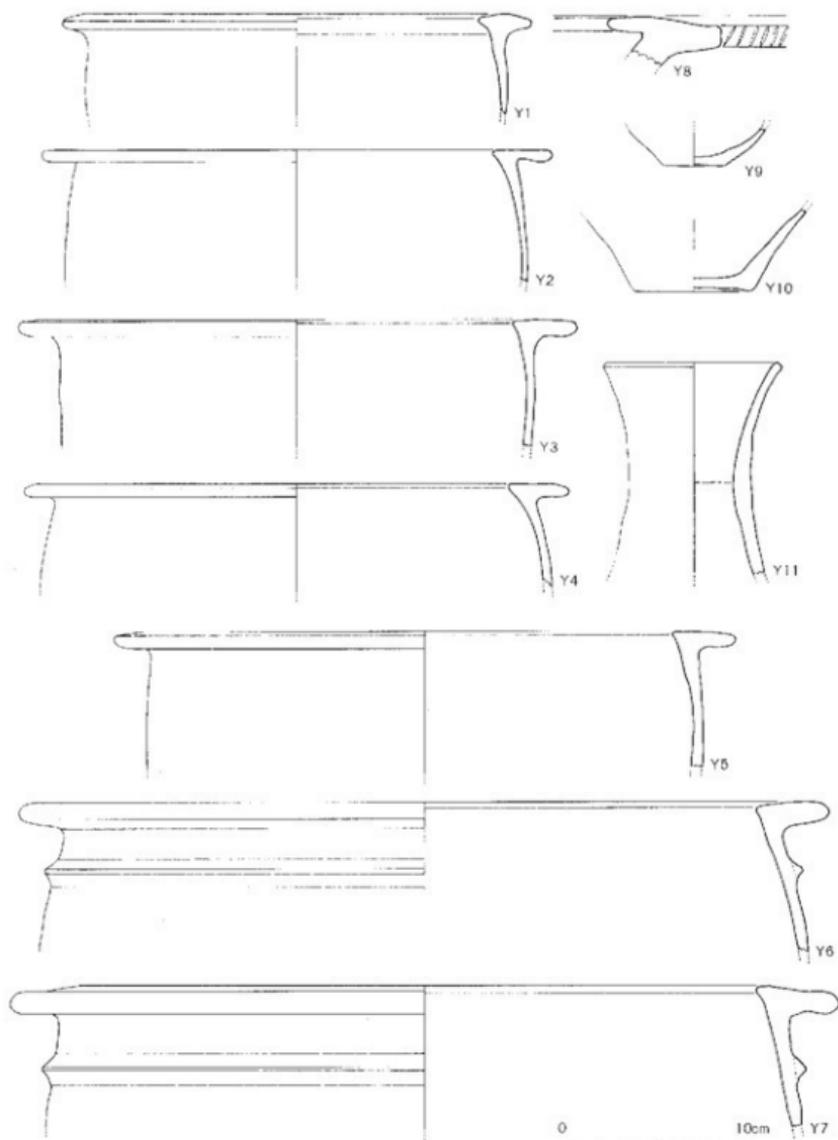
0 1 2m



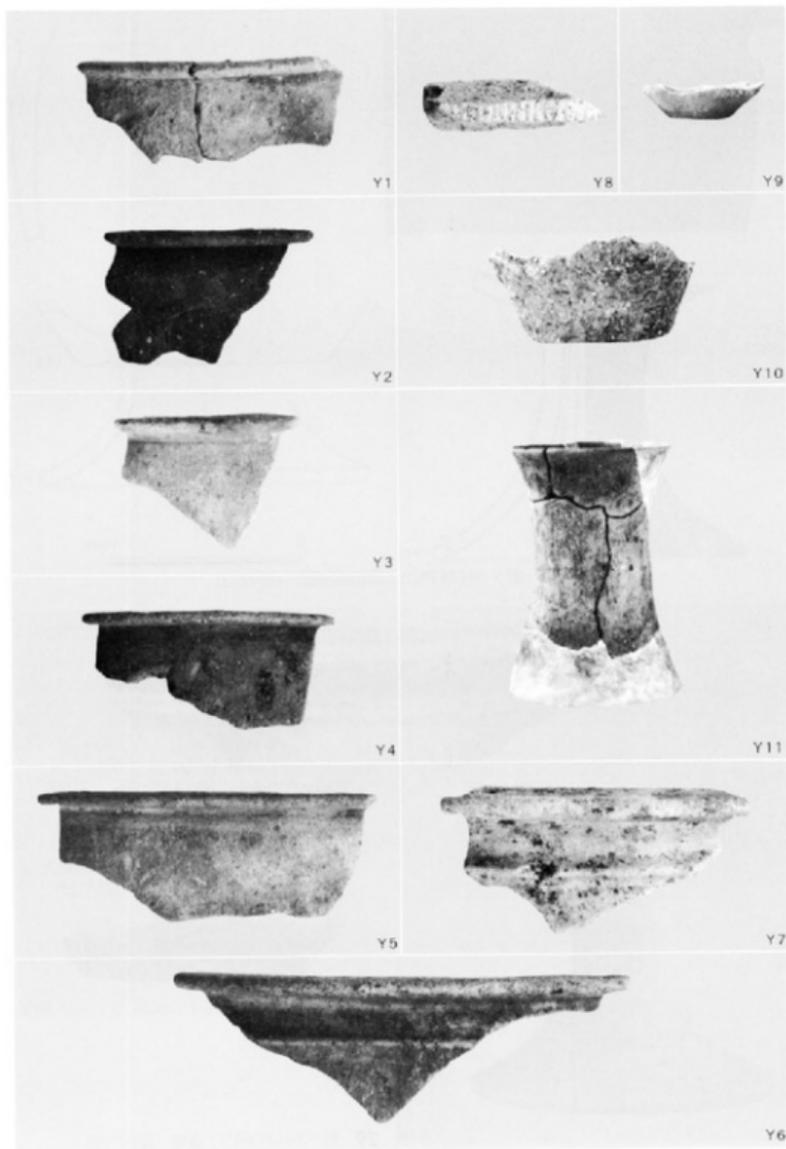
25 第1号住居跡（東から）

cmを測ります。口縁部はL字形を呈していますが、上面はY 6が内傾し、Y 7・12は外傾しています。Y 12はやや大きめの器形で、器壁も約1.2cmと厚いつくりをなしています。口縁下の突帯断面は、三角形ではなく口唇（M字）形をし、内外面ともに丹塗痕が見られます。Y 8は朝顔状に開く広口壺形土器の口縁部で、内側へ約2cmの長さで突出し端部は丸くおさめています。外端部には約5mm間隔で斜めの刻み目がつけられています。Y 9は壺形土器の底部でやや上げ底となっています。Y 11は器台形土器で、内外面とも剝離が進んでおり調整痕は不明です。Y 14・15は高杯形土器で、2点とも杯部を欠いています。Y 14は杯部の一部が残されており、杯部内外面と脚部外面には丹が塗付されています。Y 15には丹塗痕は認められず、脚裾端部も小さく上方に突出するなど、Y 14とは違いがあります。Y 10・13とも甕形土器の底部ですが、Y 13の底径は13.2cmあり、やや大きめの体部が考えられます。

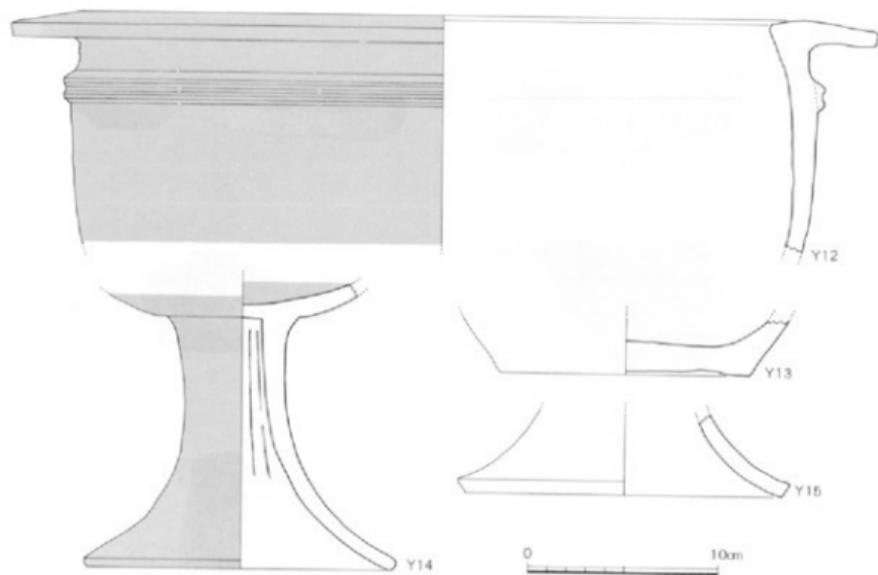
石器（T 1・2）2点の砥石は、いずれも砂岩製で荒砥用です。T 1の断面は方形で、表、側面の2面が砥面として使われています。T 2は側面が割れており旧形をとどめていません。砥面は表裏2面に見られ、かなり窪んでいます。



26 第1号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/3)



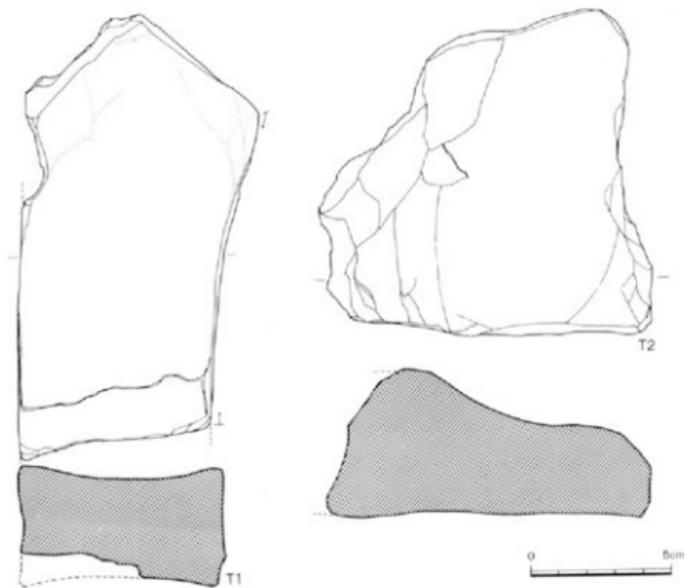
27 第1号住居跡出土遺物(縮尺1/3)



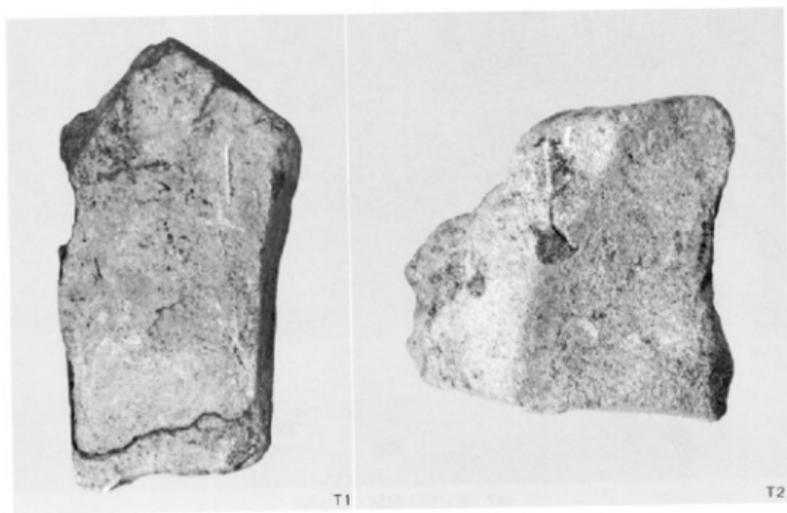
28 第1号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/3)



29 第1号住居跡出土遺物(縮尺1/3)



30 第1号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/2)



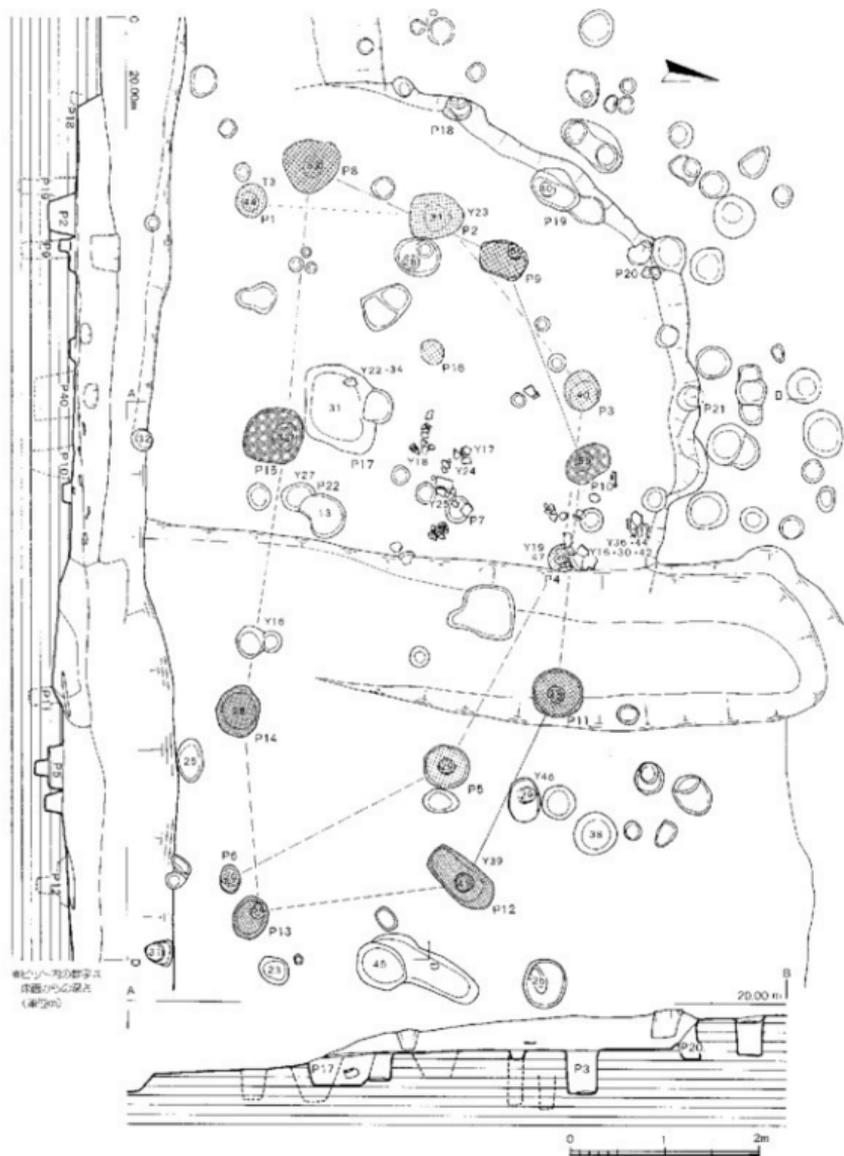
31 第1号住居跡出土遺物(縮尺1/2)

第2号住居跡（弥生時代）（32・33・40）

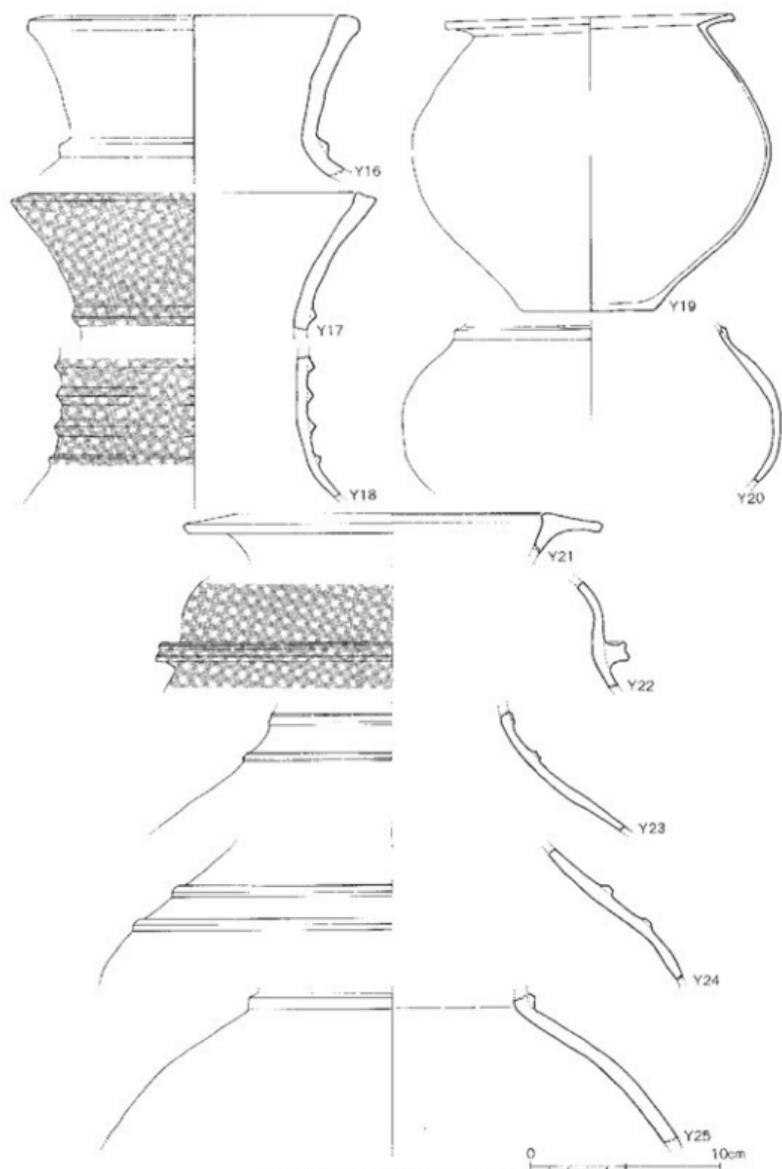
A・B-14・15グリッドの崖面で検出したもので、第5号住居跡と第3号住居跡のほぼ中間に位置しています。住居跡の南側は削り取られ崖面をなし、また東側には現代の畑の排水溝が走っており、全体の1/4強が残されているにすぎません。第1号住居跡に比べ壁の遺存状況は良好で、最も高い所で39cmを測ります。壁面には、屋外に向けて斜めにピットが掘られており、支柱と思われます。また住居跡外にもピットがあり、これらのうちのいくつかは同じ機能を考えるべきでしょう。床面は、ほぼ平坦面をなしており数10個のピットがあります。この柱穴の多さは、建てかえがあったことを物語っています。柱穴の埋土、あるいは切り合いなどでは建てかえの有無、あるいはその回数などは確認できませんでしたが、床面に散存する遺物を住居跡廃絶時のものとすれば、これら遺物の下部や床面下より検出したP4・7などの柱穴は、再建前のものと考えられます。特にP4の柱穴からは、器台形土器(Y47)に乗せた壺形土器(Y19)が逆さに転落した状況で出土しています。このP4とすぐ横のP10を基点に同一間隔の柱穴を結ぶと33図のように、少なくとも2回の建てかえが行なわれたことがわかります。しかも、2回目の建てかえの際には、床面が東寄りに拡張していることが推測されます。また床面積は広がっているものの、柱間距離は1回目が平均226cm、2回目が平均229cmと大差がありま



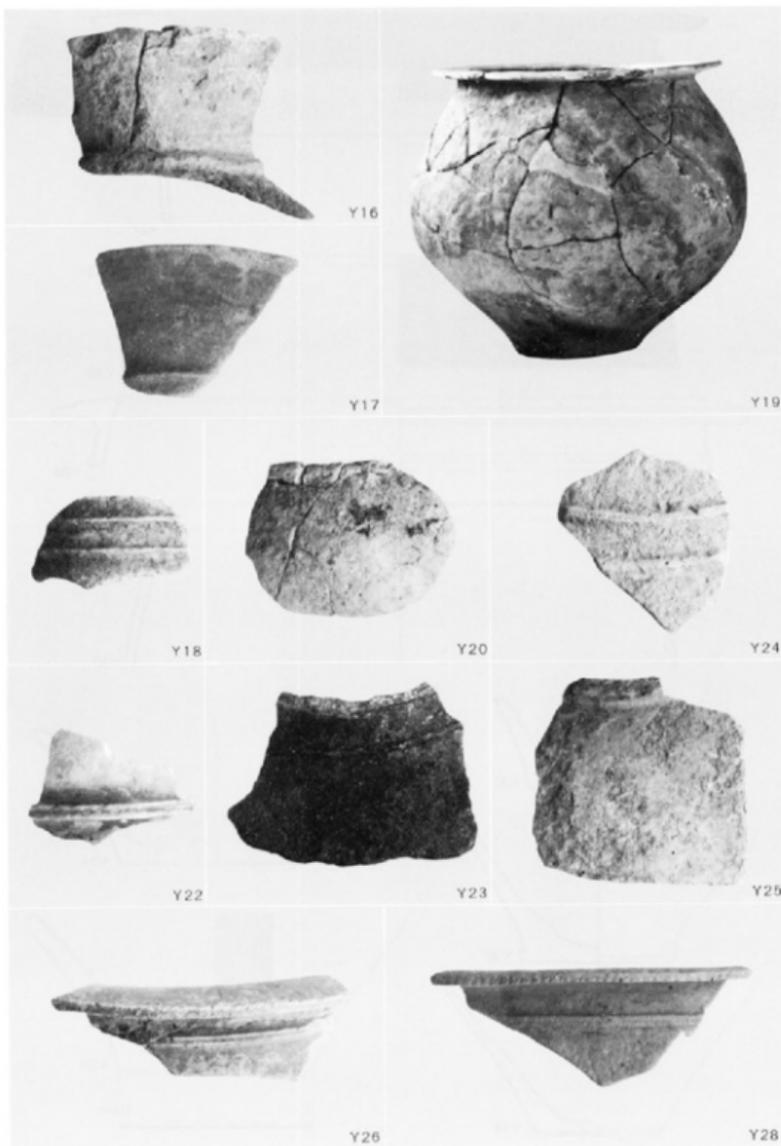
32 第2号住居跡（東から）



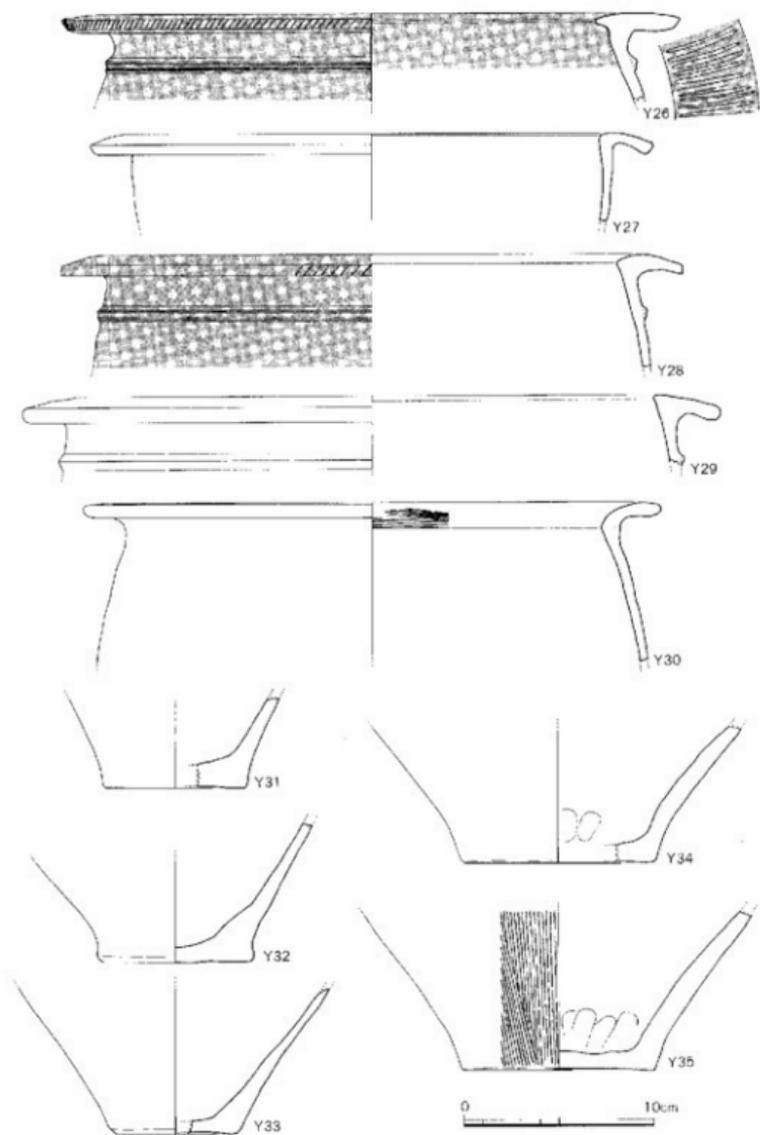
33 第2号住居跡検出図(縮尺1/60)



34 第2号住居跡出土遺物実尺図 (縮尺1/3)



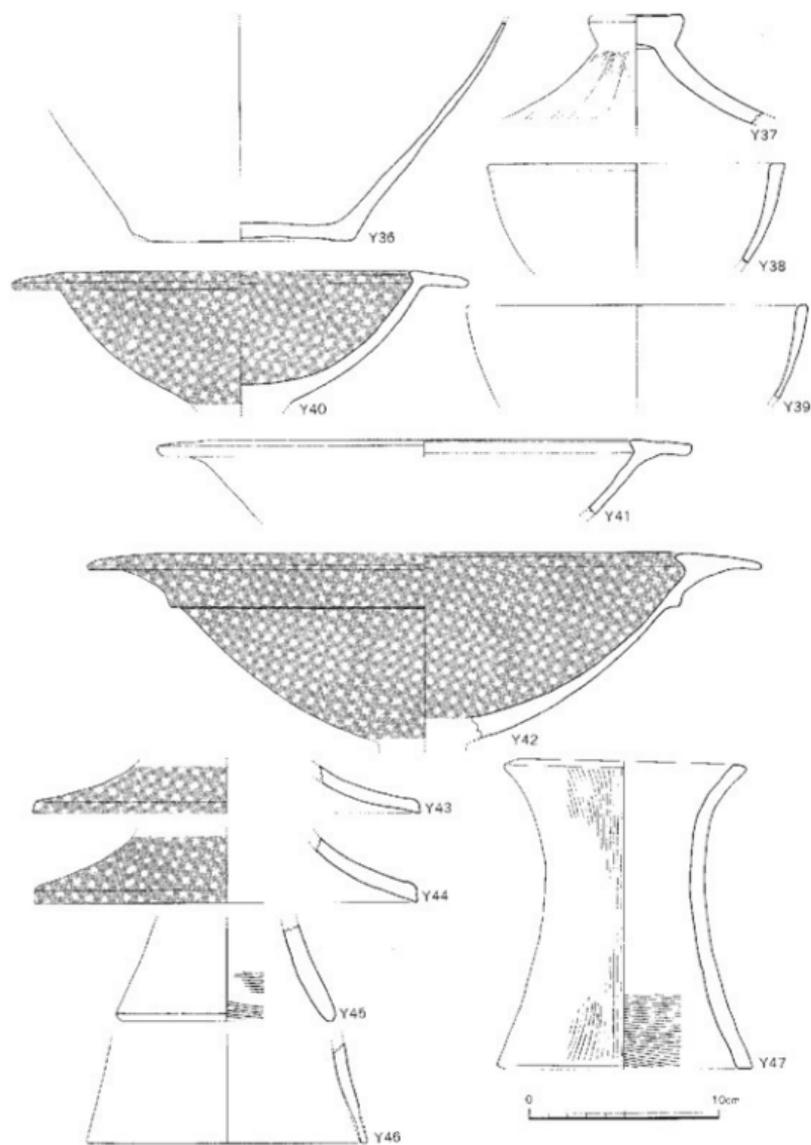
35 第2号住居跡出土遺物（縮尺1/3）



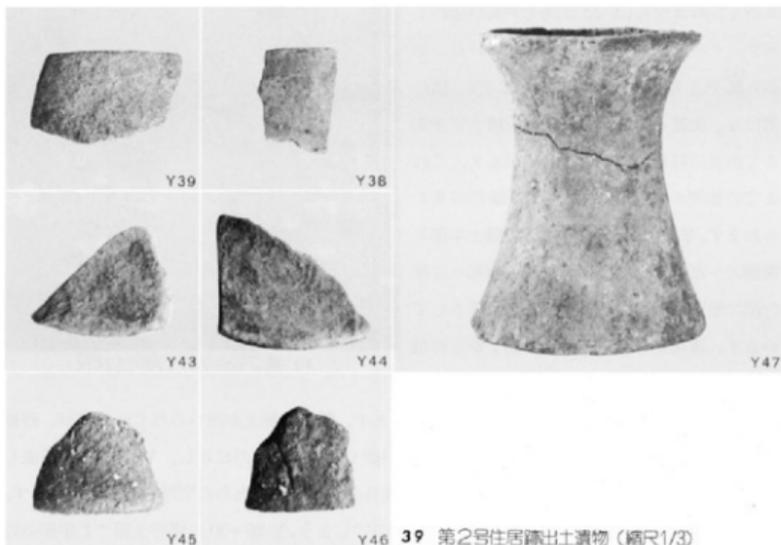
36 第2号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）



37 第2号住居跡出土遺物(縮尺1/3)



38 第2号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/3)



Y46 39 第2号住居跡出土遺物(縮尺1/3)

せん。改築後の住居跡の大きさは、P 8-13 を中心線上の柱穴とすれば長軸約 10 m、短軸約 8 m で、平面形は楕円形となります。P 16 は、焼土や炭化物が充満していましたが、中心部からはずれており、炉としては小さく浅いようです。

出土遺物 (34~39 表 137~140)

住居跡より出土した遺物のうち 32 点の土器と 2 点の石器を図示しました。これらの遺物は、住居跡の埋土、床面、柱穴より出土したもので、完形品は P 4 に転落していた Y 19 と Y 47 のみですが、床面出土の土器は出土場所を異にしても接合するものがありました。

土器 (Y 16~47) 壺形土器は Y 16~25 の 10 点、甕形土器は Y 26~30 の 5 点、高杯形土器は Y 40~44 の 5 点、器台形土器は Y 45~47 の 3 点、鉢形土器は Y 38・39 の 2 点、蓋形土器は Y 37 の 1 点と Y 31~36 の底部 6 点について、器形、調整などの特徴について記します。Y 16・17 の口縁部は外反しながら開き、頸部には同じように断面三角形の突帯がついています。Y 17 は精良な胎土が使われ、外面には丹塗痕が見られます。Y 18 は壺形土器の頸部で、断面三角形の突帯を 5 条巡らし、さらに丹を塗るなど装飾豊かな土器です。口縁部と胴部を欠いていますが、Y 17 のような口縁部があるいは Y 21 のような L 字形の口縁部がつくものと思われます。Y 19・20 は、いわゆる無頸壺で、胴部の最大径が中位にあり、胴上部に外反する小さな口縁部が接続するのが特徴です。Y 19 は完形品で器面は磨耗していますが、器壁は薄く作られ整った器形をしています。Y 20 には小さな突帯が認められることから、口縁部の形状にやや違いがあ

るかもしれませんが、Y 22 は胴上半部が括れており、その形状がヒョウタンに似ていることから瓢形土器と呼ばれているものです。括れ部には、突帯を1条巡らし、強く横ナデを加えて断面口唇形の突帯となっています。これまでの類例からY 21のような口縁部が考えられます。Y 23~25 は蓋形土器の胴上半部と頸部の一部です。Y 23 は胴部から頸部への移行部に断面口唇形の低い突帯を2条巡らしています。再建前の柱穴と考えたP 2からの出土です。Y 24 はやや下がった位置に2条の突



40 第2号住居跡土器出土状況

帯を巡らしていますが、断面は台形となっています。精良な胎土が用いられていますが、丹塗痕は見られません。Y 23・24 は頸部への移行が緩やかであったのに対し、Y 25 は強く屈曲し直立ぎみの頸部がつくと思われます。この屈曲部外面には断面三角形の突帯を巡らしています。Y 23~25 にはY 16~18のような口頸部がつくのでしょう。Y 26~30の壺形土器でL字形の口縁部となっています。Y 26 は精良な胎土が用いられ、口縁部内外面と胴部外面には丹塗りが施されています。口縁部は内側に小さく突出して幅広くなっています。上面には流水状にミガキが加えられ暗文風な効果を出しています。Y 27 は口縁外端部が下方に垂れぎみで、張りのない体部がついています。P 22の柱穴から出土しました。Y 28 は口縁下に断面口唇形の突帯を巡らしており、口縁外端部には左下がりの刻み目をつけています。胎土、焼成とも良好で外面には丹塗痕が見られます。Y 29 は内外面とも剝離が激しく砂粒が露出しています。口縁上面は外傾し、端部は丸くおさめています。Y 30の口縁部はL字形ではなく、上面が内傾してく字形となっています。上面には横ハケ目後に横ナデを加えています。Y 16・42はともに床面の同じ位置から出土しました。Y 40~42は高杯形土器の杯部で、口径は24.4~35.8cmと各々大きさが違いますが、口縁部の断面は同じように鋤先形をしています。Y 40は住居跡の中央部近くで出土したもので内外面ともに丹が塗られています。Y 41の口縁部上面は、わずかに外傾しています。杯部は湾曲せず直線的で、Y 42は大きな杯部で、口縁部内端の突出は鋭利となっており、口縁部下には断面三角形の突帯が巡っています。胎土には小さな砂粒が混入していますが、精良と言えるでしょう。杯部外面は剝離のため丹塗痕は認められませんが、内面は丹塗られていることから、もとは全面に塗付されていたものでしょう。Y 43・44は高杯形土器の脚裾部で、Y 44はY 36とともに床面から出土しました。底径は20.6cmと20.4cmと大差なく、端部のつくりや外面が丹塗りされるなどよく類似しています。Y 37は蓋形土器で、中央に直径5cmの円

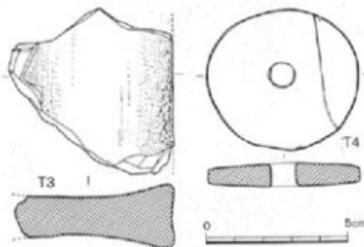
盤状つまみがついています。外面は縦ハケ目の調整がされています。Y 38・39は鉢形土器で、Y 38は埋土、Y 39は再建時の支柱穴と考えたP12から出土しました。口径は15.8~18cmで、同じように半球形の器形をしています。Y 45~47は器台形土器で、Y 45・47は柱穴から出土しました。Y 47は完形品で、体部中央が括れた鼓形をしています。外面の調整は、縦ハケ目で上端部だけは横ナデされています。内面下半部は横ハケ目です。Y 45・46ともに胎土には2~3mm大の砂粒が入っており、調整も粗雑です。Y 31~36は底部で、Y 36は床面から、Y 34はY 22と同じP17から出土しました。Y 33は精良な胎土が用いられており、外面は剣雑が進



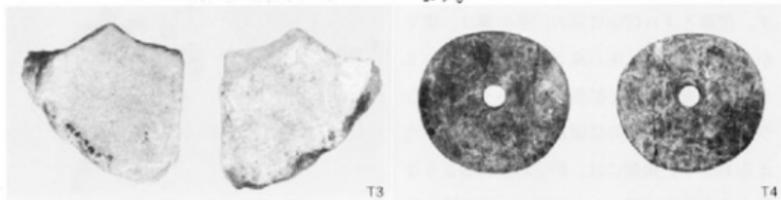
41 第2号住居跡土器出土状況

んでいますが丹塗りと思われれます。住居跡の北側で出土しました。Y 34・35は底径が約10cmとやや大きく、内面には指押え痕が認められます。Y 35の外面は、粗い縦ハケ目調整です。Y 36の底部は直径12.0cmで、わずかに上げ底となっています。

石器 (T 3・4) T 3は砥石の小破片で、石材は砂岩が用いられています。全形は知りませんが、いま3面が砥面に使用されていることからすれば、断面長方形の砥石と考えられます。いずれの面も使用されて凹状を呈しています。図裏面には、数本の条痕が見られます。T 4は糸に撚りをかける道具で、紡錘車と呼ばれています。直径約5.4cmの円形で、厚さは約8mmを測ります。中央には、直径約9mmの小孔が穿たれています。全面に研磨が加えられていますが、あまり丁寧ではありません。硬い滑石質の石材が用いられています。



42 第2号住居跡出土遺物 実測図 (縮尺1/2)



43 第2号住居跡出土遺物 (縮尺1/2)

第3号住居跡（弥生時代）（44～50）

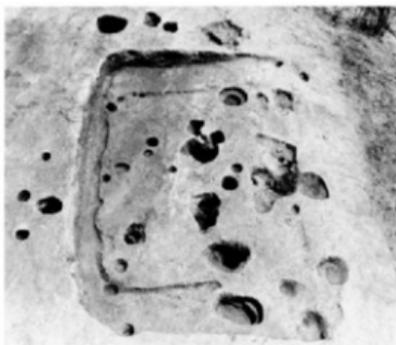
第3号住居跡は、第2号住居跡の東側約3m、第3号土器溜りより西に約10mに位置し、久保園遺跡では最も東端にある住居跡です。第1・2号住居跡と同じように、住居跡の南側は工事で削り取られています。住居跡内の遺物出土状況から見て、住居跡の遺存状況は良好といえます。平面形は、南側壁が失われていますが、東西方向に長軸をとる長方形で、4つの側壁のコーナーが丸みを持っていることから、いわゆる隅丸長方形と呼ばれる住居跡とすることができます。いま側壁の長さを計測できるのは、北側壁だけで約5mあります。短辺である東、西側壁の長さについては、柱穴のP1とP6を結ぶ線を住居跡の中心（長軸）線と考えて折り返すと、約4.8mの長さが推測されてきます。したがって約24㎡の面積を持っています。壁は、ほぼ垂直に掘り込まれており、遺存のよい北側壁の高さは約40cmを測ります。床面は、平坦で10数個のピットと壁にそって浅い溝が掘られています。ピットのうち、柱穴と考えられるのは、P1～12ですが、同時に主柱穴となっていたかは発掘作業によっては、判断できませんでした。それは床面の浅い溝を壁溝とするか床面の区画と考えるかによって違ってきます。壁溝とすれば中央部の□形の溝は、建てかえ前のもので、床の高さと北側壁はそのままにし、東西と南に拡張したということになり、自ずと主柱穴の位置が移動したことが考えられます。床面には、炉と思われるような焼土や炭化物は認められません。住居跡の外



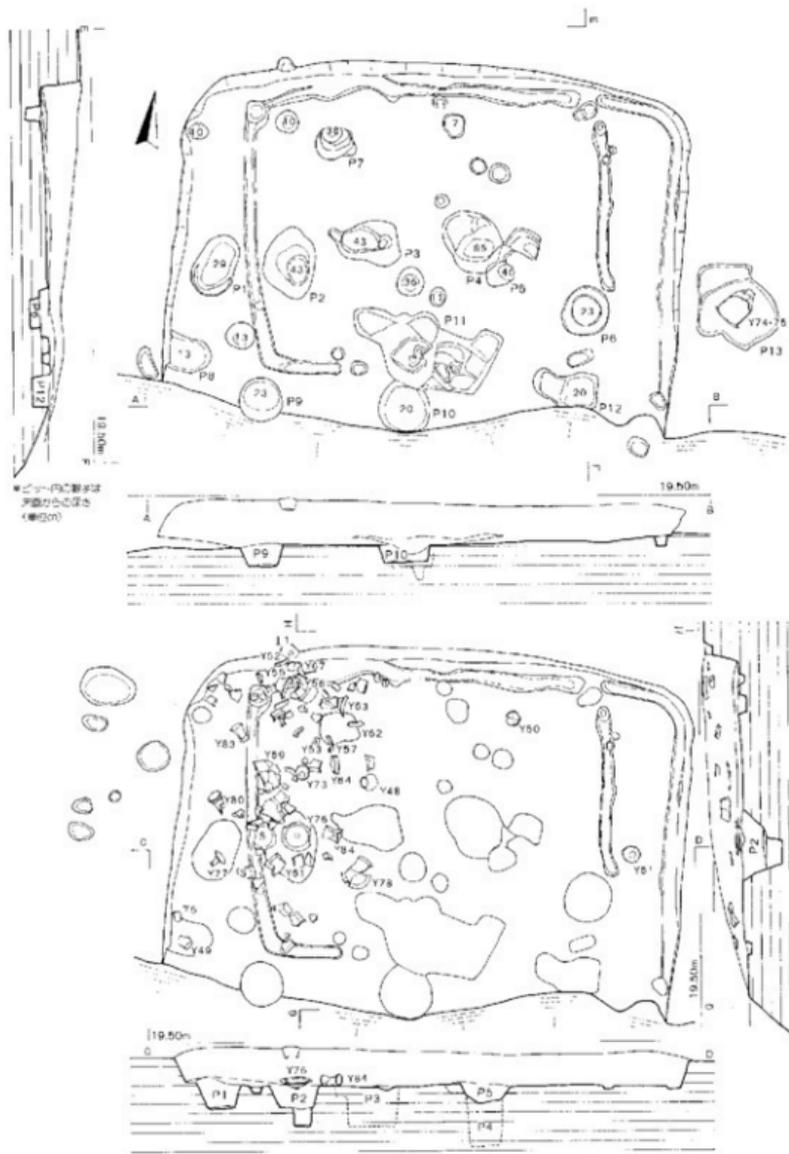
44 第3号住居跡発掘作業



45 第3号住居跡（西から）



46 第3号住居跡（遺物取り上げ後）



47 第3号住居跡実測図 (縮尺1/60)



側にもピットが掘られています。住居跡と直接関係するかは明らかではありません。住居跡外のP 13は不整形のピットで、壺形土器(Y 74)が置かれたような状況で出土しました。住居跡内からは、多量の土器が出土しましたが、その出土状況は、北西隅から南に向けて流れ込んだようにしており、ほとんどが床面より浮いています。これら遺物の出土状況や、土器の構成として祭祀用土器と考えられている丹塗り土器や大型の器台形土器が含まれていることから、住居跡廃絶後もなく、祭祀行為として意図的に捨てられた可能性を示しています。

出土遺物 (51~60 表 140~144)

住居跡から土器、石器、鉄器などの遺物が出土しました。これらの出土状況から住居跡廃絶後の祭祀行為を考えました。もし祭祀行為に用いられた遺物と、住居跡廃絶時の遺物とを区別できるとすれば、いつ祭祀がなされたかを明らかにすることになります。住居跡の東側寄りの床面直上より出土したY 50・51や、住居跡外側出土のY 74・75などは、祭祀行為以前の土器という可能性があります。

土器 (Y 48~84) 出土した土器には、壺形土器、甕形土器、高杯形土器、器台形土器の4器種があります。壺形土器はY 48~53の6点を図示しました。Y 48・49は大きさ、器形ともよく類似しています。Y 49の底部には、直径2.3cmの小孔があります。Y 50・51は胴下半部のみで、胴部の最大径が中位にある器形をしています。Y 50の外表面は丹塗りされ、Y 51は小さな底部が特徴です。Y 52・53は



48 第3号住居跡 (南から)



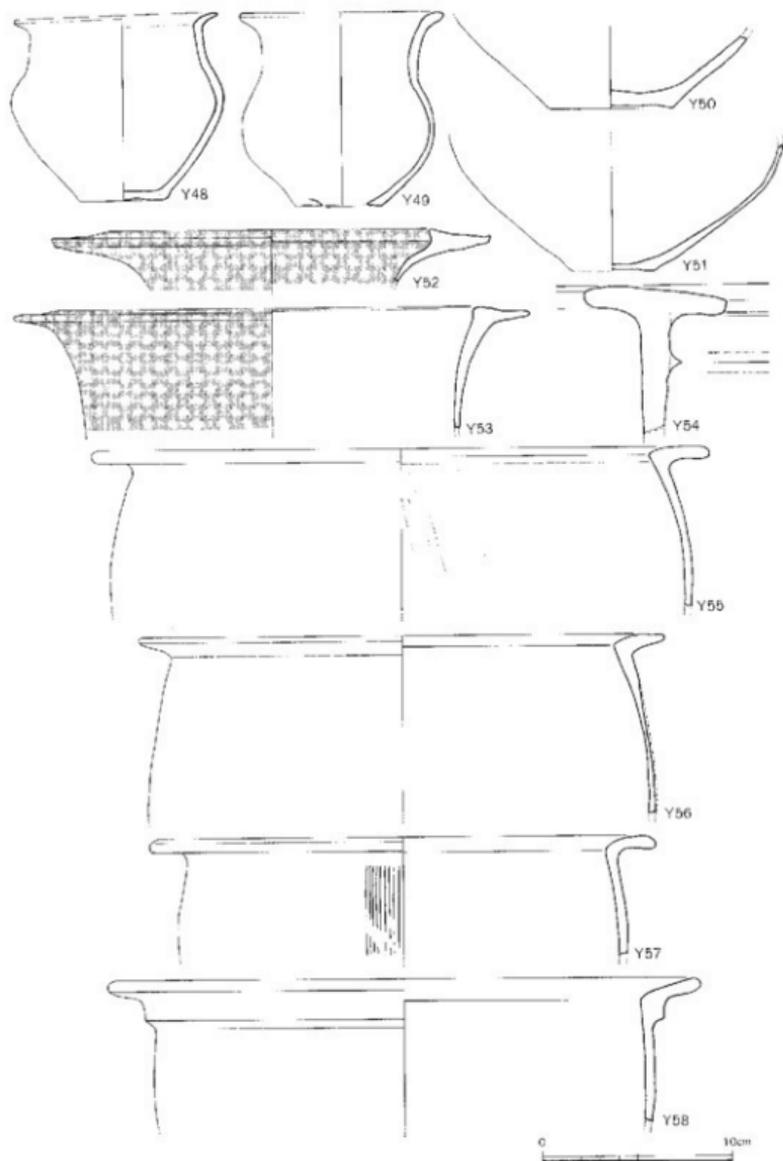
49 第3号住居跡遺物出土状況



50 第3号住居跡遺物出土状況 (Y74)

広口の壺形土器の口縁部で、口縁部断面は鋸先形をしています。Y 52の口縁部はシャープなつくりで、内外面とも丹塗痕が見られます。Y 53の頸部はY 52に比べ直線的となっています。Y 54~67・74の15点は壺形土器で、Y 74を除くすべてが完形品ではありません。Y 54はT字形の口縁部で、口縁部に断面三角形の突帯を巡らしています。小破片のために口径は測定できませんが、形状から推定して用いられる大型壺の口縁部と推測されます。Y 55~57の口径は、26.8~33 cmを測り、やや内傾する逆L字形口縁を持っています。Y 56・57の口縁部上面は平坦でなく、特にY 57の口縁部内端は丸みがあります。3個とも胴部上位にわずかながら張りが見られます。Y 58の口縁部はく字形に外反し、屈曲部外面には、やや下方に垂れぎみの断面三角形突帯を巡らしています。このため肥厚した口縁部となっており、他に比べ異質な器形となっています。Y 59~61の口径は24.2~30 cmと各々異なりますが、く字形口縁、胴部最大径の位置など同じ特徴を持っています。Y 60・61の器面調整は剝離のため観察できませんが、Y 59は口縁部が横ナデ、胴部は縦ハケ目調整です。Y 62~65の口径は38.4~48 cmを測ります。いずれも胴上半部が強く内傾しており、倒卵形の胴部になると思われます。Y 62の口縁部はく字形で強く屈曲しています。口縁部下には断面三角形の突帯を巡らし、外面には丹を塗付しています。Y 63・64も同じようにく字形口縁ですが、口縁部の立ち上りは外湾ぎみにのびています。Y 64には張りの小さい胴部がつくのでしょうか。Y 65の口縁部立ち上りは、Y 63・64のように外湾ではなく、逆に外湾ぎみにのびており、口縁部外端は口唇状となっています。Y 66・67は口縁端部が上方に小さく突出していることから跳上げ口縁と呼ばれているもので、弥生時代後期土器の特徴の一つといわれています。口縁屈曲部は丸みがあり、Y 67の器面は剝離していますが、器壁は約3 mmと薄いつくりとなっています。Y 74・75は住居跡外側のピットから出土したもので、器高42 cmの完形品でしたが接合復原できませんでした。Y 76~79は高杯形土器です。Y 76の杯部は、口径26.6 cm、深さは5.1 cmを測り、内外面とも丹塗りが施されています。Y 78は口径30.4 cmと大きく、外面には断面台形の突帯がついていますが、Y 42のように三角形だったと思われます。Y 77~79は脚座部で、Y 77の内側には絞り痕が見られます。Y 80~84の5点は器台形土器で、Y 83・84は完形品です。Y 81~84は鼓形を呈し、やや雑なつくりをしています。Y 80は下半部を欠いているために全形を知りませんが、Y 83・84のような器形ではなく、体部中央は円筒状に長くのび、裾部は大きく開くものと考えられます。外面には断面口唇形の突帯が巡り、丹塗りがされています。類似する器形の土器は第1号土器窟で出土していますが、福岡平野での発見例は知られていません。

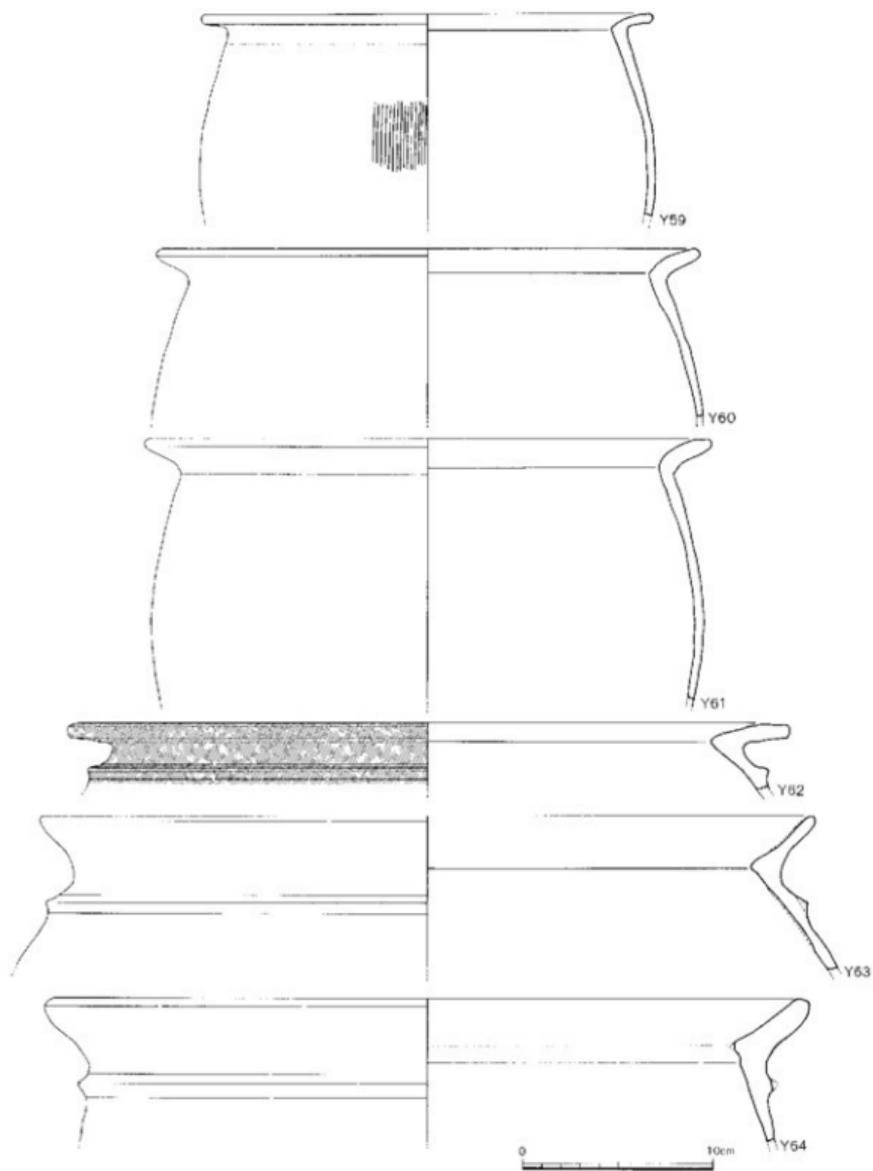
石器 (T 5~7) 住居跡には多くの土器とともに人頭大の石が出土しましたが、3点を石器と判断しました。T 5は滑石製で、側面に擦り痕が見られますが用途は不明です。T 6・7は粘板岩の砥石です。いずれも破片となっていますが、表、側面が砥面に使われています。



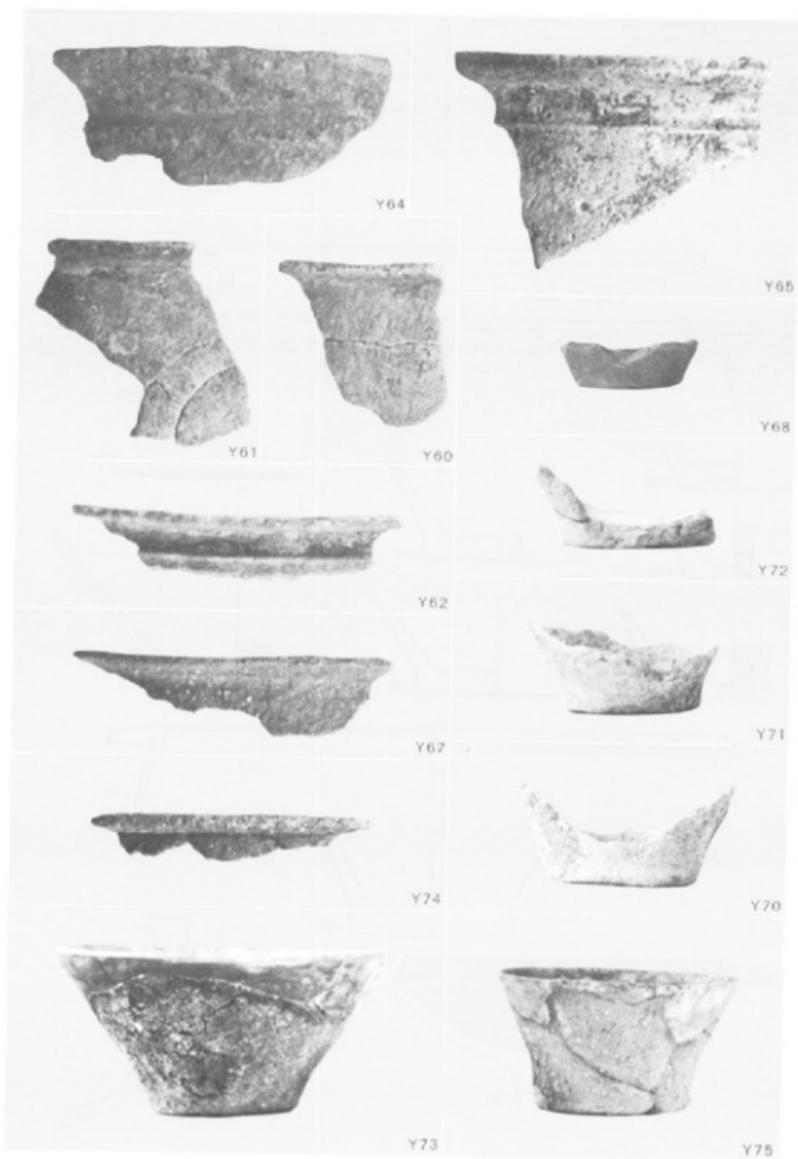
51 第3号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）



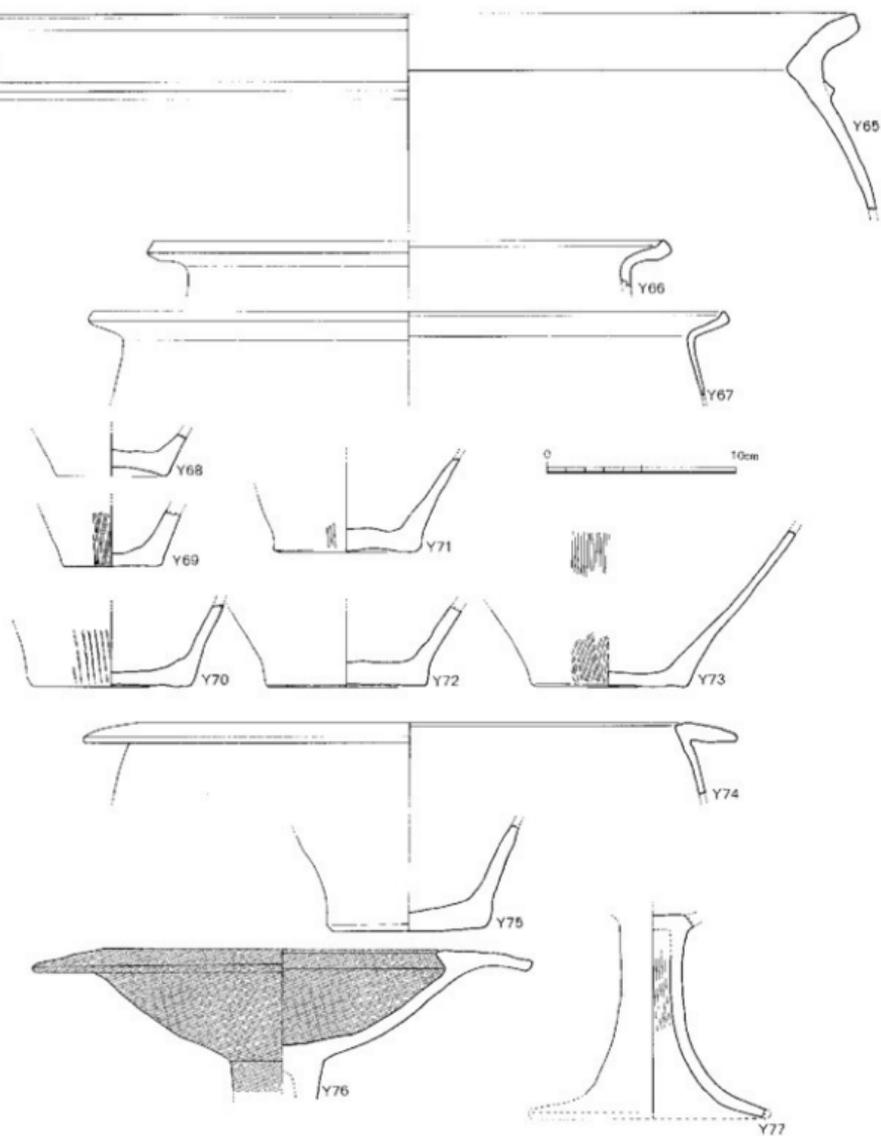
52 第3号住居跡出土遺物（縮尺1/3）



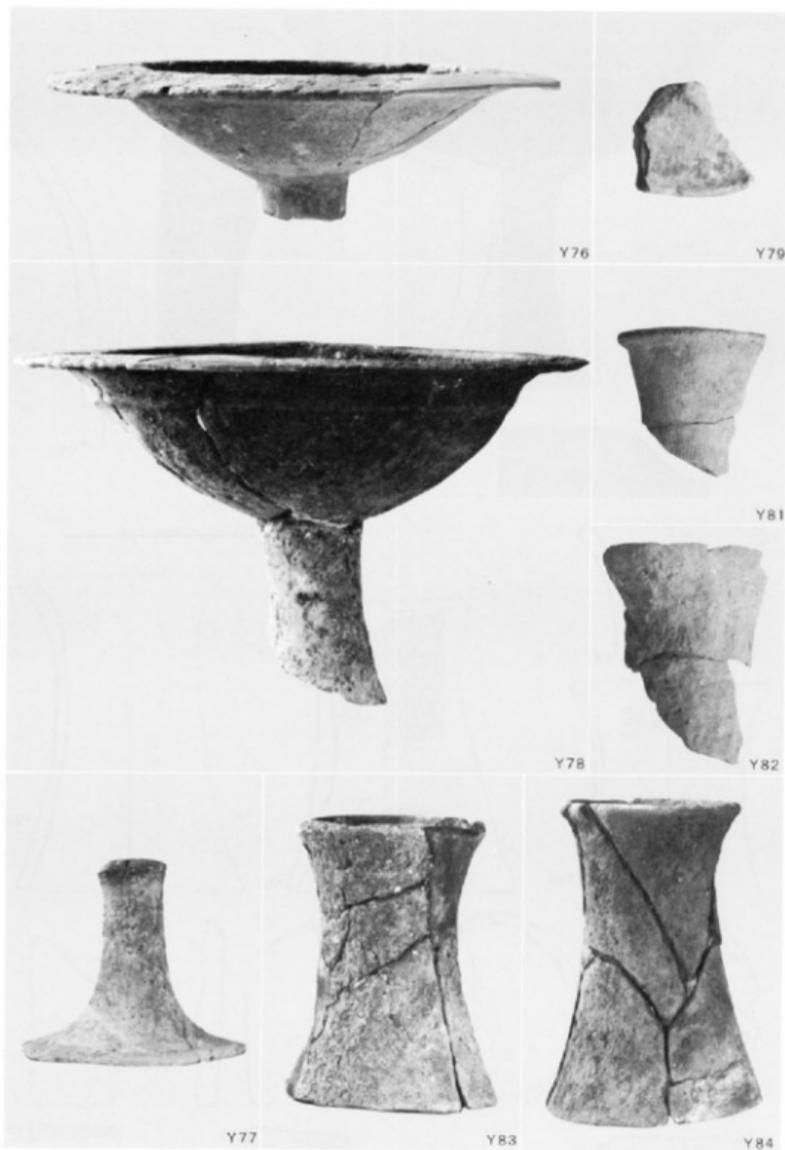
53 第3号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/3)



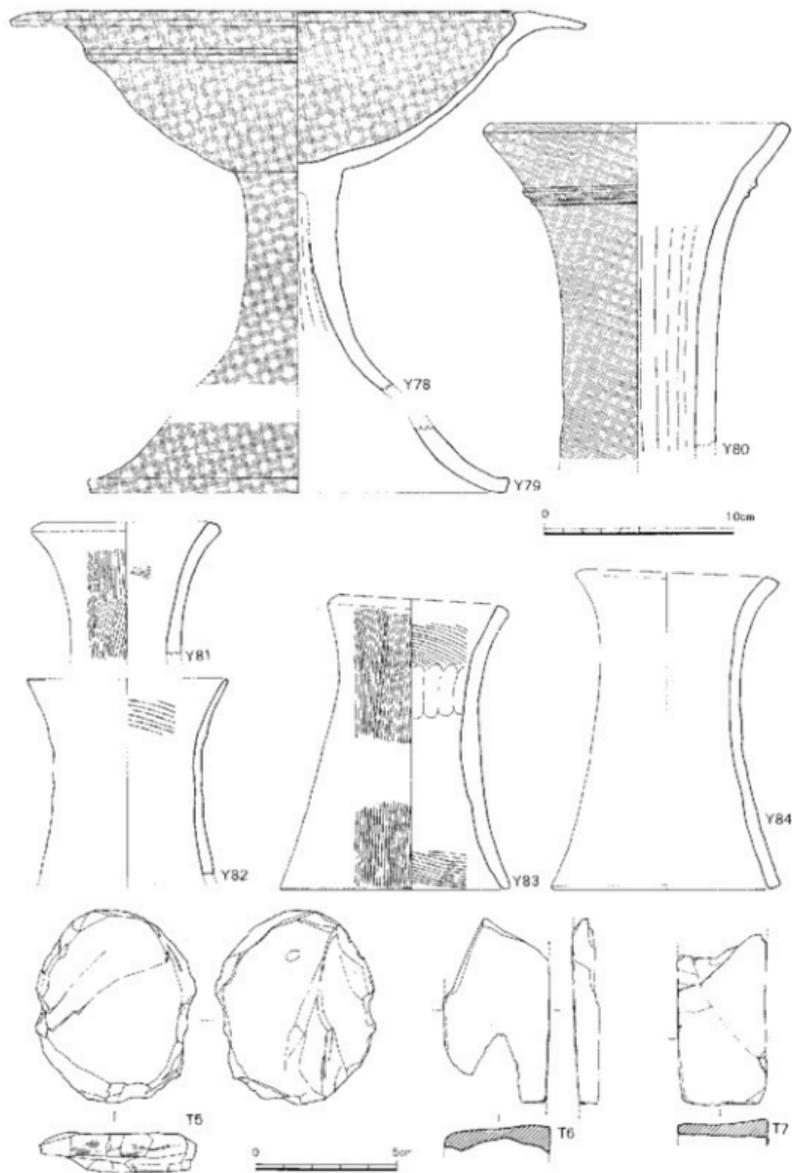
54 第3号住居跡出土遺物(縮尺1/3)



55 第3号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）



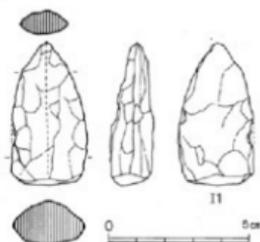
56 第3号住居跡出土遺物（縮尺1/3）



57 第3号白土跡出土遺物実測図(縮尺 $2/3$)



▲ 58 第3号住居跡出土遺物
(縮尺1/2)



59 第3号住居跡出土遺物実測図
(縮尺1/2)

鉄器 (I 1) ほぼ完形ですが、発掘時に一部傷を受けています。しかし、全面が錆びており、細かな観察は不可能です。現在長は4.1cm、最大幅2.6cm、厚さ1.5cmを測ります。形状を三角形の鎌状を呈しており、あまり明瞭ではありませんが、^{ノコ}鋸や刃部が一部認められます。鍛造品でしょう。この鉄製品は、住居跡北壁の小ピットから出土したことから、他の遺物と同じように住居跡に伴うかは連断できません。

60 第3号住居跡出土遺物 (縮尺1/3)

第4号住居跡（弥生時代）(61・62)

第1～3号住居跡が、ほぼ同じ等高線上に作られているのに対して、第4号住居跡は約2.5 m高い所に位置しています。住居跡の南側は、後世の畑開墾によって崖面となっており大きく削り取られています。検出したのは三角形状に2つの側壁とコーナーのみなので、住居跡の規模については明確にできません。住居跡の平面形は方形でコーナーは丸みがありません。西側壁の長さは約6.2m、東側壁は約7mを測ります。東側壁の崖寄りには、浅く張り出して掘られており、住居跡との切り合いは認められなかったことから住居跡付設の張り出し遺構と考えました。住居跡のほぼ中央には炉と思われるピットがあり、焼土と炭化物が充填していました。西側壁にそって、幅約1.3m、高さ約25cmのベット状の高まりが見られますが、このベット状遺構は、床面を平坦にした後で改めて盛土をして作り出しています。床面のピットはP1・2・4が柱穴と考えられ、東側壁に接しているP3は、貯蔵用の屋内土塚と思われます。また床中央部は、わずかながら方形に窪んでいることから、建てかえを考える必要があります。

出土遺物 (63～66 表144・145)

住居跡内からは、土器と石器が出土しましたが、ほとんどが埋土中より出土したもので床面より直接出土したのはY89の1点にすぎません。

土器 (Y85～91) 図示したのは、壺形土器 (Y85～87) 3点、器台形土器 (Y88) 1点、底部 (Y89～91) 3点の計7点です。Y85は埋土の上部層で出土したもので、く字形口縁を呈しています。頸部外面には断面三角形の突帯を1条巡らしています。Y87も同じようにく字形口縁で、断面三角形の突帯がありますが、口縁部の立上りがY85が外湾しながらのびているのに対して、Y87は内湾ぎみにのび、端部は口唇状を呈しています。Y86は張りの小さい胴部に細長いく字形の口縁部がついています。器面は残りが悪く調整痕は観察することができません。

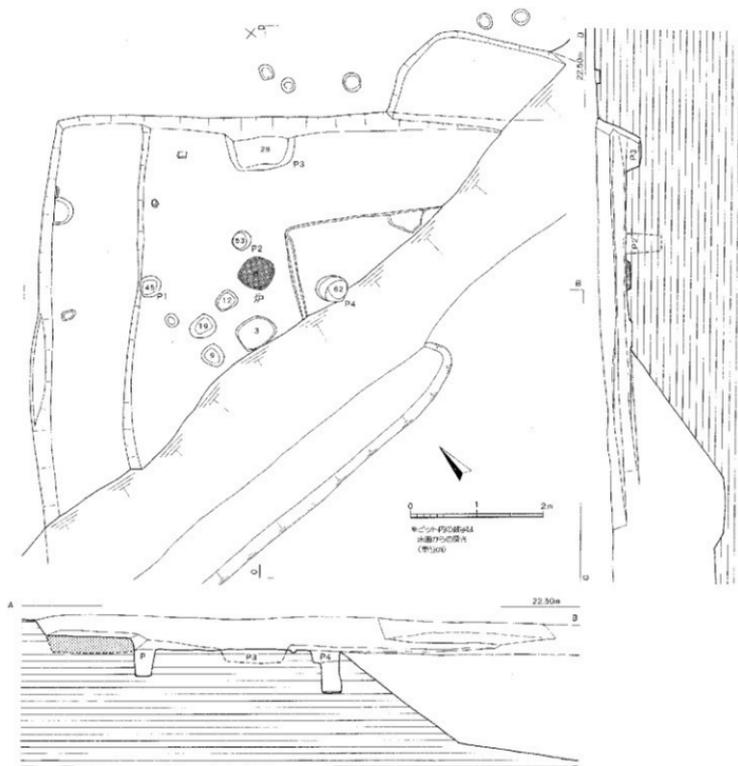
埋土の床面に近い下部層より出土しました。

Y88は埋土の最上部からの出土で、全面が剝離していることもあって器台形土器としては、薄い器壁となっています。3点の底部は、Y89・90が平底で、Y91は丸底です。

石器 (T8・9) 粘板岩製の砥石が2点出土しました。T8は長さ6cmの破片となっています。砥面は1面のみが残されていますが、砥面にやや脹みが見られることから未製品とされます。T9は埋土の中層で出土したも



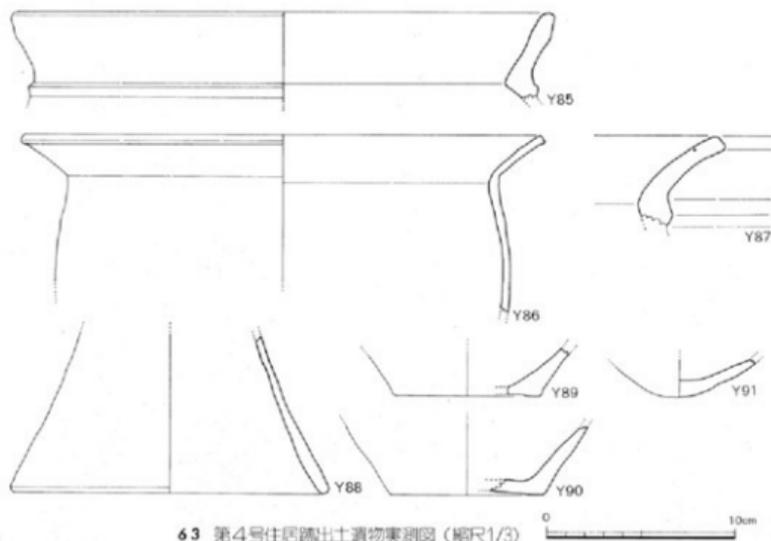
61 第4号住居跡(南から)



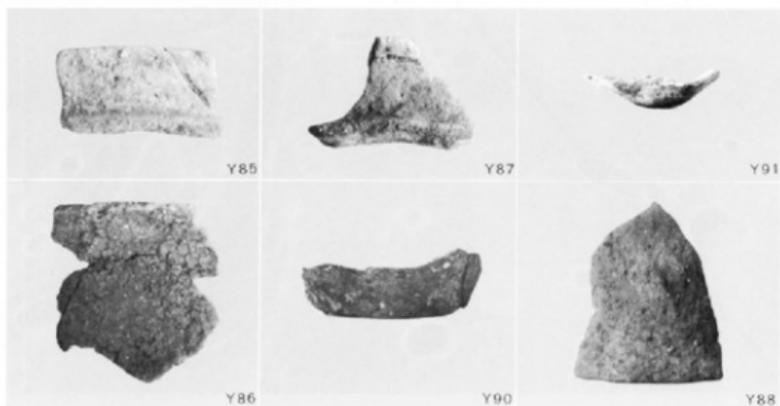
62 第4号住居跡平面図（縮尺1/60）

ので、方柱状の仕上げ砥石です。4面とも砥面に使用されています。

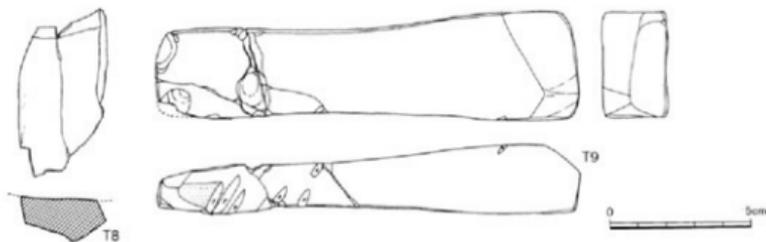
これら出土遺物の多くは、住居跡廃絶後に自然に流れ込んだことを示しており、直接に住居跡の時期を決定するには数量的にも充分とは言えませんが、住居跡の形態などから、第4号住居跡の時期は弥生時代後期と考えられます。



63 第4号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/3）



64 第4号住居跡出土遺物（縮尺1/3）



▲ 65 第4号住居跡出土遺物実測図
(縮尺1/2)



T9 ◀ 66 第4号住居跡出土遺物 (縮尺1/2)

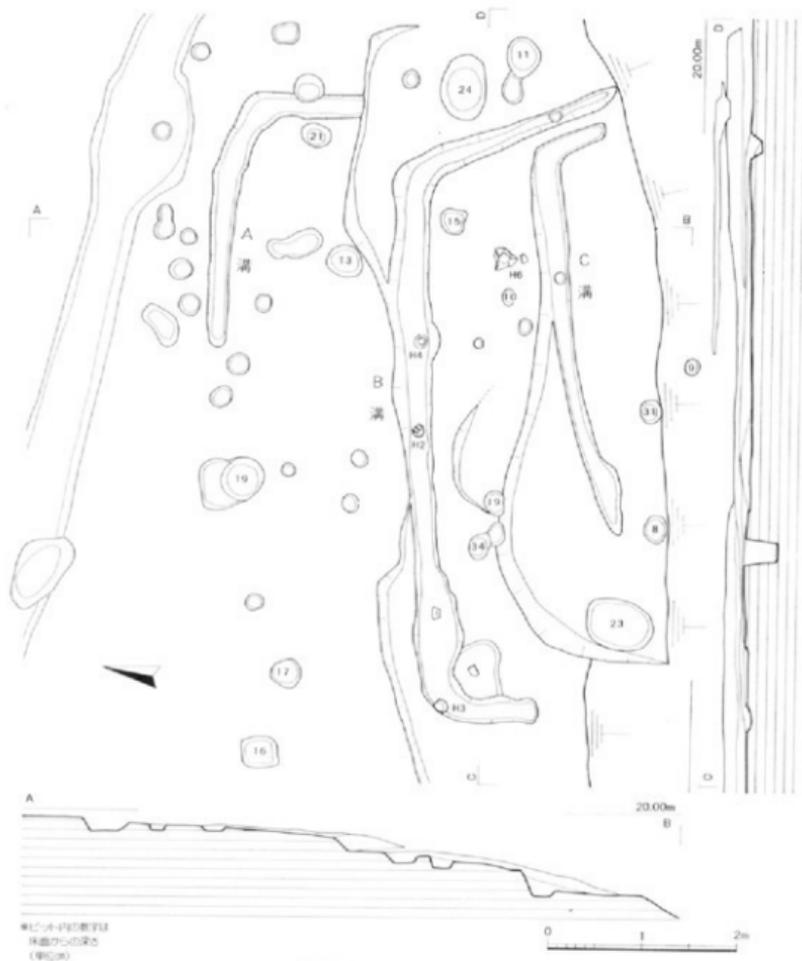
第5号住居跡 (古墳時代) (67・68・71)

第5号住居跡は、第1号住居跡と第2号住居跡のほぼ中間に位置し、同じように南側は工事のために崖面をなしています。他の住居跡のように明瞭な掘り方が残っているわけではなく、

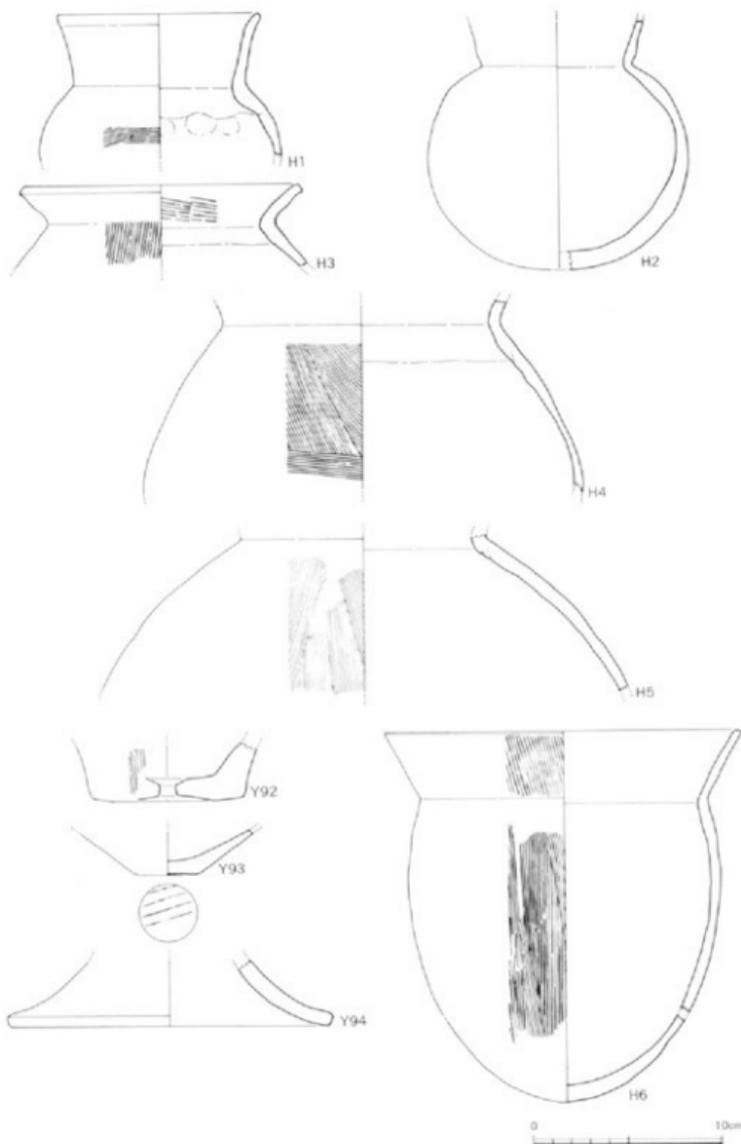


67 第5号住居跡 (西から)

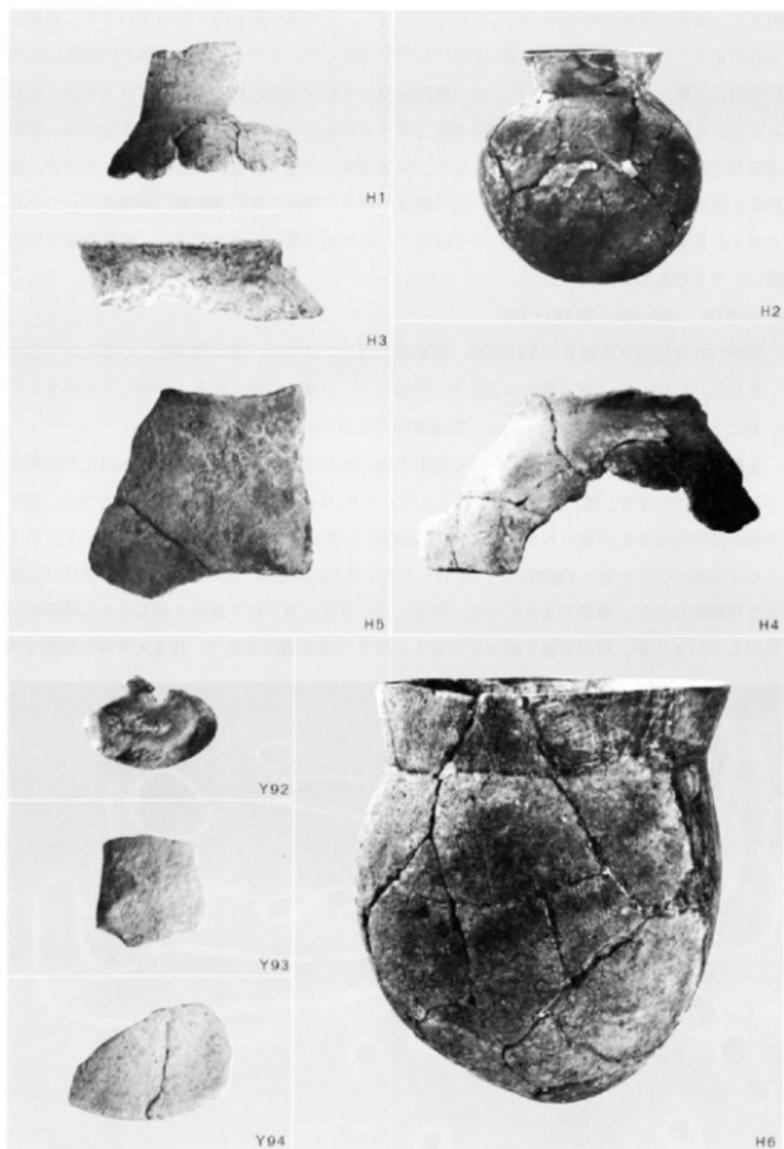
L字形、コ字形をした3本の溝が残っているにすぎません。これらの溝が住居跡の壁溝、あるいは外部の排水溝であった可能性から、住居跡として取りあげました。いま3本の溝を北側よりA、B、C溝と呼ぶと、A溝はL字形で全長約3.7m、幅約30cm、深さ約15cmを測り、いくぶん南側に向かって低くなっています。遺物は出土していません。B溝は南側に開くコ字形で、全長約8.8m、幅約40cm、深さ12~17cmで、H2・3・4などの遺物が出土しました。



68 第5号住居跡実測図(縮尺1/60)



69 第5号住居跡出土遺物実測図(縮尺1/3)



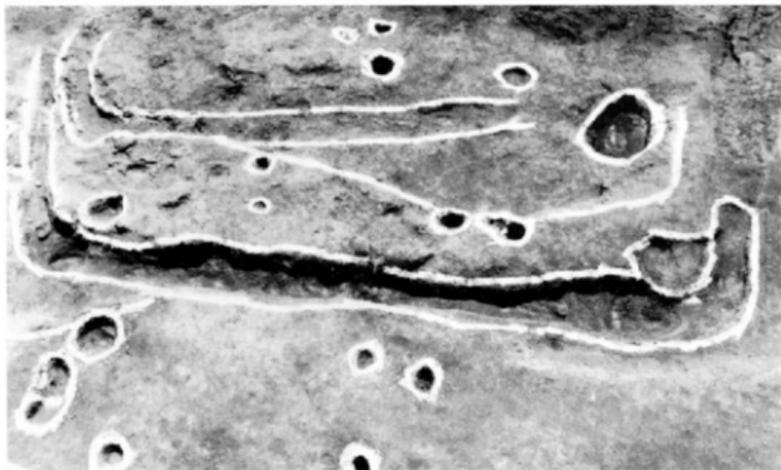
70 第5号住居跡出土遺物（縮尺1/3）

溝底は、両側の崖面に向かって低くなるのではなく、北東隅が最も低くなっています。C溝は全長約4.7 幅約35cm、深さ約21cmでL字形を呈しています。これらの溝を他遺跡の住居跡壁溝と比較すると、やや幅広く、かつ溝の内側に支柱穴と思われるようなピットも見られないことから壁溝ではなく住居跡外の排水溝とする方が妥当のようです。このような例は、席田遺跡群内の住居跡では珍しいことではなく、中尾遺跡や赤穂ノ浦遺跡で発掘例があります。傾斜面を住居跡の立地に選んだために、排水溝は不可欠な施設で席田遺跡群の特殊性の一つと言えます。3本の溝は同時に掘られたのではなく、時期差を考えるべきですが、発掘作業では明確にできませんでした。

出土遺物 (63~66 表145・146)

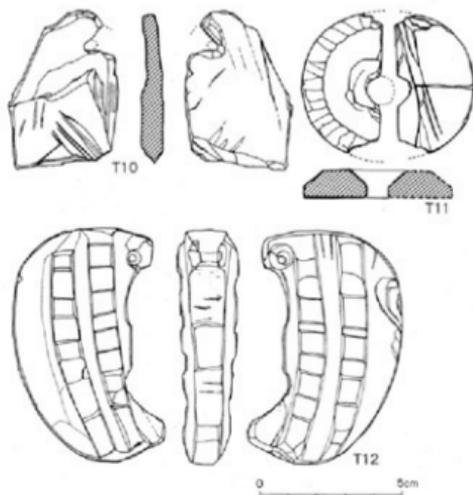
図示した9点のうちH2~4はB溝、H6はB溝とC溝の間、他は崖面近くの覆土より出土しました。T10~12の滑石製品は崖面からの出土で、崩落土の中には多くの滑石片が含まれていたことから、住居跡内での祭祀か、製造跡の可能性あります。

土器(Y92~94 H1~6) Y92は壺形土器の底部で、焼成後に直径約1cmの孔が外側から穿孔されています。甗（かま）に使われたのでしょうか。Y93は直径約3cmの小さな平底をなし、底部外面には平行な条痕が見られます。Y94は高杯形土器の脚裾部と考えられる破片です。H1~6は古墳時代の土器(土師器)で、H1・2は小型丸底の壺形土器です。H1の口縁部は頸部より直線的にのび、端部でさらに小さく外反しています。H2の口縁部も同様に直線的に外反していますが、頸部が強く縮っています。H3~6は壺形土器で、H4・5は口縁部を欠



71 第5号住居跡(北から)

いていますが、く字形の口縁部がつくのでしょう。H3の器面は、体部外面は粗い縦ハケ目痕が見られ、内面はヘラ削りされています。H4も同じように体部外面はハケ目調整痕が認められますが、下半部は横方向となり、内面もヘラ削り後に横ナデが加えられています。H5の体



72 第5号住居跡出土遺物実測図（縮尺1/2）

部には張りがあり、球形に近い形状を呈しています。H6は直接的には口縁部に、張りのない長い体部が着くもので、底部は丸底となります。口縁部は横ナデ調整され、外面のハケ目は消されています。

石器（T10～12） いずれも滑石が用いられています。T10は厚さ約7mmの扁平な石材で、分銅形の形状を呈していますが欠損していますが上部には直径約3mmの小孔があり、垂飾品としての機能が考えられます。T15も同じ形状ですが、両面が研磨されているのに対してT10は凹凸がめだち、未製品のようなです。T11はT4と同じ紡錘車で、全形の半分が欠けています。復原直径は約2.6cmで断面台形を呈し、加工痕がよく残っています。図裏面には条痕が見られます。T12は勾玉の背や脇に突起があることから小持勾玉こもちかぎたまと呼ばれています。腹の突起は約2mmの高さに削り出されています。脇は高さ約4mmの2列の帯をつくり、さらに各々の帯には、5個の台形状の突起をつくっています。頭部には、直径3mmの小孔が穿たれています。



73 第5号住居跡出土遺物（縮尺1/2）

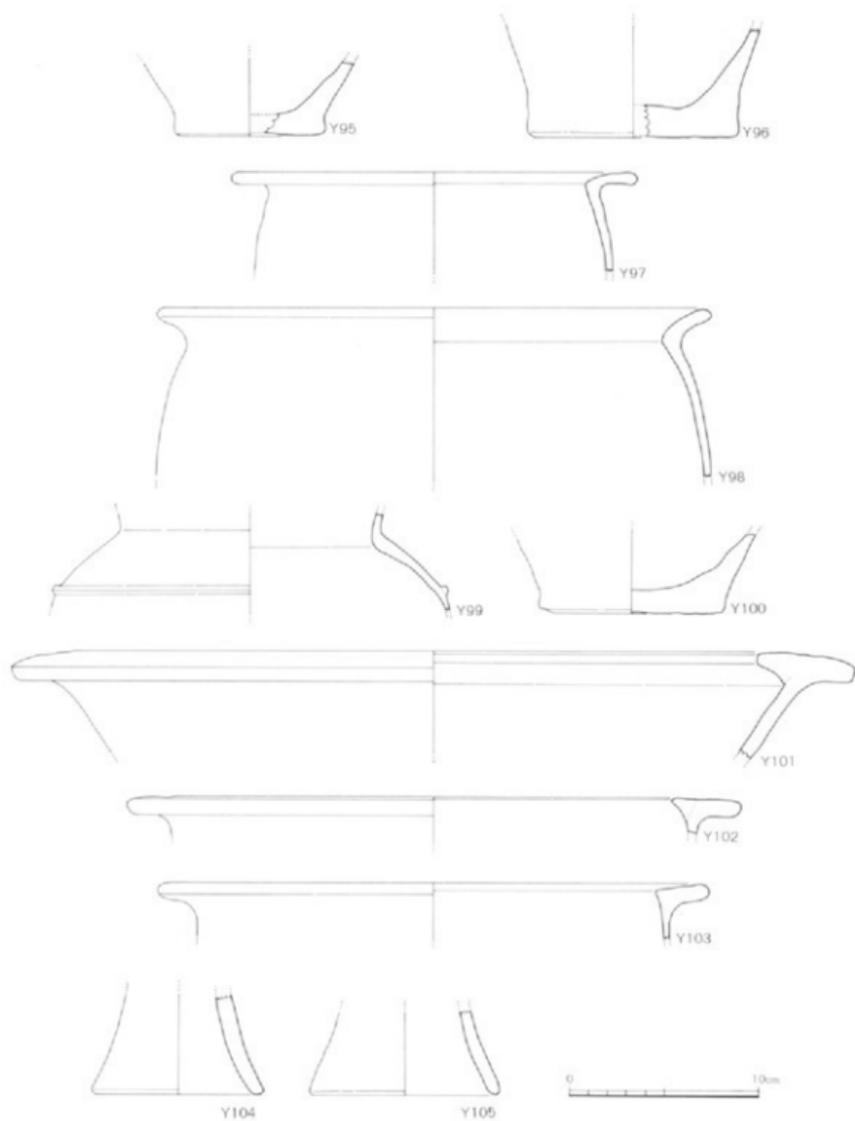
2 掘立柱建物

第1号掘立柱建物（弥生時代？）（74・75）

発掘区のほぼ中央部で2棟の掘立柱建物が重複して検出されました。掘立柱穴の切り合いから新しい時期の建物を第1号とし、古い時期の建物を第2号と呼びました。第1号掘立柱建物の中央部より南西側は、開墾で大きく削平され、また一部が畑の溝によって切られるなど、遺存状況は良好とは言えず、掘立柱穴の検出作業には多くの時間を要しましたが、8間×5間の側柱だけの南北棟建物としてとらえることができました。規模は、桁行が東側柱列で14.10m、西側柱列で14.10m、梁行は北側柱列で8.50m、南側柱列で8.74mを測り、整った長方形とはなっていません。方位は西側柱列で、磁北より18度西へ振れています。各々の柱間距離の平均値は、桁行が約176cm、梁行が約170cmを測ります。しかし柱間距離は等間隔とはなっていません。したがって各柱穴は、平行関係をなしていません。掘立柱穴の最も遺存がいいのは建物北東部のP1～4・25・26などです。P1の大きさは、約125×107cm、深さは65cmを測り、長方形のプランを呈しています。柱根は残っていませんが、その痕跡から直径約20cmの柱材が使用されたと思われます。長方形の掘立柱穴は、桁側柱列では長軸を東西方向にとり、梁側柱列では長軸を南北方向にとるという特徴もっています。また柱をこの掘り方の中心に置くのではなく、桁側柱列では建物の内側に、梁側柱列では建物の外側に片寄せています。各掘立柱穴の断面観察によると、P10・11・16・22を除くすべてにおいて柱根跡が認められます。また掘立柱穴内は柱を据えてから土を埋め戻していますが、P2・7・26は先にある程度埋め戻してから柱を据えています。ほとんどの掘立柱穴の壁はほぼ垂直に掘られています。P25・26は階段状となっています。同じような掘立柱穴が建物の中央にあり、第1号掘立柱建物に付帯するものかは、建物の上部構造と関係することで、いま明らかにできません。



74 第1号掘立柱建物（西から）



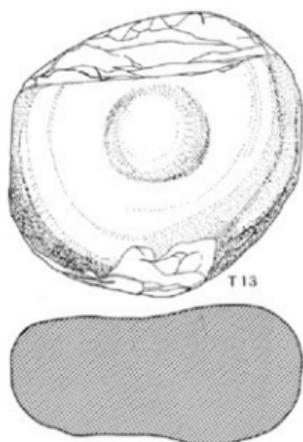
76 第1号掘立柱建物出土遺物実測図(縮尺1/3)

出土遺物 (76~78 表146・147)

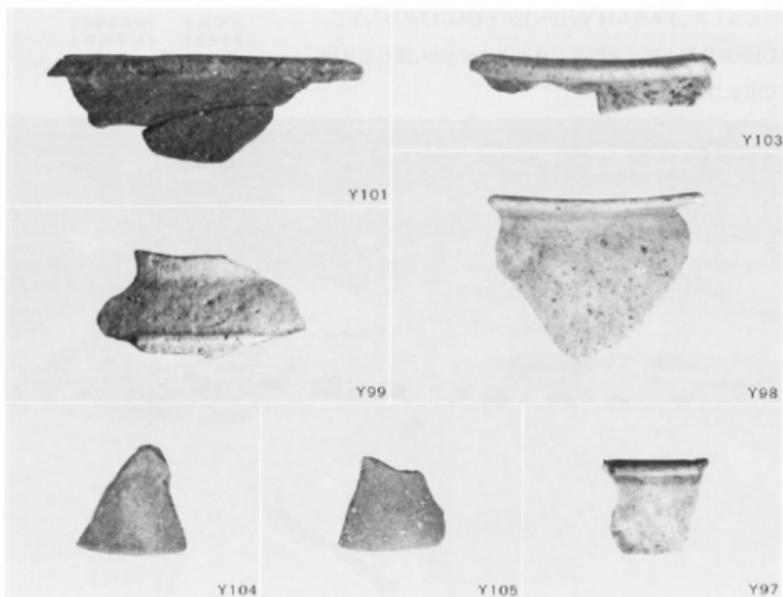
掘立柱穴という性格から、出土遺物は少量でかつ細片となっていました。Y95はP23から、Y96~98はP25から、Y99~101はP26から、Y103~105はP27から、またT13はP19から出土しました。

土器 (Y95~105) Y97・98・102・103は甕形土器で、Y97・98は上位に張りのある胴部にく字形の口縁部がついています。Y102・103はL字形口縁部の細片です。Y99は壺形土器の胴上半部で、断面台形の突帯を巡らしています。Y101は広口の壺形土器口縁部で、口径は44.8cmを測ります。Y104・105は器台形土器で、全面が剥離しています。

石器 (T13) 花崗岩質の円礫で、両面の中央部が約2mmの深さに敲打されて窪んでいます。



▲ 77 第1号掘立柱建物出土遺物実測図 (縮尺1/2)



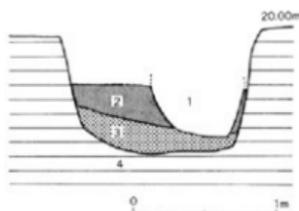
78 第1号掘立柱建物出土遺物 (縮尺1/3)

第2号掘立柱建物（弥生時代？）（79～81）

第1号掘立柱建物の北東部で重複し、第2号掘立柱建物の掘立柱穴P6が第1号掘立柱建物の掘立柱穴P1によって切られていることから、第1号掘立柱建物より古い時代の建物とすることができます。第2号掘立柱建物の規模は、桁行2間×梁行1間で、桁行の長さは東側柱列が7.60m、西側柱列が7.60m、梁行の長さは北側柱列が4.06m、南側柱列が4.06mを測ります。桁行の柱間距離は3.80mですが、P3の位置は柱列からややずれています。掘立柱穴は、第1号掘立柱建物で隅丸長方形の整ったプランをなすのが多かったのに対して、第2号掘立柱建物は不整形で、やや大きめの掘立柱穴となっています。柱痕跡が残っているP1の大きさは、0.75×0.70mで隅丸長方形のプランを呈しています。断面を観察すると、掘立柱穴は基盤層の粘質灰色土を深さ約95cm掘り込んでいますが、柱は灰黄茶褐色土を埋めた後に据えています。柱痕跡の直径は約50cmを測り、P4の柱痕跡はやや小さく直径35cmを測ります。

出土遺物（82～84 表147・148）

掘立柱穴P1・3・5・6から出土した17点の土器を图示しました。P6からはY110～120・122の12点が出土し、Y120の壺形土器は完形品ではありませんが、潰れた状況で出土しました。



1 茶褐色土 3 灰黄茶褐色土
1 黄茶褐色土 4 粘質灰色土

79 掘立柱穴断面図（縮尺1/40）



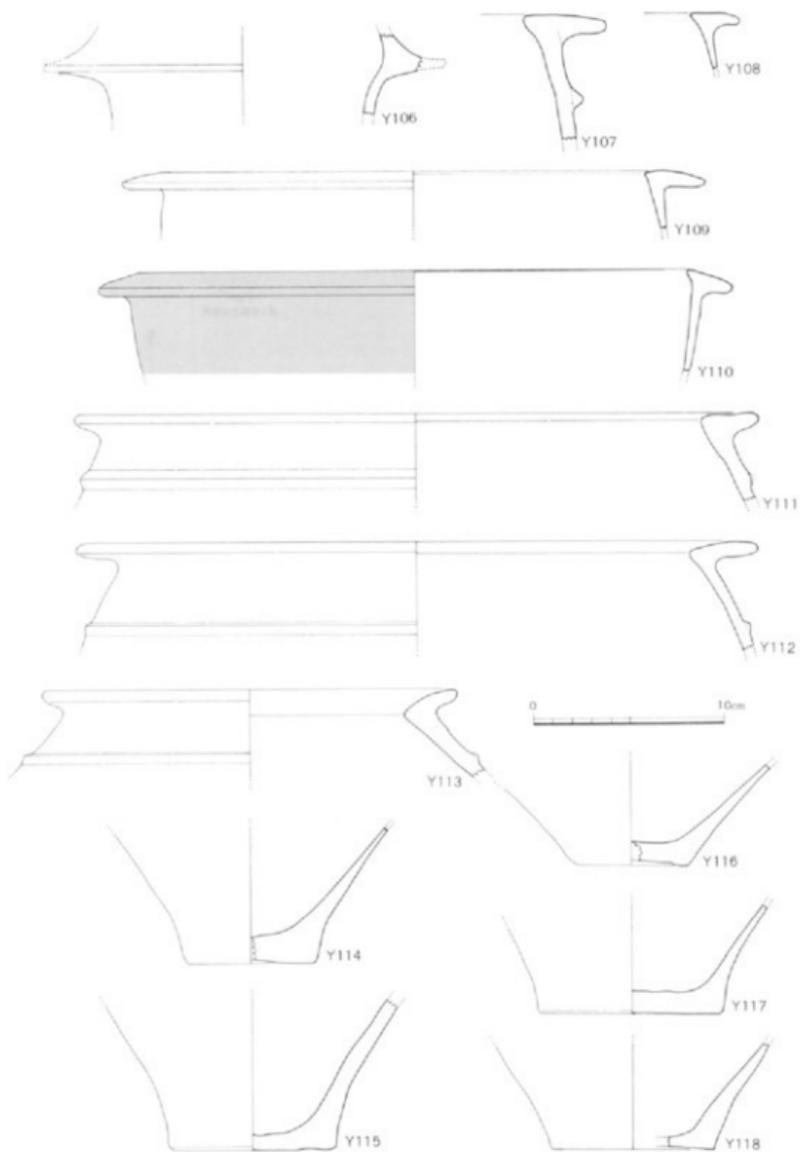
80 掘立柱建物全景（東から）



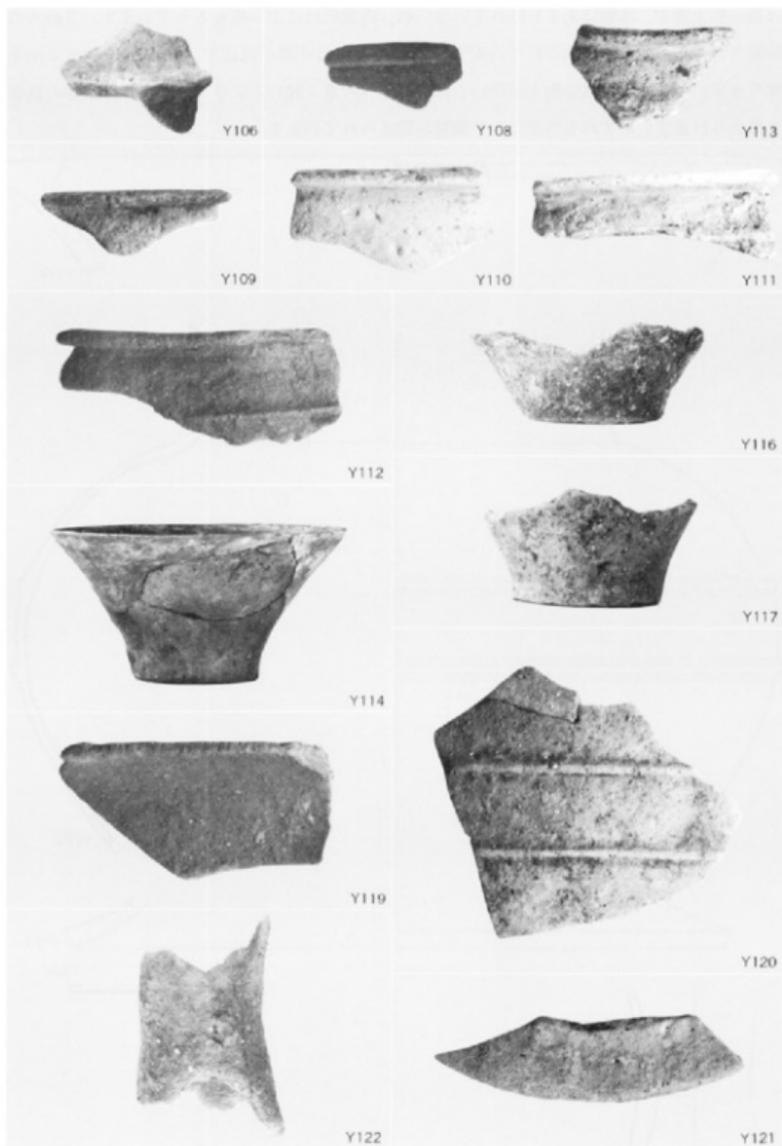
81 第2号掘立柱建物実測図（縮尺1/100）

土器（Y 106～122）

Y 106 は筒形器台の鈎部で、祭祀遺構からの出土例が多い特殊な土器です。砂粒の少ない胎土が用いられていますが、丹塗痕は認められません。Y 107～113 は甕形土器で、口縁部はL字形か、く字形をしています。Y 107 の口縁部上面は平坦で、両端部は丸くおさめています。Y 108・109 の口縁部外端はやや下方に垂れ、内端部はわずかに突出しています。Y 110 は細片のため傾きが不正確ですが、体部に張りはなく口縁部上面は外傾しています。Y 111 と Y 112 の体部上半は同じように内傾しており、口縁下に断面三角形の突帯を1条巡らしています。Y 113 も体部上半の傾き、口縁下の突帯など類似する特徴を持っていますが、口径は 22 cm と小さくつくられています。Y 119 は口径 42.6 cm を測る広口の壺形土器口縁部で、口縁部内端は三角形に突出し、幅 4.8 cm の平坦な口縁部を作っています。口縁部外端には左下りの細い刻み目が施されています。Y 120 の壺形土器は、口縁部と底部を欠いています。球形に近い胴部には断面台形の突帯が2条巡らされ、直線的な頸部はわずかに内傾してのびています。Y 121 は脚裾部で、脚径は 34.6 cm と大きいことから高杯形土器ではなく、Y 80・155 などの筒形器台の脚裾部ではないかと思われます。全面が剝離しているために丹塗りが施されたかは確認できません。Y 122

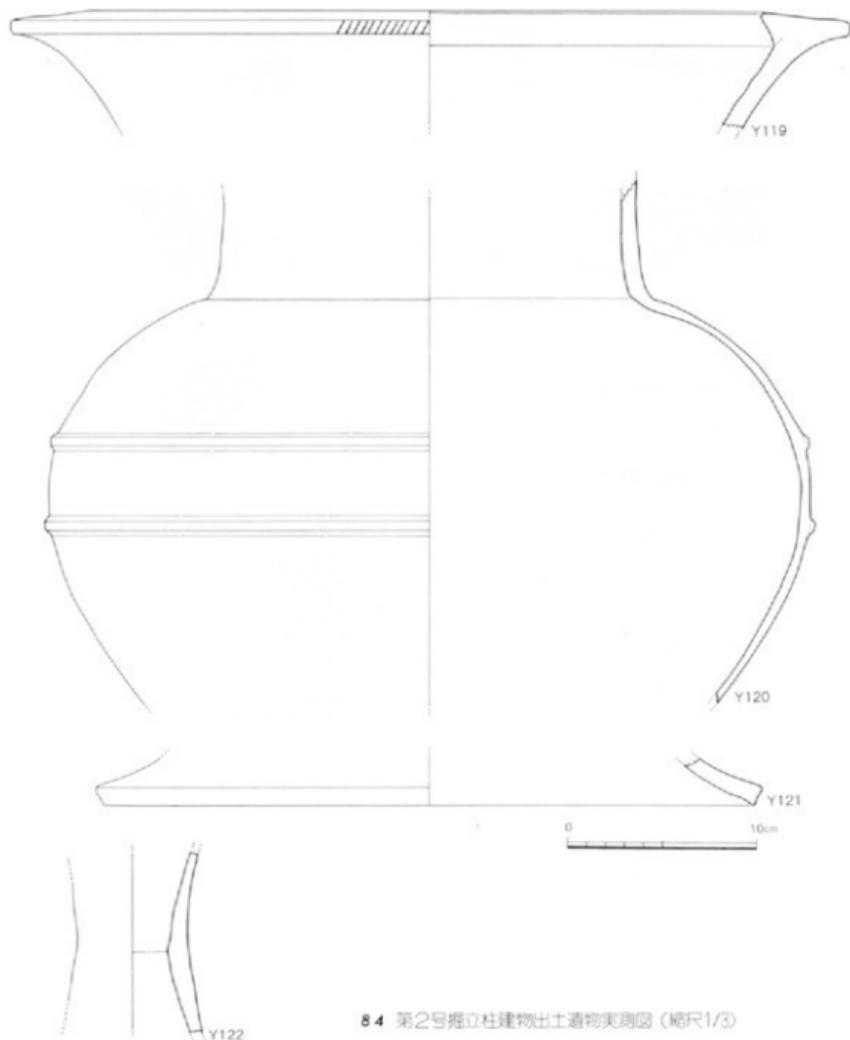


82 第2号掘立柱建物出土遺物実測図(縮尺1/3)



83 第2号独立柱建物出土遺物（縮尺1/3）

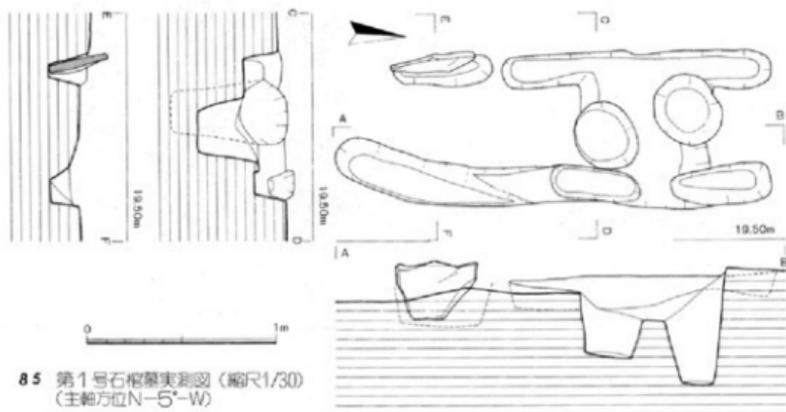
は器台形土器で、体部はあまり括れていないが、内面にはふい稜をもっています。3mm大の砂粒を含む粗い胎土が用いられています。Y 114~118 は平底の底部で、底径は6.0~9.6cmを測ります。Y 116 は精良な胎土が用いられ、胴部へ大きく開いていることから壺形土器の底部と考えられます。いずれも外面はナデ調整が加えられています。



3. 墓

第1号石棺墓 (弥生時代?) (85・86)

発掘区のやや西寄りのB-2グリッドで検出しました。完全な姿をとどめた石棺というのではなく、長側壁に用いられたと思われる板石が、わずかに1枚残っているにすぎません。また、中央部には後世に2個のピットが穿たれています。この遺構を石棺墓と判断したのは、側壁の板石が据えられたと思われる深さ約15cmの溝が、約60cmの間隔で平行に掘られていること、この遺構から復原される規模は、幅約70cm、長さ約230cmとなり通例の石棺墓と大きく異なること、さらには造成中に多くの墓^{Uchiyama}が出土したと伝えられている林崎遺跡が発掘区の西側に位置していること、久保岡遺跡においても墓地に対する祭祀遺構といわれる土器溜が発出されていることなどを根拠としました。



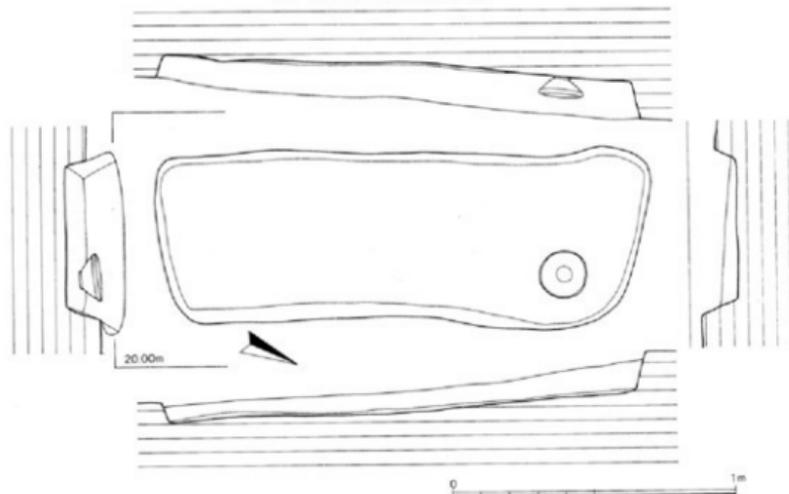
86 第1号石棺墓 (東から)

第1号土塚墓（歴史時代）(87・88・91)

第1号掘立柱建物の中央部で検出されました。土塚墓の主軸は、第1号掘立柱建物の桁行とほぼ等しく、磁北より25度西に振れています。土塚墓は、長さ170cm、幅60cm、深さ14cmの大ききで、平面形は隅丸長方形を呈しています。塚底は北側が南側より約10cm高くなっており、南側に向かって緩やかに傾斜しています。また北短側壁（小口）が幅広いことから、北頭位と考えられます。この小口部の右側には、完形の白磁碗が1個副葬されていました。左側では、細かい釘状の鉄製品が数本出土しましたが錆化が激しく取り上げることができませんでした。この鉄製品は、塚底の全面に散乱しているのではなく、1か所に集中して出土したことから木棺に使われた釘とは考えられません。



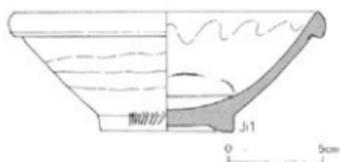
87 第1号土塚墓（東から）



88 第1号土塚墓実測図（縮尺1/20）



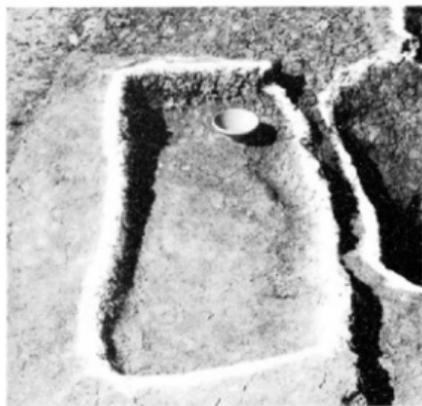
90 第1号土墳墓出土遺物 (縮尺1/3)



89 第1号土墳墓出土遺物実測図 (縮尺1/3)

出土遺物 (89・90)

磁器 (J1) 第1号土墳墓に副葬されていた磁器は、口径16.3cm、高台径7.1cm、器高6.4cmを測る白磁碗です。口縁部は、いわゆる玉縁と呼ばれるもので、やや下方に垂れています。高台の削り出しは浅く、このためふ厚いつくりとなっています。高台畳付は、ほぼ水平で、高台外面には削り痕が見られます。高台から口縁部へは、わずかに外湾しながらのび、0.5cmの厚い器壁となっています。見込み内底部には1条の浅い沈線が巡っています。また重ね焼きされたことが観察できます。釉色は灰白色で、体部外面の下半部は露胎となっています。釉には気泡があり、体部の削りも粗雑です。



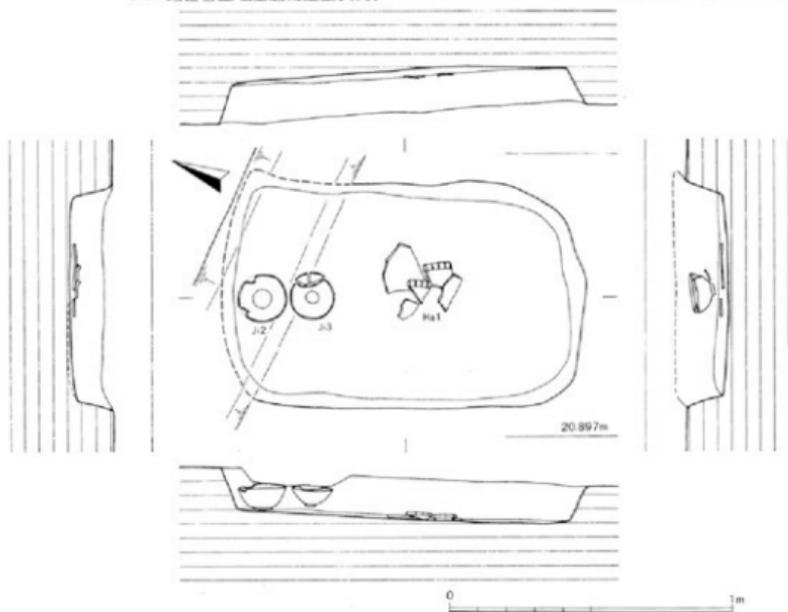
91 第1号土墳墓の発掘状況

第2号土塚墓 (歴史時代) (92~95)

第2号住居跡の西側4mの位置で検出しました。北側の一部が畑溝によって切られています。復原した大きさは、長さ約130cm、幅80cm、深さ16cmで、平面形は隅丸長方形を呈しています。4壁は垂直ではなく、床面は南側にわずかに傾斜しています。土塚墓内からは、2個の青磁碗と破片となった土器が出土しました。土器片(Ha1)は、土塚墓の中央部で出土したもので、塚底面に接し、敷かれたような状況をしています。2個の青磁は、土塚墓の中心線上に並び、北短側壁に片寄って出土しました。北短側壁が幅広く、塚底面も高くなっていることから北頭位と思われませんが、青磁の位置が副葬時のものとすれば、埋葬空間に制約を生じることから、遺体の大きさや埋葬姿勢が推測されます。また遺体上に副葬されたことも考えられるでしょう。



92 第2号土塚墓遺物出土状況▶



93 第2号土塚墓実測図(縮尺1/20)



94 第2号土坑墓（西から）



95 第2号土坑墓（東から）

出土遺物 (96~101)

磁器 (Ji2・3) Ji2の青磁碗は、北短側壁寄り出土したもので、畑溝の掘削によって一部欠落していますが、完形品とすることができます。大きさは口径17.5cm、高台径6.5cm、器高7.4cmを測ります。高台の削り出しは約5mmと浅く、このため底部は1.4cmとふ厚いつくりとなっています。高台の高さも10mmと低く、畳付は平坦面となっておりません。体部は外湾ぎみに緩やかにのび、口縁部近くで小さく外反しています。見込みと内底部にはヘラ様の施文具で



96 第2号土壌墓出土遺物実測図(縮尺1/3)

草花文が描かれています。見込みの文様は花と蕾が1組となり、時計回りに3組が見られますがうち1組は、花の表現を異にしています。釉は高台の畳付と内側を除く全面にかけられ、釉色は濃緑色を呈しています。露胎部はうす茶色で、釉には内外面ともに細かい貫入が見られます。口縁部は正円ではなく、ややいびつですが見込みの文様、釉調など美しい姿をしています。

Ji3は茶人村田珠光が愛用したことから珠光青磁と呼ばれているもので発掘時にすでに口縁部が割れていましたが、接合し完形品となりました。大きさは口径14.0 cm、高台径5.0 cm、器高6.6 cmを測ります。高台は粗い削りで、深さ約4 mm、高台の高さは9 mmとなっています。体部外面には約1.0~1.5 cm幅で削り痕が見られます。見込みには柳歯様の施文具で文様が描かれています。釉色は黄緑色で、体部の高台近くから下部は露胎となっています。Ji2・3ともに中国製の輸入青磁で、Ji2は中国浙江省龍泉窯、Ji3は中国福建省同安窯で製作されたと考えられています。



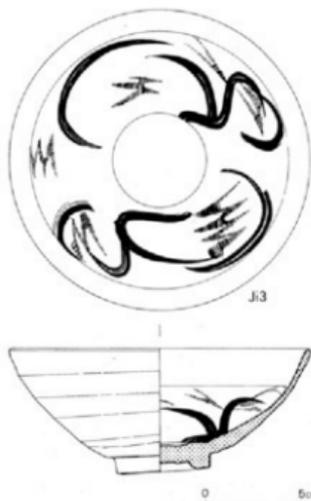
97 第2号土壌墓出土遺物(縮尺1/3)



99 第2号土坑墓出土遺物 (縮尺1/3)

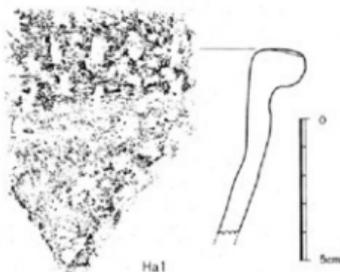


100 第2号土坑墓出土遺物 (縮尺1/2)



98 第2号土坑墓出土遺物実測図 (縮尺1/3)

土器 (Ha1) Ha1は、坑底に接して出土したもので、口縁部の破片です。砂粒の多い粗い胎土を用いており、口縁部は蒲鉾形の断面になっています。この口縁部の上面には、約1.2cm間隔で浅い刻み目を施しています。全体的に粗雑なつくりの土器です。



101 第2号土坑墓出土遺物実測図 (縮尺1/2)

4 土器溜

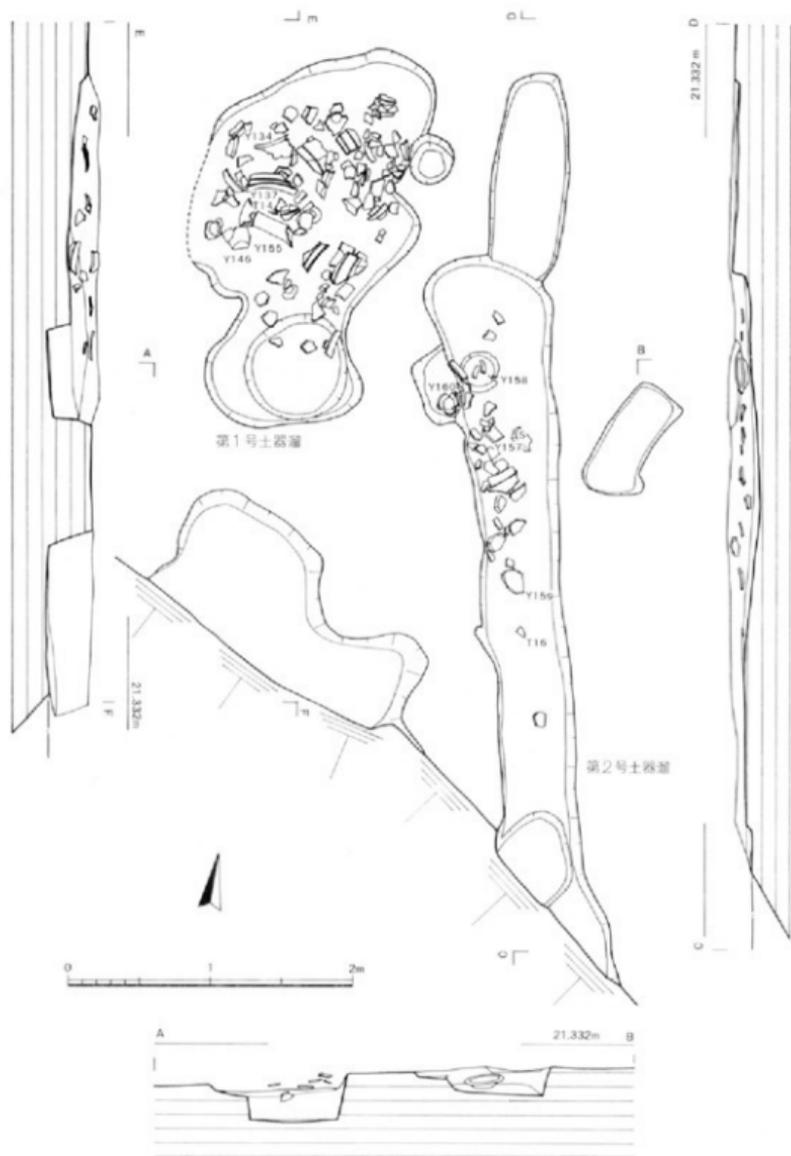
第1号土器溜 (弥生時代) (102~106)

E-9グリッドで検出したもので、第1号掘立柱建物と第4号住居跡のほぼ中間に位置しています。Dトレンチの調査で、土器が集中して出土することが知られていましたが、本調査によって、これらの土器は、土塚と溝状遺構から出土することが確認できました。2つの遺構は1mと離れていず、単一の遺構として考えられますが、遺物の取り上げは不整形土塚を第1号土器溜、溝状遺構を第2号土器溜と区別しました。

第1号土器溜の土塚は不整形で、長軸約2.8m、短軸約1.6m、深さ約20cmを測ります。壁は垂直ではなく傾斜をもって掘り込まれています。谷底はほぼ平坦で、南寄りには直径約70cm、深さ約15cmのピットがあります。遺物は土塚の全面から出土しましたが、その密集状況から南北の2群に分けられそうです。これらの群には時期差や切り合いなども考えられますが、土塚の埋土からは区別できませんでした。また第1号土器溜の南側約50cmには、不整形の落ち込みがありますが、遺物の出土はありませんでした。



102 第1・2号土器溜 (南から)



103 第1·2号土器罐夫刻图(缩尺1/40)



104 第1号土器窟(北西方向)



105 第1号土器窟遺物出土状況(南方向)

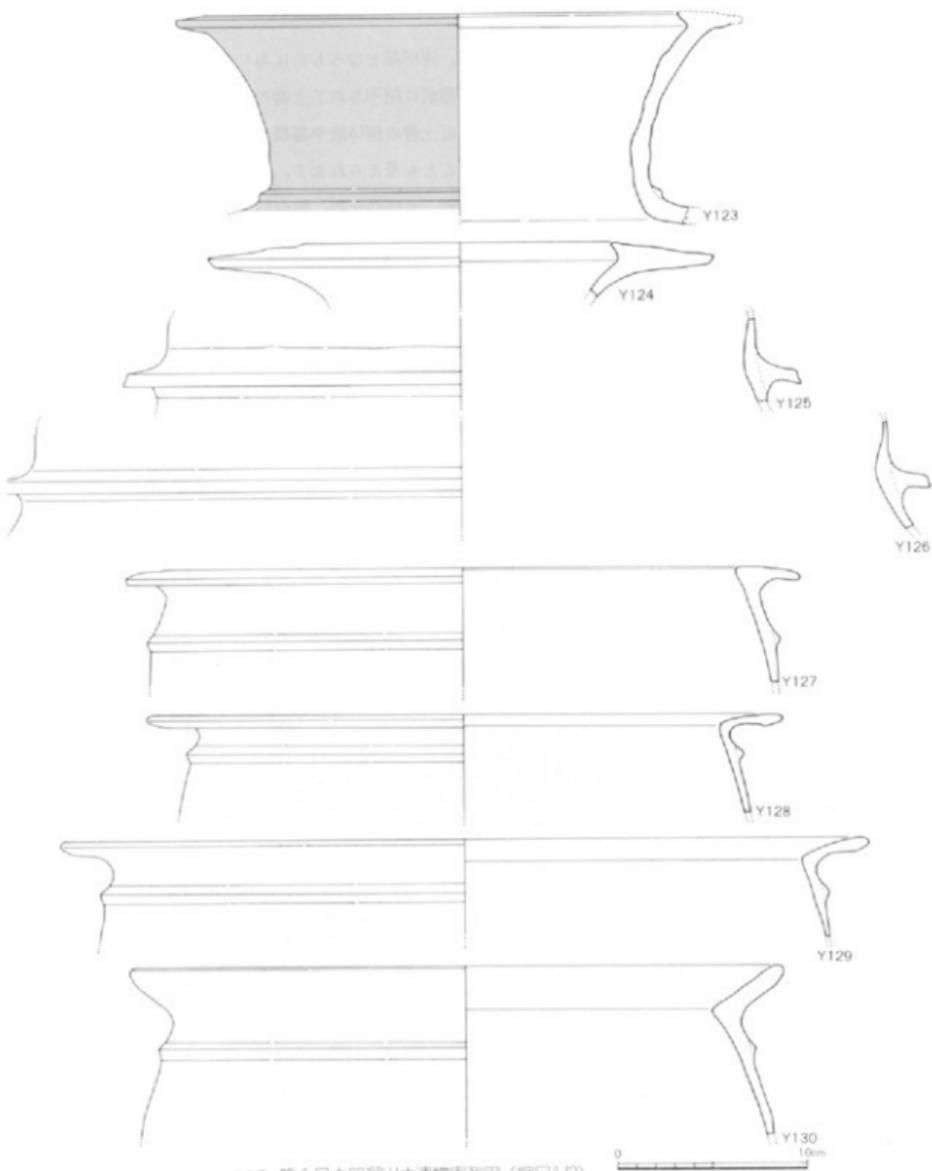
出土遺物 (107~116 表 149~152)

出土した土器片は、すべて接合を試みましたが、完形品となるものはありませんでした。これは土器片の剝離が激しく接合できないこと、発掘前に削平されて土器片が消失したことなどが考えられますが、むしろ土器片の数量からすれば土器の個体数や器種が多いなどの特徴があり、本来接合しない土器、こわれた土器であったことも考えられます。

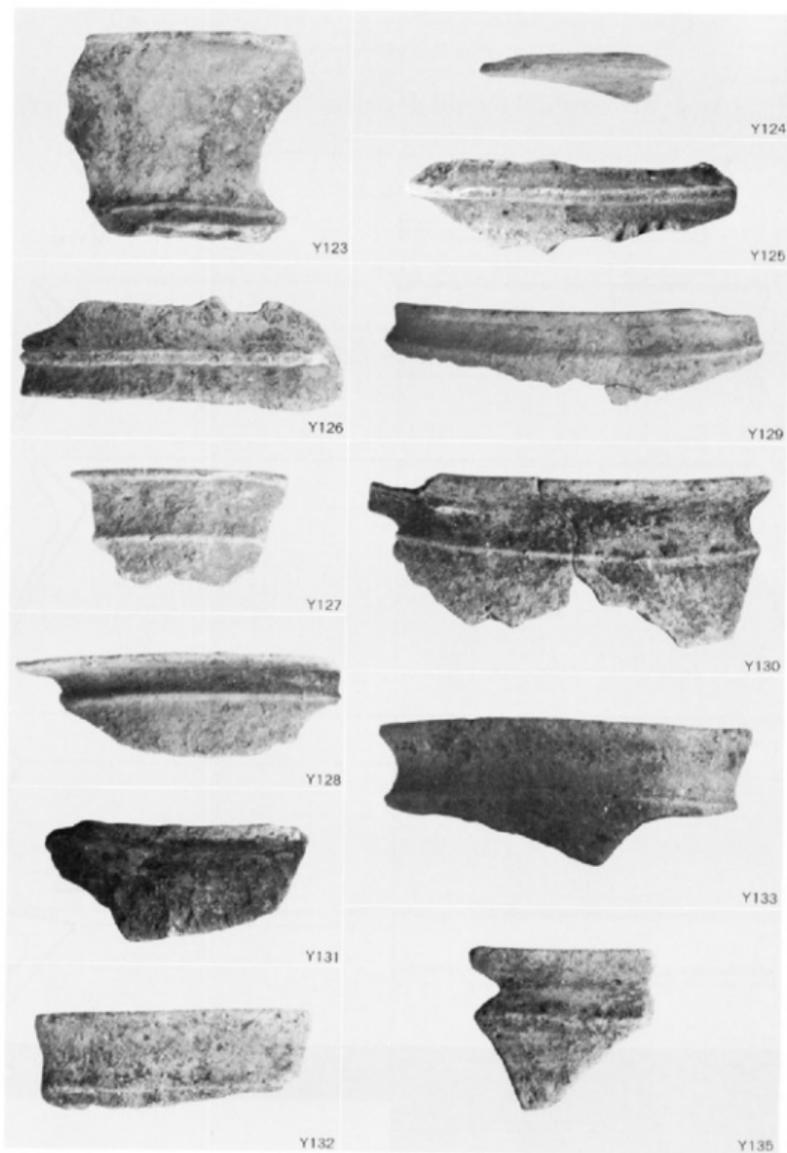
土器 (Y 123~155) 器種には壺形土器、甕形土器、高杯杉土器、器台形土器、蓋形土器などがあります。Y 123は広口の壺形土器口頸部で、口縁端部は失われていますがやや外傾する幅広い口縁部になると思われます。Y 124も同じように広口の壺形土器口縁部ですが、頸部の湾曲は強く、口縁部はシャープなつくりとなっています。Y 125・126は鈎状の破片で、甕形の器形が考えられます。鈎状の突帯は、いずれも下方を向き鋭い稜を作っています。Y 127~137の11点は甕形土器です。Y 127の逆L字形口縁は水平でなく、わずかに外傾しています。Y 128・129は口径は違いますが、口縁部は同じように上面が内傾し、丸い外端部となっています。また口縁下には、断面三角形の小さな突帯が巡っています。Y 130・132~135の口径は33.8~46.4 cmを測り、く字形の共通する口縁部を持っています。これらの口縁部は内側屈曲部より外湾ぎみにのびるのが特徴で、口縁下には断面三角形の突帯が貼付されています。内側屈曲部は丸くなっていますが、Y 132は小さく突出して稜を作っています。胴部の調整痕は器面に剝離して



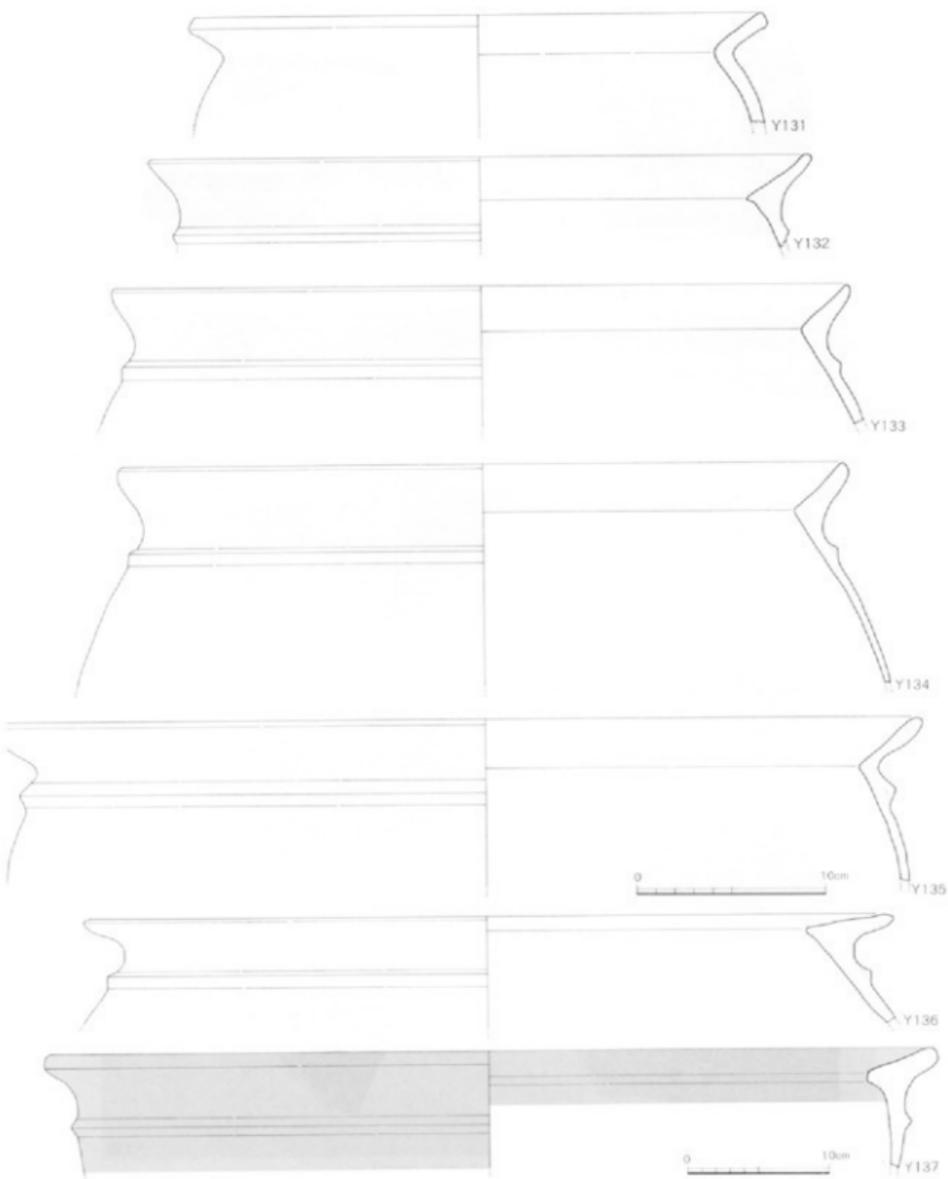
106 第1号土器層遺物出土状況

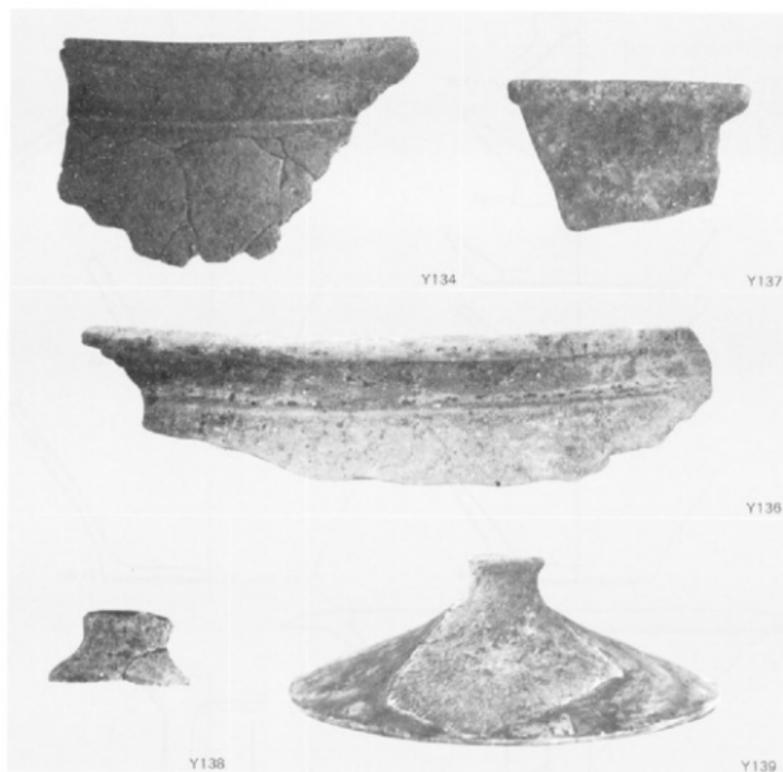


107 第1号土器出土遺物実測図(縮尺1/3)

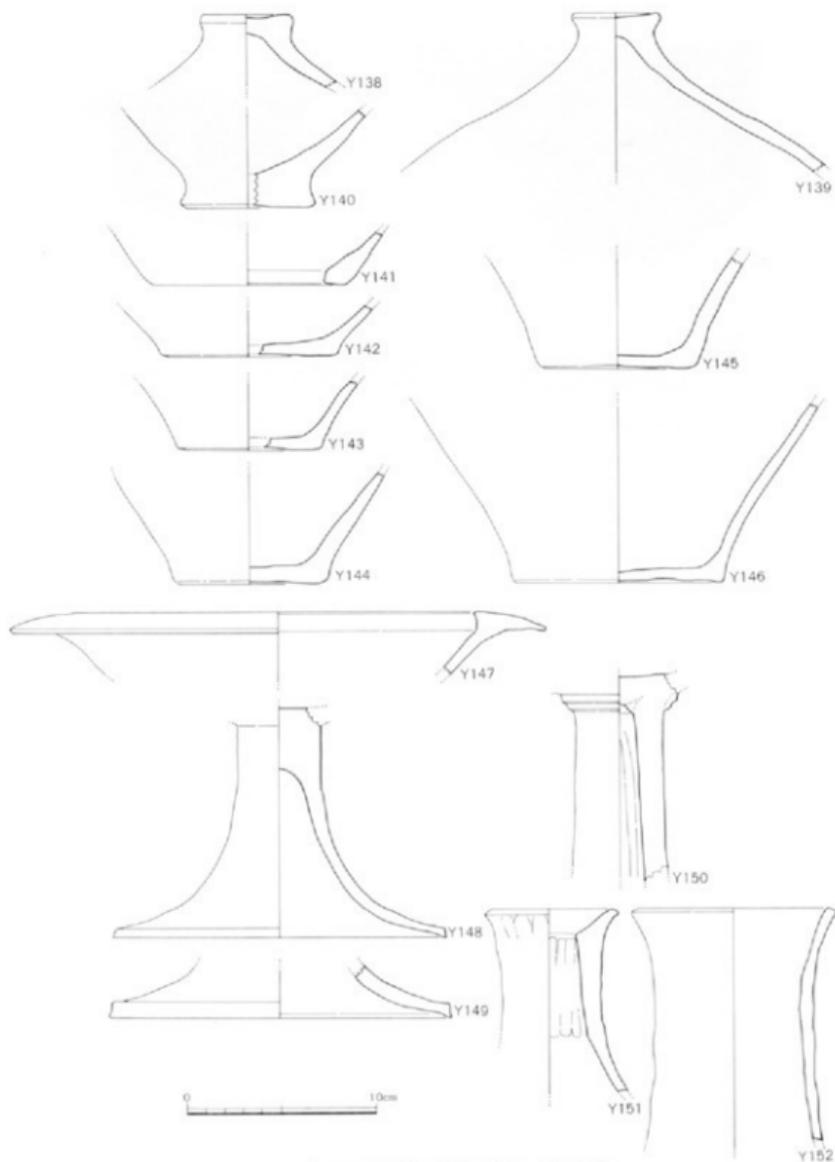


108 第1号土器罐出土遺物 (縮尺1/3)

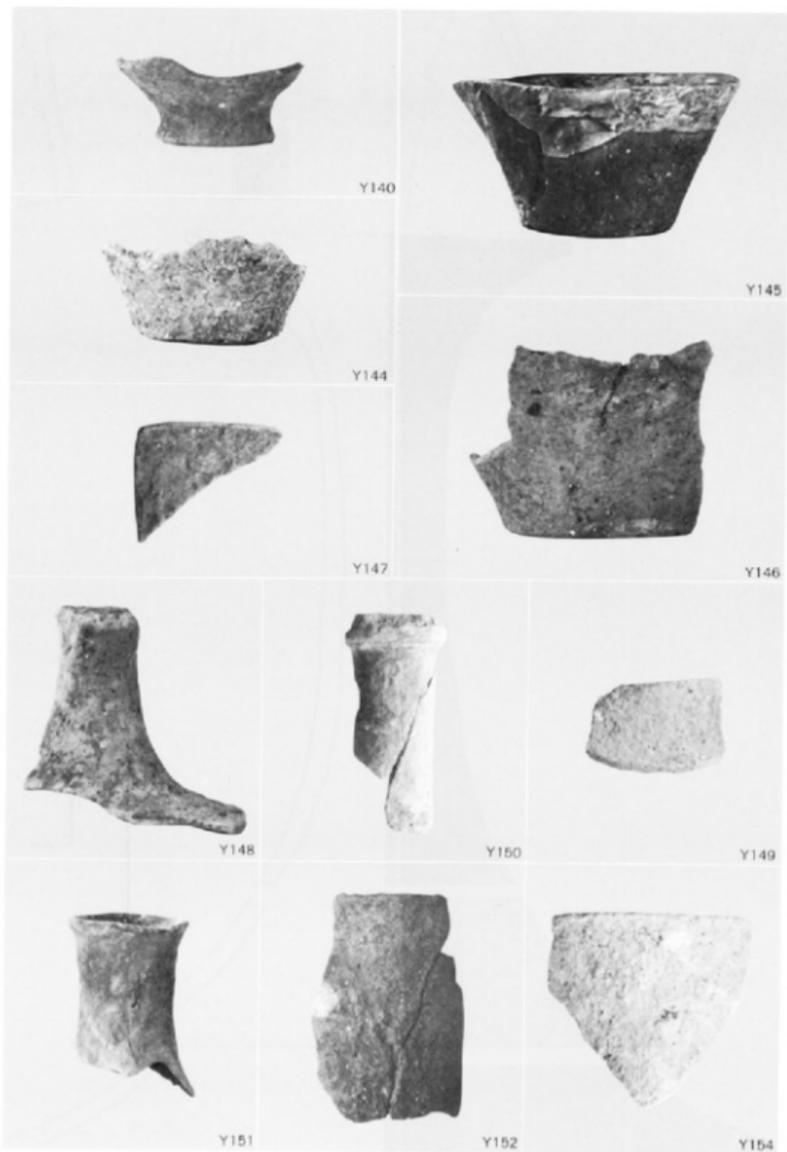




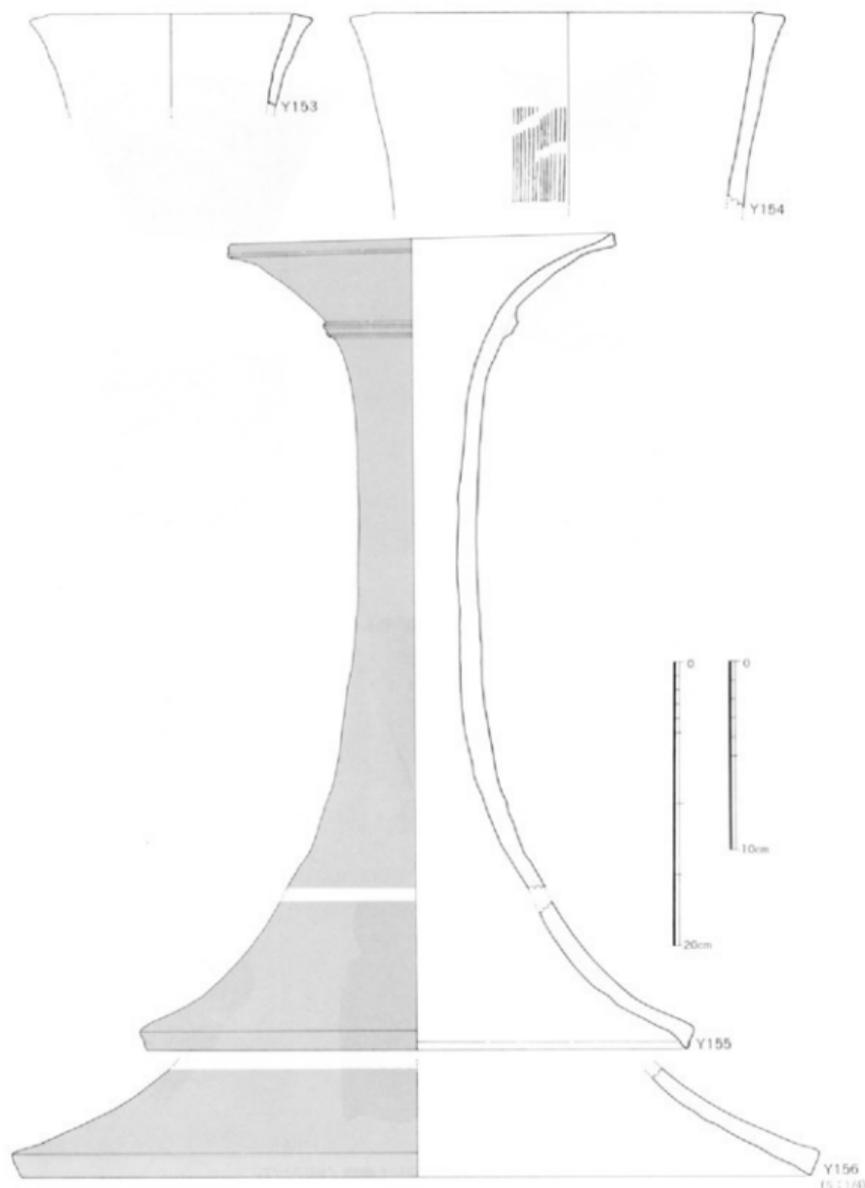
110 第1号土器種出土遺物(縮尺1/3)



111 第1号土器室出土遺物実測図(縮尺1/3)

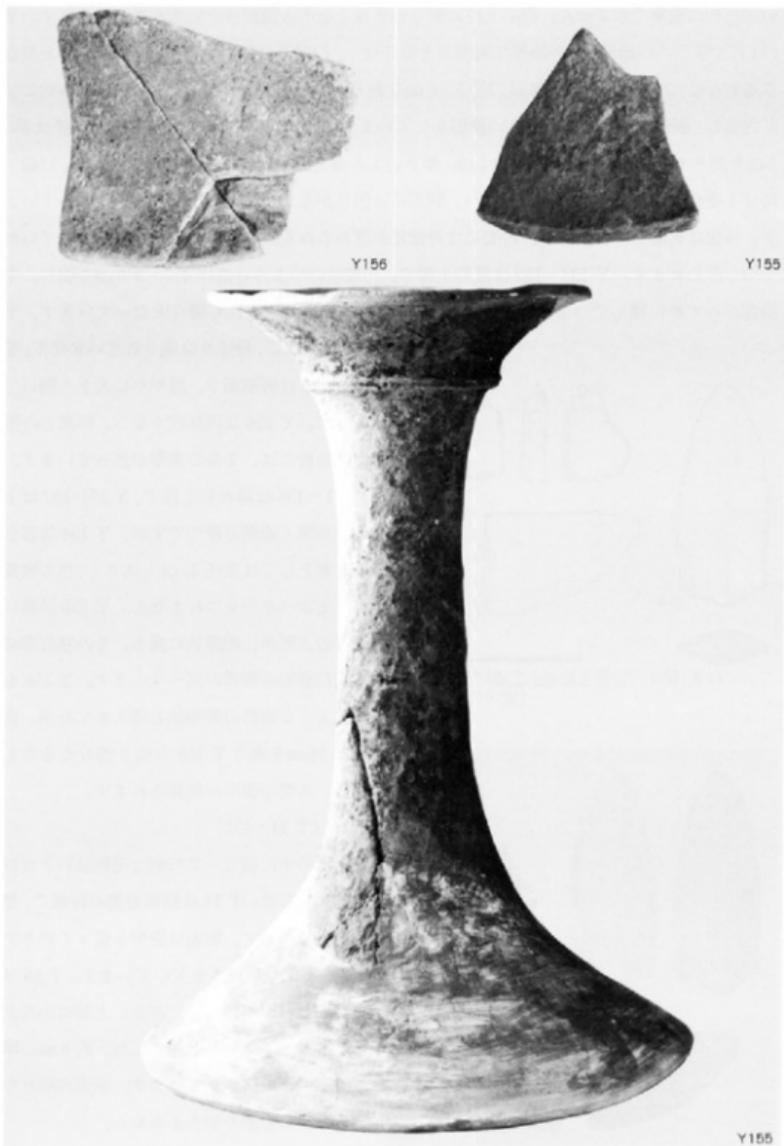


112 第1号土器群出土遺物 (縮尺1/3)



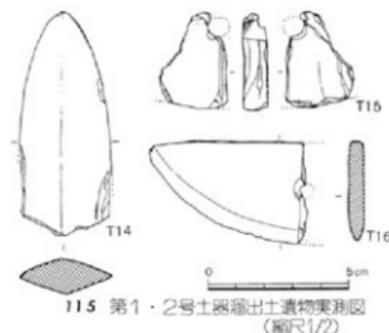
113 第1号土器罐出土遺物実測図(縮尺1/3・1/4)

Y156
(5 : 14)

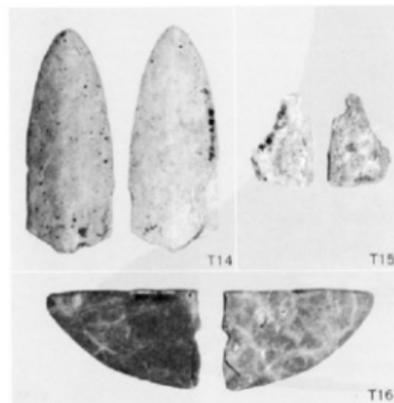


114 第1号土器出土遺物 (縮尺1/3)

いるために観察できません。胴部上位に張りがあることから倒卵形の胴部が考えられます。Y 131 はく字形の口縁部で、外端部は断面長方形をなし、口縁下に突帯を持たないなど、他と異なる器形をなしています。Y 136 は口径 57.6 cm を測る中型の甕形土器で、胴上半部は直線的に強く内傾し、胴部径が口径より大きい器形をしています。Y 137 も中型の甕形土器で、口径は 63.2 cm を測ります。口縁部の上面幅約 5 cm、厚さ約 1.6 cm とふ厚いつくりをなしています。口縁下には 1 条の突帯がつけられていますが、胴部には張りがなく、胴上半部は直線的に立っています。外面は剥離していますが、内面には丹塗痕が認められることから外面も丹塗りされていたものと思われます。Y 138・139 は蓋形土器で、円盤状のつまみは直径 4.7~5.0 cm を測り、中央部がわずかに窪んでいます。Y 147~150 は高杯形土器でいずれも細片となっています。Y



115 第1・2号土器編出土遺物実測図 (縮尺1/2)



116 第1・2号土器編出土遺物 (縮尺1/3)

147 は杯部で、丹塗りは施されていません。Y 148・149 は脚裾部で、緩やかに大きく開いています。Y 150 は円柱状をなし、杯部との接合部外面には、2 条の突帯が巡っています。Y 151~156 は器台形土器で、Y 151・152 は上下端が開く通例の器形ですが、Y 154 は器台形土器としては直径 23 cm と大きく、他の器種を考えるべきかもしれません。Y 155 は長い筒部の上部が、朝顔状に開き、その移行部に断面口唇形の突帯が巡っています。Y 156 も同じような器形の脚裾部と考えましたが、底径は 56 cm を測り Y 155 の約 2 倍もあることから、大型の器形が推測されます。

石器 (T 14・15)

土器の中に混じって石剣と垂飾品の 2 点が出土しました。T 14 は粘板岩製の石剣で、鋒先部の破片です。断面は菱形となっていますが、鑿、刃部とも鋭さを欠いています。T 15 は滑石の石材が用いられており、上部に小孔があることから垂飾品としました。約 8 mm の厚さで、一部磨研されています。側面が割れているために全形を知りえません。

第2号土器溜 (弥生時代) (102・103・117)

第1号土器溜の東側にある溝状遺構を第2号土器溜としました。検出した溝状遺構の長さは約5.9mで、南端部は畑で切られており、本来の長さではありません。溝状遺構は、ほぼ南北方向で、標高の低い南側に開くものと思われます。北端部には長さ約1.6m、幅約50cmの1段浅く掘られた溝がのびています。溝状遺構の両壁は、垂直ではなく傾斜していますので、溝断面は逆台形をなしています。最も深い所で溝の肩より約22cmあり、溝底面は凹凸があります。遺物は溝の西寄りで出土したもので、遺物量は多くありません。これらの遺物はT16やY158のように溝底面に接しているものは少なく、ほとんどが浮いた状況を示しています。溝の埋土は第1号土器溜と同じように、土層の区別はできませんでした。

出土遺物 (115・116・118・119 表152・153)

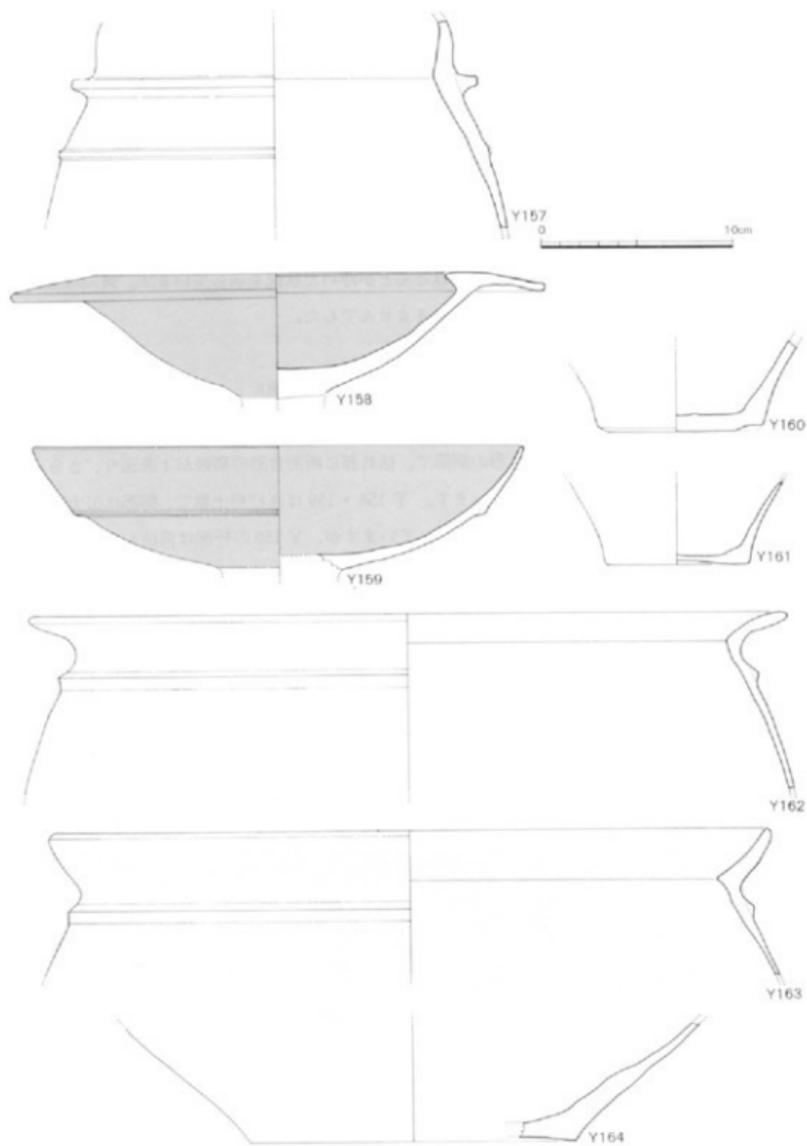
土器、石器の他に自然石が数個出土しました。土器は、すべて細片となっており、接合復原できたのは高杯形土器の杯部2点のみでした。

土器 (Y157~164) Y157は甗形土器の胴部で、括れ部に断面台形の突帯が1条通り、さらに下方にも背の低い小さな突帯がついています。Y158・159は高杯形土器で、脚部は出土していません。Y158の断面は鋤先形の口縁部をなしていますが、Y159の杯部は湾曲しながらのび、そのまま細丸くおさめて浅い球形となっています。Y158の内外面は丹が塗付されています。Y162・163は倒卵形の胴部で、口縁下に突帯を持つ甗形土器ですが、口縁部上面はY162が内湾し、Y163が外湾しながらのびています。

石器 (T16) 石庖丁(穂摘具)の破片で、小孔は両面穿孔され、頁岩質の石材と思われます。



117 第2号土器溜(東から)



118 第2号土器溜出土遺物実測図(縮尺1/3)



119 第2号土器群出土遺物 (縮尺 1/3)

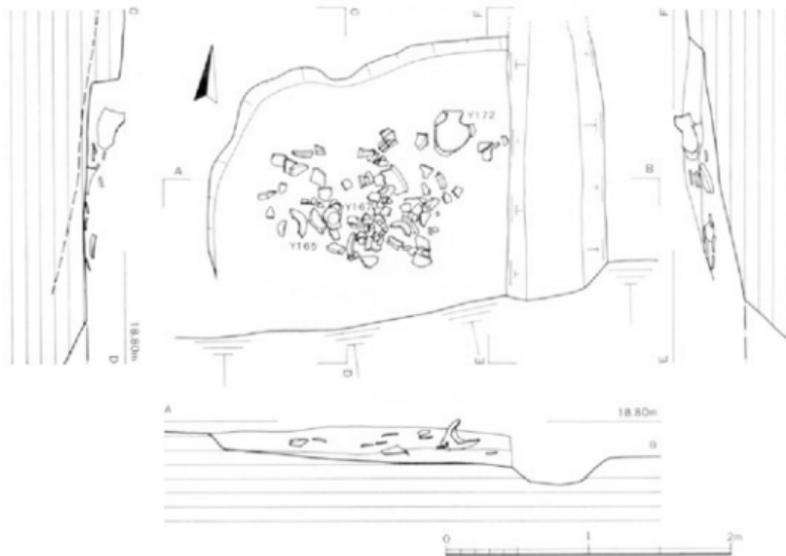
第3号土器溜 (弥生時代) (120~122)

A-19 グリッドで検出した土器溜で、発掘区の東端に位置しています。第3号土器溜は東側を畑の溝が走り、南側は工事で削り取られています。このため全体の勾配の北東部のみが残っているにすぎません。残存部のプランは、不整形円形を呈しており、深さ 30 cm 前後の土坑となっていたものと思われます。底面はわずかに南東方向に傾斜しています。遺物の出土状況にはまともではなく、ほとんどが細片となり散乱していました。

出土遺物 (123~125 表 153・154)

出土遺物は土器のみで、うち 9 点を図示しました。

土器 (Y 165~173) 甕形土器は 3 点で、Y 165 は朝顔状に開く頸部に、厚めの口縁部がついています。Y 166 は外面丹塗りされた甕形土器の胴部で、胴上半部で括れて瓢形をなしています。突帯は胴括れ部と頸部への移行部の 2 か所につけられています。Y 167 は接合していませんが同一個の甕形土器と判断しました。平底から胴部は外湾しながらのび中位に最大径があります。器壁は薄く外面は丹塗りされています。Y 168~172 の 5 点は甕形土器で、く字形口縁は 28.6~37.2 cm を測ります。Y 171 の口縁下には、背の高い突帯が上向きにつけられています。いずれも口縁部は横ナデ調整されており、Y 168・172 の胴部外面には、縦のハケ目痕が見られます。



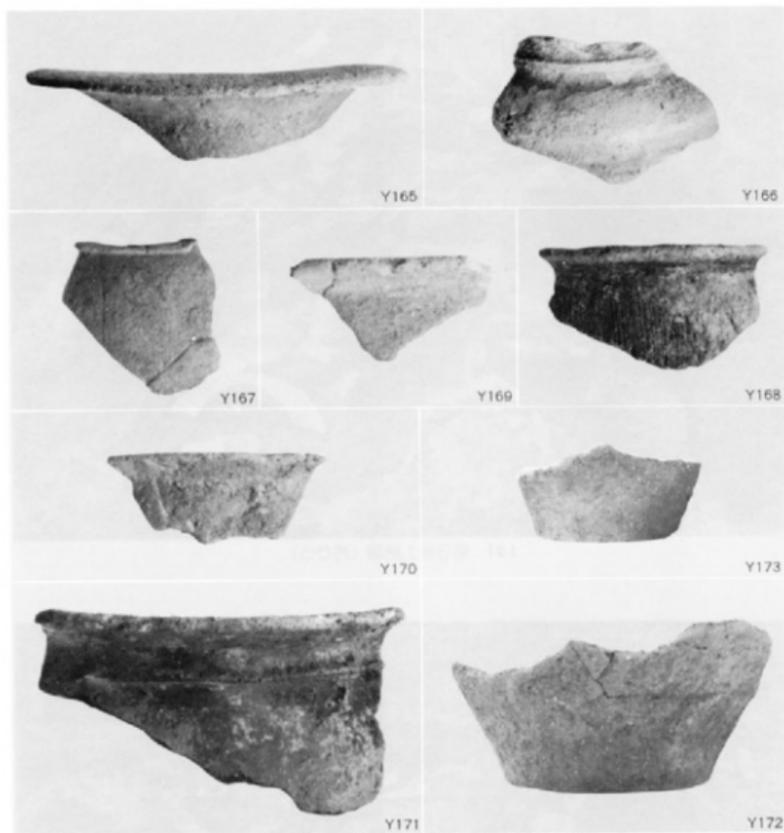
120 第3号土器溜実測図 (縮尺1/40)



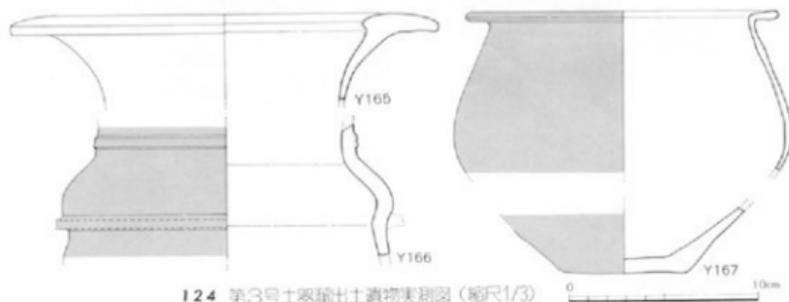
121 第3号土器窟 (西力ら)



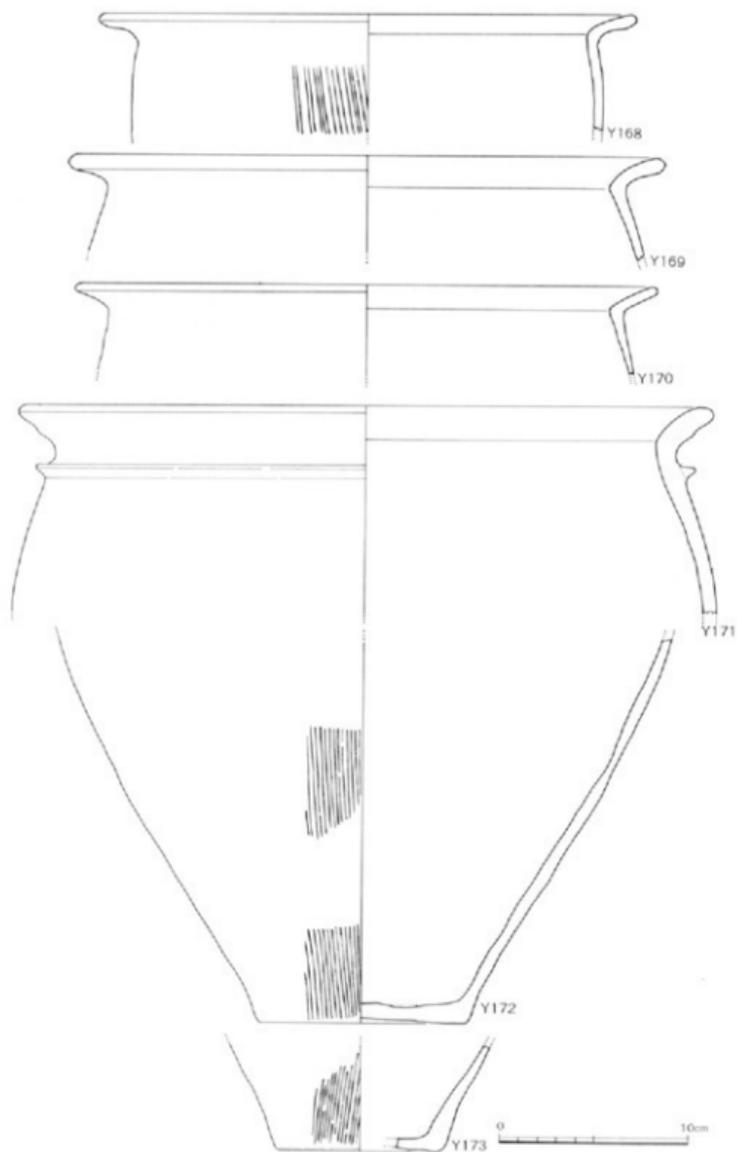
122 第3号土器窟 (南力ら)



123 第3号土器窟出土遺物 (縮尺1/3)



124 第3号土器窟出土遺物実測図 (縮尺1/3)



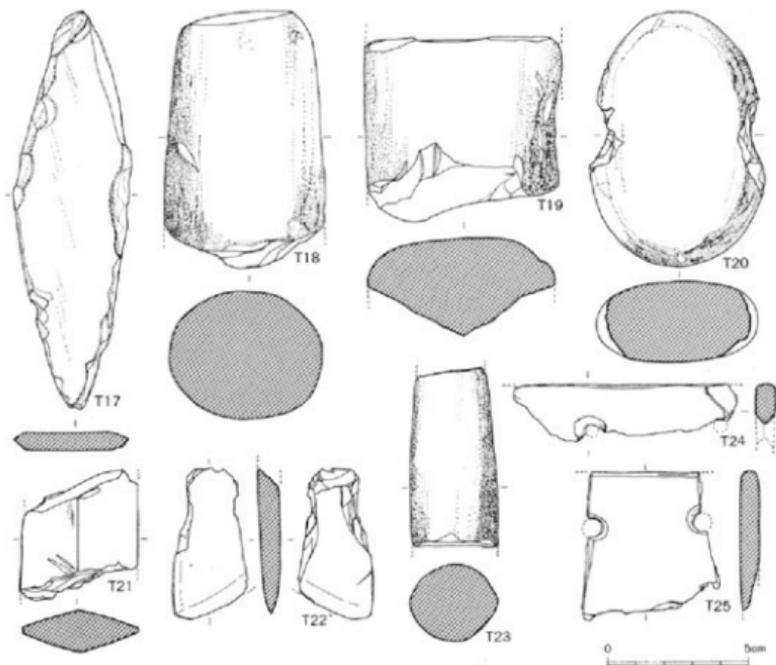
125 第3号土器出土土器实物复原图(缩尺1/3)

5 その他の遺構と遺物 (23・126)

これまで住居跡、掘立柱建物、墓、土器溜の遺構と遺物について記してきましたが、この他にもピットや溝が発掘区の全面にわたって見られます。これらには土器、石器などの遺物を出土するものがあり、また削平されていることを考慮すれば竪穴住居跡の柱穴だったことも考えられます。2棟の掘立柱建物が見つかったことから、ピットの配列には特に注意して検討しましたが、建物としてはとらえることができませんでした。各々の出土位置は23図に記入しています。



126 土器(Y174)出土状況

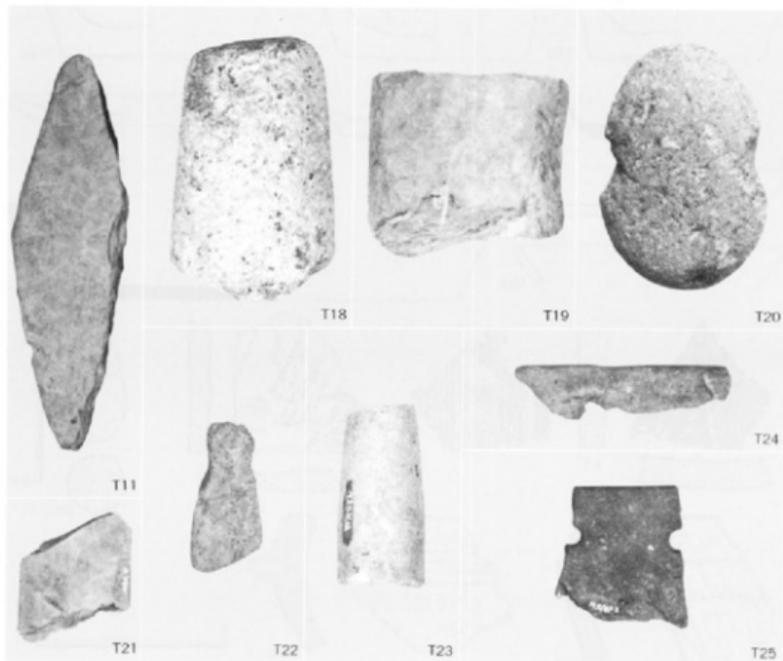


127 久保遺跡出土遺物実測図(縮尺1/2)

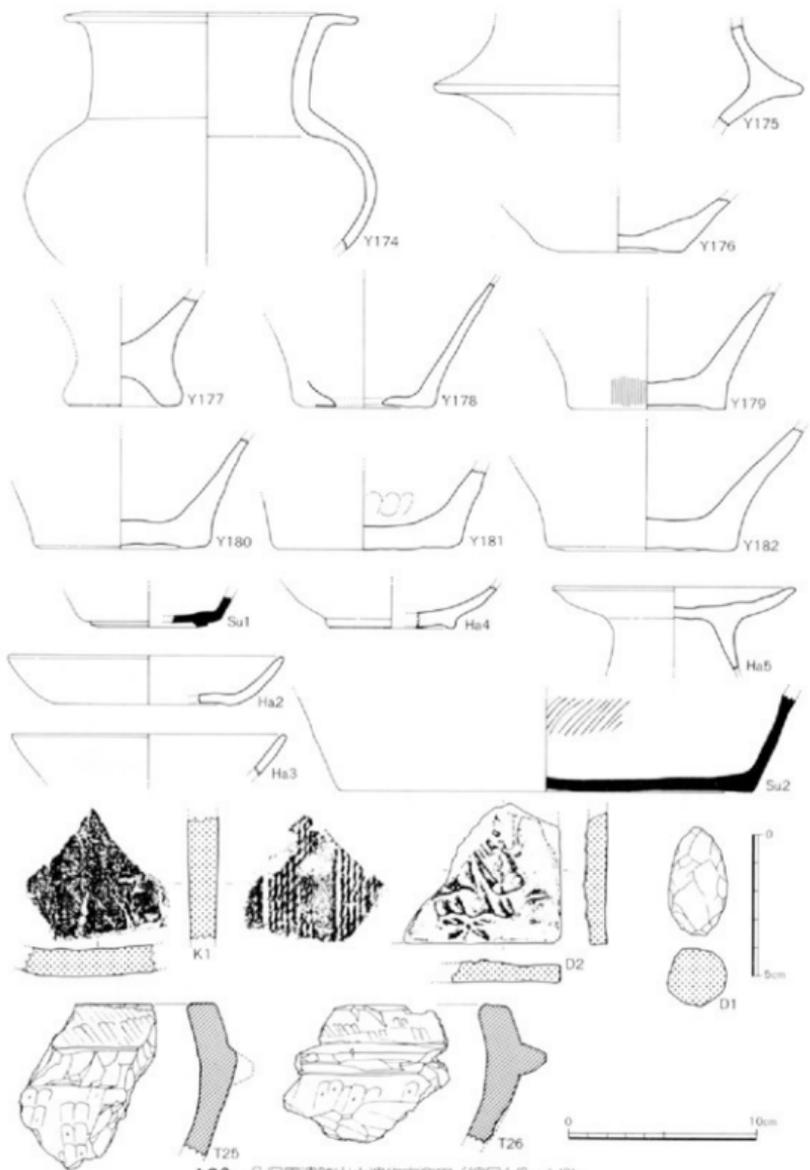
出土遺物 (127~135 表 154)

遺物は、表土層や遺構として取り上げなかったピットや溝からも出土し、また崖の崩落土にも多くの遺物が見られました。これらの遺物は弥生時代のものが圧倒的に多いのですが、瓦、石鍋、陶磁器など歴史時代の遺物も含まれており、久保園遺跡の変遷を知るうえで重要と考えましたので、細片でも図化するよう努めました。

石器 (T 17~25) T 18・25 以外は、表土層と崖崩落土から出土しました。T 17 は軟質の粘板岩製で、側面は両面から剥離されて鈍く尖らせています。両面とも丁寧な研磨が加えられ平坦となっていますが用途は不明です。T 18 は石斧で凝灰岩質の石材が使われています。断面は扁円形を呈し、刃部を欠いています。T 19 は玄武岩製石斧の破片です。割れ面には2次加工の削り痕が見られます。T 20 は自然円礫で、両側縁に敲打を加えて石錘としています。漁網用ばかりではなく、いろいろな用途が考えられます。T 21 は断面が菱形をしていることから磨製石剣と思われそうですが、両側縁の刃部は鋭利ではなく、意図的に潰されているようです。T 22 は基部を欠き全形を知りませんが、図下部は両面から研磨され刃部を作っています。T 21・22 と



128 久保園遺跡出土遺物 (縮尺1/2)



129 久保園遺跡出土遺物実測図(縮尺1/2・1/3)



130 久保園遺跡出土遺物（縮尺1/3）

も粘板岩製です。T 23 は砂岩製で円柱状に加工されています。両端が欠けており、用途はわかりません。T 24・25 は穂摘具の石庖丁です。T 24 は背部の小破片で、粘板岩が用いられています。背部の断面は丸く稜がなく、2つの小孔は、4.6cmの間隔があり両面から穿たれています。T 25 は輝綠凝灰岩製で刃部を欠いています。両面ともよく研磨されています。

土器 (Y 174~182 Ha 2~5 Su 1, 2) Y 174~182 は弥生式土器で他は歴史時代の土器です。Y 174 は壺形土器で、球形に近い胴部に直立する頸部がつき、大きく屈曲して水平な口縁部を作っています。Y 175 はEトレンチ東側の表土層より出土したもので、筒形土器と呼ばれています。Y 80・155 と同じように円柱(筒)形の体部ですが、上部近くに鈿をつけています。これまでの出土例の大半が墓地と関連した遺構から出土しています。Y 176~182 は底部で、Y 176 は壺形土器の底部です。第1号掘立柱建物の北側から出土しました。Y 177 は上げ底で、胴部との境が括れており、本遺跡のなかでは最も古い時期の土器です。Y 178~182 は平底で、Y 178 には2.4×2.1cmを測る楕円形の孔が見られます。Su 1 は須恵器の高台付杯の底部破片で、Bトレンチの東側で出土しました。背の低い高台は、体部屈曲部のやや内側に貼り付けられています。Ha 2・3・6 はA-12グリッドの崖面より出土しました。Ha 2 は口径14.5cmを測る土師器の塊です。器面は磨耗し、低部の切り離し痕は確認できません。Ha 3 は灰色をした瓦質で、口縁部は黒灰色を呈しています。Ha 4・5 はEトレンチの東側で出土したもので、Ha 4 は瓦質の高台付塊です。高台は磨耗していることもあり、丸く小さくなっています。Ha 5 は土師器の托で、脚は中心よりずれて付けられ、ハ字形に開いています。Su 2 は須恵質で、底部は径22cmの平底をなしています。

瓦 (K 1) K 1 は厚さ約14mmを測る平瓦です。内外面とも灰黒色を呈し、凹面には布目痕、凸面は縄目の叩き痕が見られます。胎土は小砂粒を含み、やや軟質の焼成となっています。

石鍋 (T 25・26) 滑石製石鍋の2点はともにEトレンチの東側拡張区で出土しました。破片のため口径は測定できませんが、外面には加工痕がよく残っています。口縁部は平坦をなし、鈿は断面台形で、やや下方を向いています。鈿より下には煤が付着しています。この他にも石鍋と思われる破片は10数点出土していますが図化できませんでした。

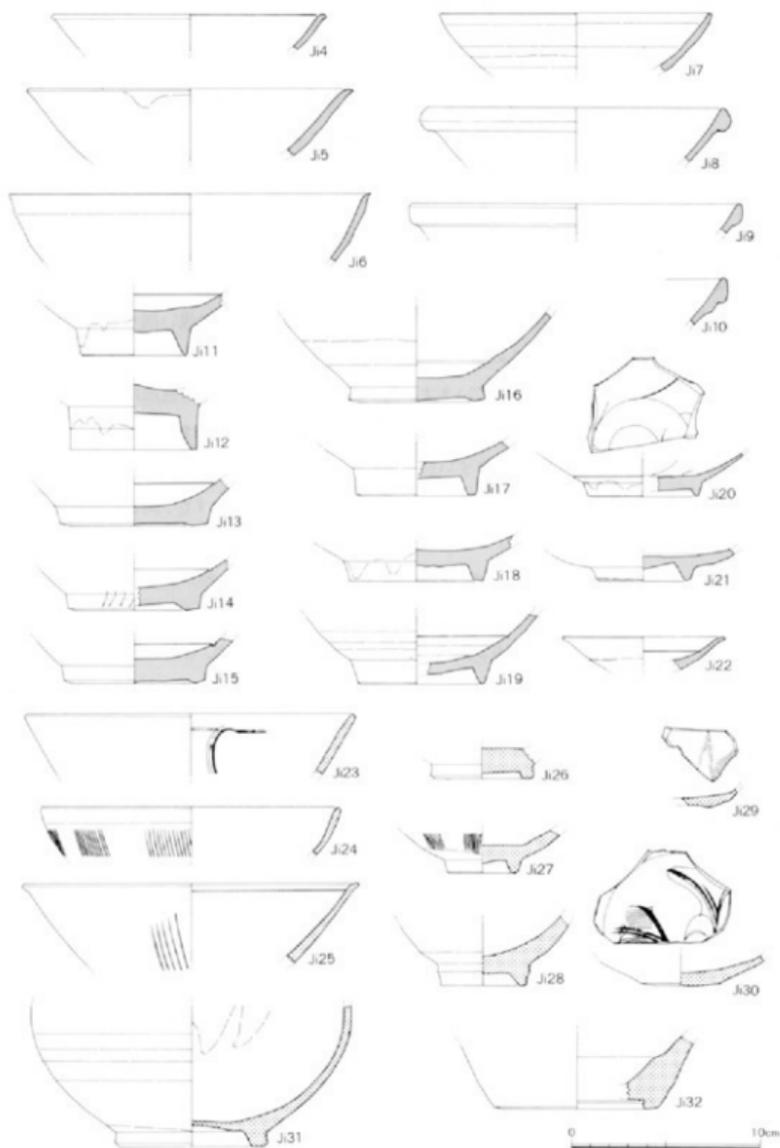
投弾 (D 1) 土製投弾のD 1は、Eトレンチ東側で出土したもので、一端がわずかに尖った楕円形をしています。横断径は約2cmで、表面は凹凸がめだち末調整のままのようです。

磁器 (Ji 4~32) 図示した29点の磁器は、表土層や崖崩落土から出土したもので、遺構から検出されたものはありません。これらは白磁、青磁、その他に分けられます。

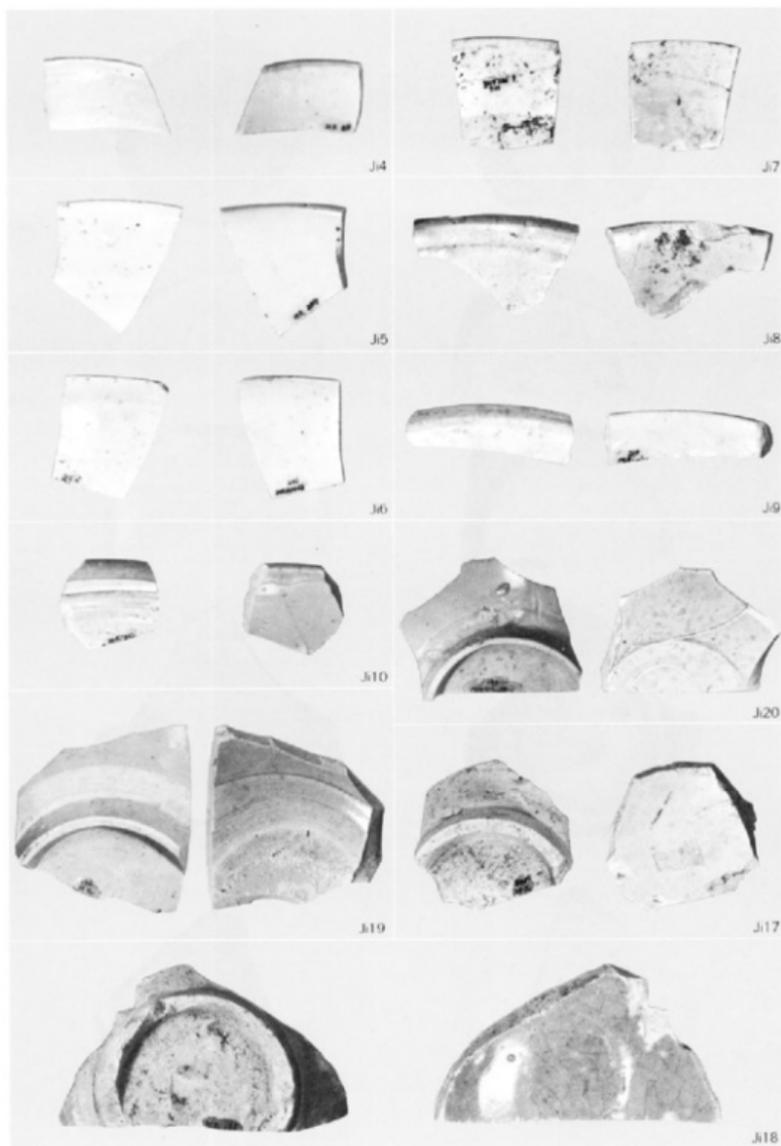
(白磁) Ji 4~22 は白磁と考えられるもので、碗と皿があります。Ji 4 は丸くつくられた口縁部に特徴があります。釉色は灰白色を呈し、気泡が見られます。Ji 5 は口径17.2cmを測り、口縁部上面は、わずかに水平となり、端部は小さく尖っています。外面には軸垂れがあり、気泡

が目立ちます。Ji 6 は 19 cm と口径も大きく、体部の傾きも強いことから深い見込みとなつてい
 ます。口縁端部は、シャープなつくりで細く尖っています。外面の口縁部下は横ナデされてい
 ますが、約 3 cm 下方から露胎となっており、削り後の調整は加えられていません。Ji 7 は外湾し
 ながらのびる体部から、そのまま丸くおさめて口縁部となっています。灰白色の釉色で、下部
 外面には施釉されていません。Ji 8～10 は玉縁口縁を持つ碗です。Ji 8 の胎土は白色ではなく肌
 色で、釉色もうす茶色をおびています。Ji 10 は薄いつくりの玉縁で、口縁下には段がついてい
 ます。Ji 8 と Ji 10 の外面は貫入が見られます。Ji 11～21 は白磁碗の高台部です。Ji 11・12 の高
 台は直立ぎみに高く削り出されています。高台の内側は傾斜し、幅の狭い畳付となっています。
 釉は全体的に薄く見込内底部には多くの気泡があります。Ji 13～16 は浅い削り出しのため背の
 低い高台となっています。Ji 13 の削りは粗雑で明瞭な稜をなしていません。釉色は黄色をおび
 た灰色を呈し、外面は露胎となっています。見込みには沈線があり、内底部には小砂粒が付着
 しています。Ji 14 の高台も粗雑なつくりですが、やや深く削っています。同じように外面には
 施釉されていません。Ji 13・14 がうすい肌色をしていたのに対し Ji 15・16 は白色で、釉も灰白
 色で貫入も見られません。Ji 17 は Ji 13 と同じような釉調をしています。高台の削り出しは深
 くなっています。外面は露胎となっています。Ji 18 は濃灰白色釉で、見込みには大きな貫入が
 あります。Ji 19 の見込み内底部には、沈線が巡りその内側は輪状に釉が欠き取られています。
 Ji 20 の高台は細く背の低いつくりで、見込みには草花文と思われるヘラ描きの文様が見られま
 す。Ji 22 の高台畳付は丸みがあり、高台内は山形に削られています。胎土は灰色で、釉は青み
 をおびた灰白色を呈しています。釉は高台部外面まで均一にかけられていますが、見込み内底
 部は輪状に欠き取られています。Ji 22 は口径 8.6 cm の皿で、見込みには浅い沈線が巡らされて
 います。

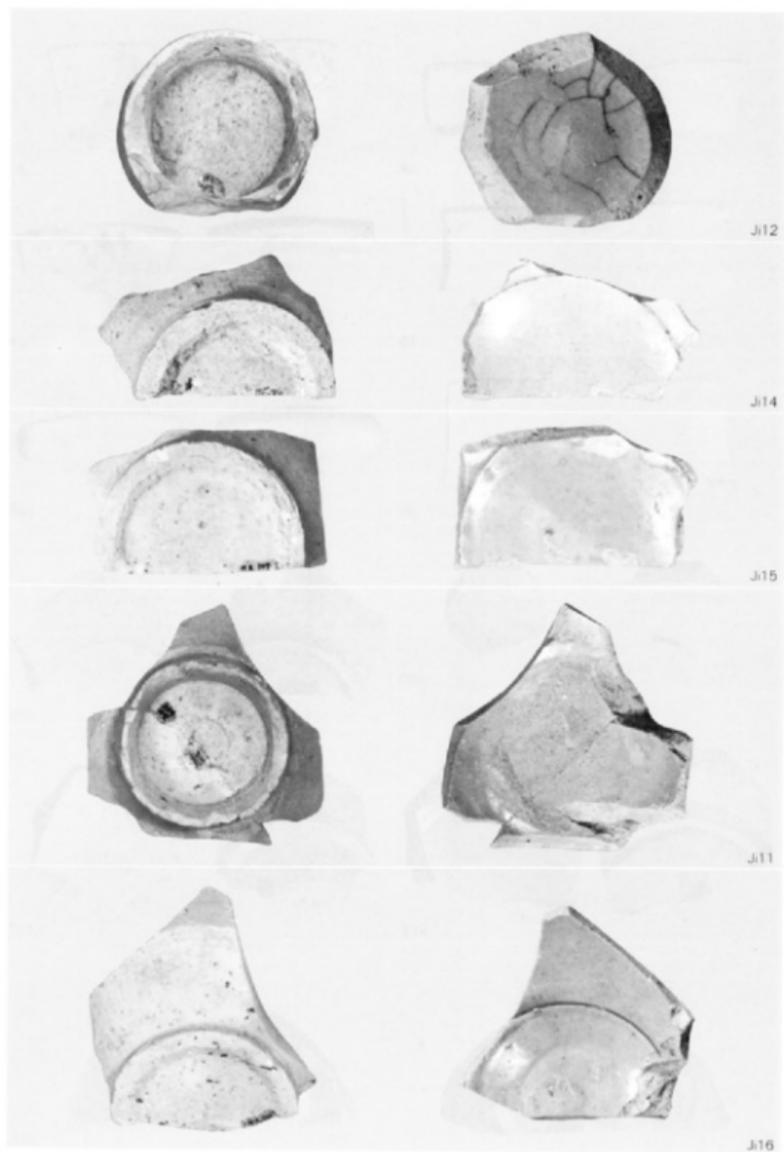
(青磁) 白磁に比べ青磁の出土は少量でした。Ji 23 の釉色は濃灰緑色で、見込みには片彫りの
 文様が見られます。器形は Ji 2 に類似するものですが、文様は草花文ではありません。Ji 26 の
 ような断面四角形に近い形の低い高台が付くと考えられます。Ji 24・25・27・29・30 は同安窯
 系の青磁で、碗と皿があります。Ji 24 の外面には櫛描き文があり、口縁部内面は小さな段が
 つけられています。Ji 25 も同じように外面には櫛描き文が見られますが、口縁部は外湾ぎみにの
 びた体部をそのまま丸くおさめるのではなく、小さく外反しています。緑灰色の釉は薄くかけ
 られているためにほとんど剥離しています。見込みにも櫛で施文されています。Ji 27 の高台は
 削りが粗く、高台内は山形に残されています。釉色は黒みをおびた濃緑灰色で、体部下半には
 施釉されていません。見込み内底部には釉溜りがあり、大きい貫入が見られます。Ji 28 の釉色
 は白色をおびた緑灰色で、全面にかけられています。高台外側には稜があり、球形に体部がの
 びるなど特徴的な器形をしています。Ji 29・30 は皿で、体部の中ほどで屈曲しています。Ji 29



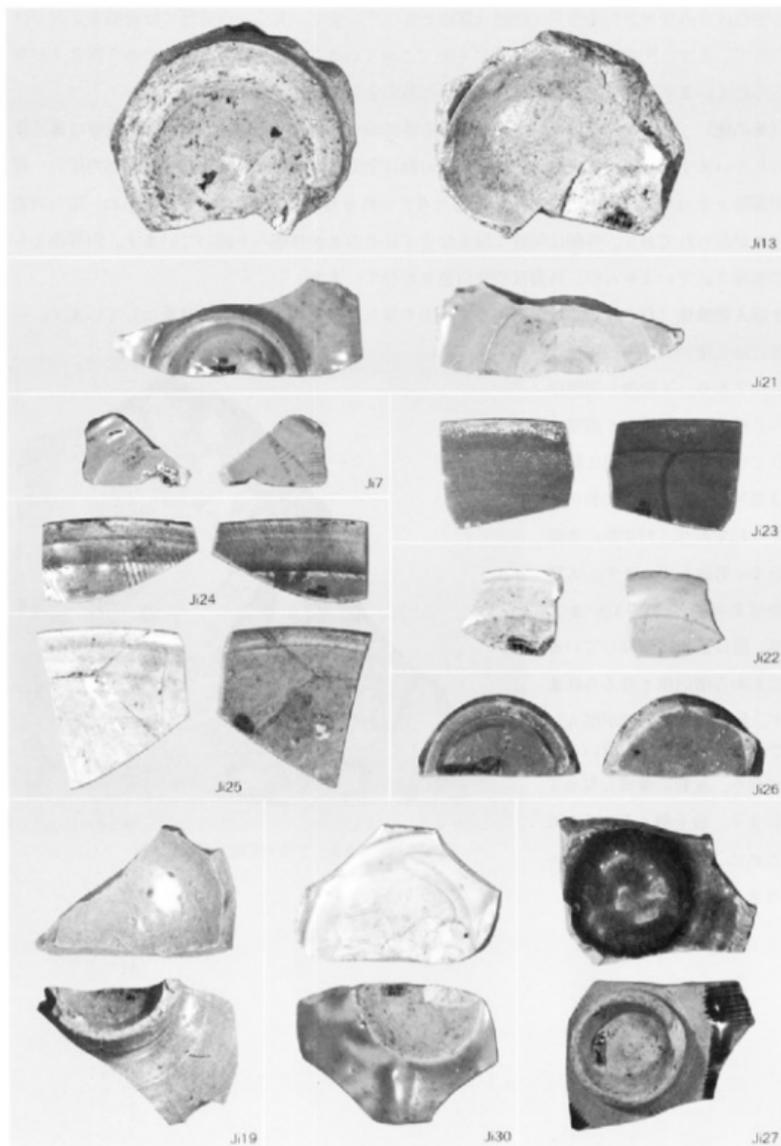
131 久保岡遺跡出土遺物実測図（縮尺1/3）



132 久保岡遺跡出土遺物（縮尺1/2）



133 久保園遺跡出土遺物（縮尺1/2）



134 久保岡遺跡出土遺物 (縮尺1/2)

の釉色は青みをおびた灰色で、底部は露胎となっています。見込み内底部には櫛描き文がつけられています。Ji 30 は見込み内底部にも施文されていますが、櫛描き文の他にへら描き文が加えられています。釉は灰白色を呈し、底部以外の全面に施釉されています。

(その他) Ji 31 は断面方形の高台に球形の体部がつく器形で、底部、体部とも器壁は薄く作られています。胎土は黄白色で、淡黄茶色の釉は全面にはかけられず、高台と体部内面の一部が露胎となっています。Ji 32 は瓶の底部と考えられるもので、灰色胎土が用いられ、高台内側のみが削られており、外側は明瞭な段をなさずそのまま体部へと続いています。内外面ともに施釉されていませんが、外面はやや白色をおびています。

土製人物像板 (D 2) D 2 は全面がうす茶色を呈し、厚さ約 1.1 cm の板状をなしています。一面には立像の人物像が型押しされており、人物像の周囲はへら様のもので細かく調整されています。図の裏面と側面は型押しの後にナデ調整が加えられており、わずかに表面の方に湾曲しています。人物像は上半身を欠いていますが、服は法衣に類似していることから僧侶像と考えられます。胎土には小砂粒が混入していますが精良土が用いられており、瓦質の焼成となっています。表土層より出土したために、作られた時期はわかりません。



135 土製人物像板(縮尺1/1)

D2

3. 出土土器観察表

凡例

- 本文中に掲載した弥生式土器と土師式土器については、詳しい説明をしていますが、土器の観察結果を遺構ごとに表にしました。
- 番号欄の1及びは遺物番号で遺物写真番号と一致しています。2段目は整理時の登録番号で実測原因に一致しています。3段目は実測部の回収番号で4段目は遺物写真の回収番号です。
- 遺構欄は、第1～3号住居跡を柱1～5に、第1・2号副住居建物を壁1・2に、第1～3号土器層を壁1～3に記述しました。
- 注釈欄は、口径を以、体径最大径を体、底径(口径)を底、高さ等を略記しましたが、破片のためほとんどが省略候となっています。

第1号住居跡

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y1 61 F26 P27	A-8 住1	甕	口、25.0 体、 底、 高、	●口縁内縁部は、断面三角形に突出しているために丁字形の口縁部となっている。 ●口縁上縁は平直で丸くなくっている。	●口縁部は内外面ともに横ナテ調整。 ●体部は内外面ともにナテ調整。 ●器面には砂粒が露出している。	胎、小砂粒多い 焼、普通 色、茶色 底、
Y2 62 F26 P27	A-8 住1 柱穴	甕	口、27.2 体、 底、 高、	●丁字形口縁部の内縁部は、小さく突出し、ふいばを持つている。 ●体部には張りがない。	●内外面とも小砂粒露出し、調整痕不明。口縁部は横ナテ調整であらう。	胎、小砂粒多い 焼、普通 色、外：黒褐色 内：茶褐色 底、
Y3 63 F26 P27	A-8 住1 柱穴	甕	口、29.8 体、 底、 高、	●丁字形の口縁部から直線的に体部がのびる。口縁上縁は平直面をなす。	●口縁部は内外面とも強く横ナテまれ、外側には小さな段がつく。 ●内外面とも砂粒が露出する。	胎、小砂粒を含む 焼、普通 色、茶色 底、
Y4 69 F26 P27	A-8 住1 柱穴	甕	口、29.0 体、 底、 高、	●体部上半部の湾曲は緩やかで上面に半円面を持つ口縁部がつく。	●口縁部は強く横ナテ調整する。 ●体部外面は縦のハナ目調整の可能性がある。 ●外側に漆が付着している。	胎、小砂粒を含む 焼、普通 色、外：茶褐色 内：茶色 底、
Y5 58 F26 P27	A-8 住1 柱穴	甕	口、33.4 体、 底、 高、	●中位より直線的にのびてきた体部は、上半部で内縮する。このため体部最大径は、この湾曲部にある。	●口縁部と体部内面は横ナテ調整 ●体部はわずかながら縦のハナ目調整が認められる。	胎、小砂粒を含む 焼、普通 色、茶色 底、
Y6 56 F26 P27	A-8 住1 柱穴 D1	甕	口、43.0 体、 底、 高、	●丁字形の口縁部は、わずかに内縮する。内縁部下が強く横ナテされているために小さく突出したように見える。	●口縁部内外面と突部部までは横ナテ調整。 ●突部は横ナテで丸くなる。	胎、小砂粒を含む 焼、普通 色、茶色 底、
Y7 57 F26 P27	A-8 住1 柱穴	甕	口、44.0 体、 底、 高、	●体部上半部は直線的に外縁しており、やや外縮する丁字形の口縁部がつく。 ●口縁部下には断面三角形の突部が延る。	●口縁部外面は横ナテ調整に横ナテ調整。 ●口縁部内縁部は横ナテで調整する。 ●体部内面は斜めのナテ調整。	胎、小砂粒を含む 焼、普通 色、茶色 底、
Y8 64 F26 P27	A-8 住1 柱穴	甕	口、 体、 底、 高、	●口縁部の小破片のため、口径不明。 ●口縁内縁部には長く突出しており、断面の上縁部をつくる。 ●口縁部外縁部には左下りの斜め目が見られる。	●内外面ともに磨耗し、砂粒が露出しているために調整痕不明。 ●口縁部外縁部の斜め目は浅い。	胎、砂粒多い 焼、普通 色、黄白色 底、

番号	出土区 遺構	器 種	法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備 考
Y 9 66 F26 P27	A-8 住1	壺	口、 径、 底、3.2 高、	●口の小さな底部は、おずかに 上げ底となっている。 ●底部から外周しながらのびて おり、球形に近い底部をなす のであろう。	●内外面とも磨滅し、調整痕不 明。ナテ調整か。 ●底部近くに黒灰がある。	胎、小砂粒含む 焼、普通 色、茶色 他。
Y10 24 F26 P27	A-8 住1 柱穴	(高杯)	口、 径、6.0 高、	●平底の底部は割離しているこ ともあって上げ底となってい る。 ●底部は底部からおずかながら 内周しながらのびさらに外周 ぎみにのびる。	●外面は割離し、調整痕不明。 ●内面はナテ調整、底部内面 には痕跡の凹凸が見られる。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、茶色 他。
Y11 22 F26 P27	A-8 住1 柱穴	帯 付	上径、9.4 外、 径、 底、 高、	●底部中央が落れて鉢形をなす。 ●括れの内面にはおびけが見 られる。	●内外面とも調整痕不明。砂粒が 露出している。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、明茶色 他、内外面磨耗
Y12 60 F28 P29	A-8 住1	壺	口、46.0 径、 底、 高、	●中型の變形十器で、し字部口 縁部の上面は平坦面をなすな い。 ●外縁部は断面方形をなす。 ●口縁下の断面は口唇形をなす。	●口縁部の内外面から突帯部にか けては横ナテ調整か。 ●外面には丹塗痕が見られる。 ●口縁部内面も丹塗りか。	胎、小砂粒多い 焼、普通 色、赤茶色 他。
Y13 67 F28 P29	A-8 住1 柱穴	壺	口、 径、 底、13.2 高、	●口の大きい平底の底部でお厚 いつくりをなす。 ●外縁は帯状にわずかに高くな っている。	●内外面とも砂粒露出。ナテ調整 か。	胎、小砂粒 焼、普通 色、緑色 他。
Y14 28 F28 P29	A-8 住1 柱穴	高杯	口、 径、 底、16.6 高、	●胴部は、緩やかに湾曲しなが ら基部へ続く。このため胴部 の柱状部は短かい。	●杯部内面には丹塗り痕が見られ ることから、胴部外面も丹塗り されていたものであろう。 ●調整痕不明。 ●胴部内面にはしぼり痕がある。	胎、砂粒少ない、精良 焼、良 色、明茶色 他。
Y15 65 F28	A-8 住1 柱穴	高杯	口、 径、 底、 高、	●高杯の脚端部で、頸部は上 方に小さく突出する。	●砂粒露出し、調整痕不明。	胎、小砂粒 焼、普通 色、茶色 他。

第2号住居跡

Y16 81 F34 P35	B-14 住2 柱穴 床面	壺	口、17.8 径、 底、 高、	●胴部と頸部との境には断面三 角形の突起が巡る。 ●胴部はわずかに内周しながら のび、そのまま口縁部につく っている。	●内面は割離し、調整痕不明。 ●口縁部は横ナテ調整。 ●丹塗り痕跡なし。	胎、精良 焼、普通 色、外：茶色 内：赤茶色 他。
Y17 89 F34 P35	B-14 住2 床面	壺	口、19.6 径、 底、 高、	●Y16と同じように外反する口 縁部を持っているが、口縁部 上面は、凹状をなす。	●精良な粘土が用いられ、外面 は丹が塗付される。内面は割離 し不明。	胎、精良 焼、普通 色、茶色 他。
Y18 88 F34 P35	B-14 住2 床面	壺	口、 径、 底、 高、	●壺形土器の胴部で、断面三角 形の突帯を4条巡らしている。	●内外面とも器蓋は割離してい るが、突帯部は横ナテ調整であ らう。 ●外面は丹塗り。	胎、精良 焼、普通 色、外：赤茶色 内：灰茶色 他。

番号	出土区 遺構	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
Y19 17 F34 P35	B-14 住2 柱穴 P4	壺	口、15.4 体、19.0 底、7.0 高、16.0	●いわゆる無蓋で丸形である。 ●胴部の最大径は中位にあり、均整のある形をなす。 ●底部の中心に安定帯がある。 ●口縁部には小孔が見られる。	●内外面とも調整痕観察できない。 ●割裂していることもあるが器壁は薄く、口縁部などシャープなつくりをなす。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、外：赤茶色 内：黒(茶)色 他、内外共磨耗
Y20 91 F34 P35	B-14 住2 床面	壺	口、 体、20.2 底、 高、	●胴部のみで口縁部と底部を欠く。 ●胴部の最大径は中位にあるが扁球形をなし、上部に小さな実帯が巡っている。	●全体に磨耗し調整痕認められない。 ●実帯ももとの姿をとどめていない。	胎、良 焼、普通 色、茶色 他、
Y21 98 F34 —	B-14 住2 埋土 ト層	口、	口、22.2 体、 底、 高、	●蓋の口縁部破片で、胴部は朝陽状に開くのであろう。 ●口縁部上面は外縁する。	●砂粒露出し調整痕不明。横ナゲ調整であろう。	胎、砂粒を含む 焼、普通 色、茶色 胎：灰黒色 他、
Y22 89 F34 P35	B-14 住2 柱穴 P17	壺	口、 体、 底、 高、	●蓋の胴上半部で、いわゆる瓶形の器形をなすのであろう。 ●底縁部には背の高い実帯をめぐらしているが、断面は口け形をなす。	●実帯部は強く横ナゲする。 ●丹は厚く塗付されている。 ●内面の調整は不明。	胎、精良 焼、普通 色、外：茶色 内：灰茶色 他、
Y23 86 F34 P35	B-14 住2 柱穴 P2	壺	口、 体、 底、 高、	●蓋の胴上半部と頸部の一部である。 ●胴上半部は強く内縁しており頸部径は小さくなっている。 ●実帯の背は低く、かつ小さい。	●実帯部は横ナゲ調整、内面はナゲ調整。 ●横ナゲは丁寧である。	胎、小砂粒を含む 焼、普通 色、黒色 他、
Y24 87 F34 P35	B-14 住2 床面	壺	口、 体、 底、 高、	●Y23と同じように蓋の胴上半部であるが、内湾がみに内縁している。 ●ここに2条の実帯を巡らしており、断面は台形をなす。	●全体的に磨耗し調整痕不明。 ●実帯は断面台形をしているが口器形の可能性あり。	胎、精良 焼、普通 色、茶色 他、全体的に磨耗
Y25 90 F34 P35	B-14 住2 床面	壺	口、 体、 底、 高、	●蓋の胴上半部は球形に近い湾曲をなしている。 ●頸部への移行は強く屈曲しており、この外面には実帯が見られる。	●外面は実帯部ばかりではなく胴部も丁寧な横ナゲ調整で、実帯部には象嵌状のこのこ。 ●胴部内面はナゲ調整。	胎、小砂粒少ない 焼、普通 色、茶色 他、
Y26 92 F36 P35	B-14 住2 埋土 P35	壺	口、32.8 体、 底、 高、	●いわゆるし字形の口縁部であるが、口縁部内端は小さく突出しておりし字形に近い。 ●体部上半部は内縁しているので、体部の張りはやや平方にあるのであろう。	●口縁部と体部外面は丁寧な横ナゲ調整。 ●胴部内面は左上りのナゲ調整。	胎、良 焼、普通 色、茶色 他、丹塗り丁寧
Y27 96 F36 P37	B-14 住2 柱穴 P22	壺	口、29.8 体、 底、 高、	●体部には張りがなく、上半部はほぼ垂直にのびている。 ●し字形の口縁部外端は、下方に垂れ込みである。	●全体的に磨耗しているが、体部外面には、わずかに縦のハタ目痕が見られる。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、外：褐色 内：灰褐色 他、
Y28 93 F36 P35	B-14 住2 埋土 P35	壺	口、32.8 体、 底、 高、	●体部上半は外湾がみに内縁しわずかに張りが見られる。 ●口縁部上面は、平地ではなく丸く内湾状をなす。	●口縁部は横ナゲ調整され、丹塗りされている。 ●口縁部外端には着上りの刷み目を施しているが、磨耗し、浅くなっている。 ●全体的にシャープなつくりである。	胎、良 焼、普通 色、茶色 他、

番号	出土区 遺構	器 種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y29 94 F36 P37	B-14 住2 埋土	甕	口、37.2 体、 底、 高、	●内積した体部に、下方に垂れ下みの口縁部がつけられる。 ●口縁下には、断面三角の突起が巡っている。	●全面に砂粒が露出しているが、かろうじて横ナア調整が見られる。	胎、小砂粒多い焼、青褐色、茶褐色、他。
Y30 95 F36 P37	B 14 住2 床面	甕	口、30.6 体、 底、 高、	●体部の最大径は中位に近いところに移り、口縁部もL字形ではなく十字形に近い。 ●頸部部に丸みがあり、稜を持たない。	●口縁部内面は粗い横ハケ目後に横ナアを加えている。 ●体部内面はナア調整、外面は割焼し不明である。	胎、小砂粒多い焼、青褐色、褐色、他。
Y31 77 F36 P37	B 14 住2 塼	(底部)	口、 体、 底、7.6 高、	●底部の小破片。 ●平底の底部から体部が直線的に開きながらのびる。	●全面砂粒露出。 ●外面は縦のハケ目調整か。	胎、砂粒少ない焼、青褐色、赤褐色、底外：黒色、他。
Y32 10 F36 P37	B-14 住2 埋土	(底部)	口、 体、 底、8.4 高、	●底部は平底をなすが、やや凹凸がある。 ●底部端は外側に小さく張り出している。	●外面は粗い縦ハケ目をナア消している。 ●底部内面には指押え痕が見られる。	胎、砂粒多い焼、青褐色、外：赤褐色、内：茶色、他。
Y33 76 F36 P37	B-14 住2 住北 ピット	(底部)	口、 体、 底、6.0 高、	●径の小さい底部から、体部は強く外縁しながらのびている。 ●底部は平底ではなく、わずかに中央部がへこんでいる。	●全体が磨耗しているために底部外縁も丸くなっている。 ●粘土を胎土が用いられており、おそらくは丹塗りにされていたであろう。	胎、精良焼、青褐色、茶色、他。
Y34 75 F36 P17	B-14 住2 柱穴 P17	(底部)	口、 体、 底、10.0 高、	●Y33と同じような器形であるが、底径が大きい。	●内側の底部近くには指押え痕が見られる。 ●外面はハケ目調整はされていない。	胎、小砂粒が多い焼、青褐色、外：赤褐色、内：赤褐色、他。
Y35 1 F36 P37	B-14 住2 埋土	(底部)	口、 体、 底、10.2 高、	●平底の底部から体部は、わずかながら内湾してのび、さらに上半部で外湾ぎみにのびるのであろう。	●内面は磨耗し調整痕不明。 ●外面は粗いハケ目調整で時計まわりの環である。	胎、砂粒多い焼、青褐色、外：赤褐色、内：淡赤褐色、他。
Y36 38 F38 P37	B-14 住2 床面	(底部)	口、 体、 底、12.0 高、	●体部の立ち上りは、環やかでそのまま大きく開いている。 ●底部は外縁部が高くつくられている。	●内外面ともに磨耗が進んでいる。 ●体部外面にはわずかに縦の細かいハケ目痕が見られる。	胎、砂粒多い焼、青褐色、茶色、他。
Y37 20 F38 P37	B-14 住2 埋土	甕	口、 体、 底、 高、	●蓋の中央部破片。 ●縁み部より傘状に開く。	●縁み部は横ナア調整。 ●傘部外面には粗いハケ目調整。 ●内面はナア調整か。	胎、小砂粒含む焼、青褐色、明茶色、他。
Y38 82 F38 P39	B-14 住2 埋土	鉢	口、15.8 体、 底、 高、	●底部を欠くが半球状の体部に小さな平底がつくのであろう。	●内面は磨耗し調整痕不明。 ●外面は口縁部が横ナア調整、体部は縦ナア後に横ナアを加えている。	胎、小砂粒を含む焼、良色、茶色、他。

番号	出土区 遺構	器種	法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y39 79 F38 P39	B-14 住2 柱穴 P12	鉢	11, 18.0 径, 底, 高.	● Y38と同じ器形をなし、口縁端部は、わずかに内傾している。	● 口縁部は横ナデであろうが、多少露出し調整痕不明。	胎、小砂粒を含む焼、青褐色、茶色。
Y40 99 F38 P37	B-14 住2 床面	高杯	11, 24.4 径, 底, 高.	● 杯部は縁やかに湾曲してのび半球状をなす。 ● 口縁部上面は外傾する。 ● 杯と器の接合部より折れている。	● 調整痕不明。 ● わずかに丹塗痕が認められる。	胎、良焼、青褐色、茶色他。
Y41 97 F38 P37	B-14 住2 埋土	高杯	11, 28.4 径, 底, 高.	● 杯部のみの小破片。口縁部内面の突出部は長くなく、上面もほぼ水平をなす。	● 杯部内面と口縁部は横ナデ調整。 ● 杯部外面は横ナデ調整。 ● 高杯としたが口表の可能性もある。	胎、良焼、青褐色、赤褐色他。
Y42 33 F38 P37	B-14 住2 床面	高杯	11, 35.8 径, 底, 高.	● 杯部は深さ約 8.8cmと深く、大型の高杯である。 ● 口縁部内縁は丸く突出しており上面は外傾している。	● 内外面に丹塗痕がわずかに見られるのみで、他の調整痕は不明。	胎、精良焼、青褐色、茶色他。
Y43 84 F38 P39	B-14 住2 埋土 下層	高杯	11, 径, 底, 30.6 高.	● Y41と同様に高杯の脚部部と考えた。 ● 脚部部は、尖みがあるが接地点は、シャープなつくりとなっている。	● 全面割離進む。外面にわずかに丹塗痕が認められる。	胎、砂粒焼、青褐色、茶色他。
Y44 78 F38 P39	B-14 住2 床面	高杯	11, 径, 底, 20.4 高.	● 脚部部は Y44と同じ特徴のつくりであるが、上部への湾曲は急である。	● Y43ともわりに湾曲した土器が用いられている。 ● 砂粒露出しあり、脚部部に丹塗痕が見られる。	胎、砂粒少ない焼、青褐色、茶色他。
Y45 83 F38 P39	B-14 住2 柱穴	器台	11, 径, 底, 11.0 高.	● 器台形土器の体部下半部とした。 ● ハ字形に開いており、体部中位の折れは強い。	● 内面は横ハケ目調整。外面は磨耗し、砂粒露出している。	胎、砂粒多い焼、青褐色、茶褐色他。
Y46 85 F38 P39	B-14 埋土 下層	器台	11, 径, 底, 14.8 高.	● 器台形土器の体部下半部で小さな破片となっている。 ● 下半部はハ字形に断線的に開いている。	● 内面はナデ調整。外面は不明。	胎、小砂粒含む焼、青褐色、赤褐色他。
Y47 16 F38 P39	B-14 住2 柱穴 P4	器台	11, 12.6 径, 底, 8.4 径, 13.4 高, 16.6	● 体部の折れは、やや中位より上であり、上、下両部は同じように開いている。	● 体部外面は縦のハケ目調整で上部はさらに横ナデを加えている。 ● 下半部内面は横ハケ目調整。	胎、小砂粒含む焼、青褐色、赤褐色他。

第3号住居跡

Y48 21 F49 ---	A-16 住3 埋土	蓋	11, 10.4 径, 11.8 底, 4.4 高, 10.0	● 小型の蓋形土器で接合して完形となった。 ● 胴部の最大径は上段にあり、胴部は内傾してのび、さらに外反する口縁部がつく。	● 口縁部と胴下半部は横ナデ調整。 ● 他は磨耗し調整痕不明。	胎、小砂粒多い焼、青褐色、茶褐色他。
-------------------------	------------------	---	--	--	------------------------------------	--------------------

番号	出土区 遺構	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
Y49 I1 F49 P8	A-10 住3 柱穴	甕	口、11.0 体、10.6 底、5.0 高、10.4	●Y48と同じように小型であるが、胴が浅い。 ●胴部の最大径は中位にあり、頸部は内湾しながらのびて、そのまま口縁部をつくっている。	●内外面とも磨耗すべし調整不明。 ●底部の字子に焼成前か後か不明でない。	胎、砂粒やや多い焼、青褐色、茶色他。
Y50 I3 F49 P50	A-16 住3 床面	甕	口、 体、 底、6.4 高、	●わずかに上向きさみの底部から大きく外湾しながら胴部がのびる。 ●器壁は約5mmと厚いつくりである。	●胴部内面はナゲ調整。 ●外面には丹塗灰が認められる。	胎、砂粒少ない焼、良色、茶褐色他。
Y51 F49 P30	A-16 住3 床面	甕	口、 体、 底、4.4 高、	●径の小さい底部から、胴部は外湾しながらのびる。 ●胴部の最大径は中位にある。 ●器壁は、きわめて薄い。	●内外面とも割離がばい。 ●外面は丹塗りの可能性がある。	胎、小砂粒を含む焼、青褐色、茶色他。
Y52 I09 F49	A-16 住3 埋土	甕	口、23.4 体、 底、 高、	●胴部より下を欠くが、Y53のような直立さみにのびる頸部は、その上半部で内湾を強め、口縁部へ続くのであろう。	●口縁部は丁寧な横ナゲ調整後に丹塗りが行なわれる。 ●口縁部外縁は刻み目の可能性がある。	胎、良焼、良色、茶色他。
Y53 I10 F49 P50	A-16 住3 埋土	甕	口、27.6 体、 底、 高、	●Y52に比べ頸部の高曲はなく、口縁部下もあまり外反しない。 ●口縁部上面は凹凸があるが、水平に近い。	●内面は割離すべし。外面は丁寧な横ナゲ調整。	胎、小砂粒多い焼、青褐色、茶色他。
Y54 F49 P50	A-16 住3 埋土	甕	口、 体、 底、 高、	●大型甕の口縁部であるが、小破片のため口縁は不明。 ●丁字部の口縁部上面はわずかに外湾する。 ●口縁部外縁は凹状をなす。	●口縁部から突帯にかけては横ナゲ調整で、突帯はシャープな縁を持つ。	胎、小砂粒を含む焼、青褐色、茶色他。
Y55 I34 F49 P50	A-16 住3 埋土	甕	口、33.0 体、 底、 高、	●体部上半部に張りがあり、したがって内縁的に湾曲している。 ●口縁部内縁は横ナゲで窪み、小さく突出している。	●口縁部の横ナゲで体部内面の左上りのナゲで体部内面の横ナゲの順で調整が行なわれる。	胎、砂粒少ない焼、青褐色、淡赤褐色他。
Y56 I36 F49 P50	A-16 住3 埋土	甕	口、28.0 体、 底、 高、	●口縁部外縁は丸みがあり、1.5回は内傾し、く字形に近くなる。	●口縁部は横ナゲ、体部内面はナゲ調整である。	胎、砂粒多い焼、青褐色、外：赤褐色内：茶色他。
Y57 F49 P50	A-16 住3 埋土	甕	口、26.8 体、 底、 高、	●体部の張りはなく、上半部は、ほぼ直立する。 ●口縁部は丸みを持って内湾し、外縁は丸くおさめている。	●口縁部は横ナゲ調整。 ●体部外面は垂直のハケ目、内面は横ナゲ調整。	胎、砂粒多い焼、青褐色、茶色他。
Y58 I07 F49 P50	A-16 住3 埋土	甕	口、31.4 体、 底、 高、	●く字形に近く、口縁部は内傾する。 ●口縁部外縁は丸く、内縁の凹曲部は縁がない。 ●胴部外面には、断面三角形の突帯がつけられている。	●器面は割離が進み調整不明。 ●口縁部から突帯にかけては横ナゲ調整であろう。	胎、砂粒少ない、精良焼、青褐色、茶色他。

番号	出土区 遺構	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
Y59 41 F51 P50	A-16 住3 埋土	甕	口. 24.2 体. 底. 高.	● 体部の最大径は中位より、やや上にあるが、張り小さい。 ● 口縁部はく字形で頸部内面は、によい縁をなす。	● 口縁部は強く横ナデされ、体部との境が、小さな段をなす。 ● 体部外面は粗い縦のハク目調整である。	胎. 小砂粒 焼. 普通 色. 外: 黒褐色 内: 茶色 他.
Y60 102 F51 P52	A-16 住3 埋土	甕	口. 28.8 体. 底. 高.	● く字形の口縁部は、やや厚手のつくりをなす。 ● 頸部は、内外面とも縁はなく、外端は丸くおさめている。	● 口縁部は横ナデ調整。 ● 体部は内外面とも調整痕は不明で砂粒が露出している。	胎. 小砂粒多い 焼. 普通 色. 茶色 他.
Y61 37 F51 P52	A-16 住3 埋土	甕	口. 30.0 体. 底. 高.	● 口縁と体部との境がほぼ垂直のつくりをなす。 ● く字形口縁部はY60と同じような特徴を持つ。	● 口縁部は強く横ナデされ、体部とに境がつく。 ● 頸部内面はナデ調整か?	胎. 小砂粒を含む 焼. 普通 色. 外: 黒褐色 内: 黒赤褐色 他.
Y62 103 F51 P52	A-16 住3 埋土	甕	口. 38.4 体. 底. 高.	● 体部上半の内縁は強く、さらに口縁部は強く凹曲する。 ● 口縁下には、両面三角形の突帯を延らす。	● 口縁部は横ナデ調整後に丹を塗付する。 ● 頸部内面は丸みがあり縁はない。	胎. 砂粒少ない 焼. 普通 色. 赤褐色 他.
Y63 105 F51 P50	A-16 住3 埋土	甕	口. 41.2 体. 底. 高.	● 傾斜形の体部になると思われる。 ● 口縁部は外消しながらのび、外端は丸くおさめる。 ● 内面は小さく突出させる。	● 口縁部の横ナデ調整以外は砂粒露出し観察できない。	胎. 小砂粒を含む 焼. 普通 色. 茶色 他.
Y64 106 F51 P52	A-16 住3 埋土	甕	口. 40.6 体. 底. 高.	● Y63と同じように外消しながらのびる口縁部を持つが、厚手のつくりをなす。 ● 体部上半の内縁は強くない。	● 口縁部内端下は横ナデで凹状となる。	胎. 小砂粒多い 焼. 普通 色. 茶色 他.
Y65 108 F53 P52	A-16 住3 埋土	甕	口. 48.0 体. 底. 高.	● 中型の甕で体部上半は湾曲しながら内傾する。 ● 口縁部はく字形に屈曲しているが、わずかに内湾ぎみにのびている。	● 口縁部外端は横ナデで凹状をなす。	胎. 砂粒を含む 焼. 普通 色. 灰茶色 他.
Y66 101 F53 —	A-16 住3 埋土	甕	口. 27.8 体. 底. 高.	● Y66-67は、いわゆる熟ね上げ口縁である。 ● 口縁部の小破片であるが、体部の張りはないようである。	● 全面の磨耗し、調整痕は観察できない。	胎. 小砂粒を含む 焼. 普通 色. 茶色 他.
Y67 100 F53 P52	A-16 住3 埋土	甕	口. 33.8 体. 底. 高.	● Y66に比べ薄手のつくりをなす。 ● 体部上半は直線的にのびており、張りは中位近くにある。	● 口縁部の調整は横ナデ。 ● 他は砂粒露出しており、調整痕は不明。	胎. 砂粒多い 焼. 普通 色. 茶色 他.
Y68 116 F53 P52	A-16 住3 埋土	(甕部)	口. 体. 底. 高.	● 底部の径は小さく、深さ約5mmの上げ底をなす。 ● 底部の小破片であるが、体部への移行は直線的に外傾している。	● 底部内外面はナデ。 ● 体部外面は不明。	胎. 砂粒少ない 焼. 普通 色. 茶色 他.

番号	出土区 遺構	器種 法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備 考
Y69 117 F53	A-16 住3 堀土	11. 体、 底、 5.2 高、	●Y68と同じように底径は小さいが、上げ底ではない。	●おりに精良な粘土で、内面は丁寧なナデ調整。 ●外面は細かい段のハケ目調整。	胎、良 焼、普通 色、茶色 底：灰黒色
Y70 118 F53 P52	A-16 住3 堀土	11. 体、 底、 8.4 高、	●体部は、平底の底面からあまり外に開かずのびるが、底部と体部との境はない。	●外面は粗いハケ目調整。 ●内面は磨耗し、砂粒が露出している。	胎、砂粒多い 焼、普通 色；外：茶褐色 内：灰茶色
Y71 115 F53 P52	A-16 住3 埋土	口、 体、 底、 7.8 高、	●底部は平底であるが、やや凹凸が多少。	●体部外面は割割がすすんでいるが、裏のハケ目痕が見られる。	胎、外粒多い 焼、普通 色、茶色 底：灰黒色
Y72 119 F53 P52	A-16 住3 埋土	口、 体、 底、 8.4 高、	●平底の底部は体部の器壁に比べて厚手のつくりで、外面は直立してから、さらに外傾している。	●内外面ともナデ調整。 ●おりに精良な粘土が用いられている。	胎、良 焼、普通 色、赤褐色
Y73 12 F53 P52	A-16 住3 埋土	11. 体、 底、 7.8 高、	●平底から、体部は外湾さみにのびるが、移行部はやや厚手のつくりをなす。	●底部外面は湾にそって鎌合時の段が見られる。 ●外面は粗ハケ目調整。	胎、小砂粒多い 焼、普通 色、外：黒茶褐色 内：茶褐色
Y74 44 F33 P52	A-16 住3 住外 ピット	口、34.8 体、 底、 高、	●体部上半は内傾しており、口縁部上面は外傾する。 ●口縁部のつくりは厚く、外端は丸くおさめている。	●体部の器壁は、口縁部に比べ、まわって薄いつくりをなす。 ●口縁部は横ナデ調整である。	胎、砂粒多い 焼、普通 色、茶褐色
Y75 27 F53 P52	A-16 住3 住外 ピット	口、 体、 底、 8.0 高、	●Y74と同一個体の底部である。 ●底部の器壁は厚く、体部にあまり開かずのびる。	●全面砂粒露出し調整痕不明。	胎、砂粒多い 焼、普通 色、外：赤褐色 内：黒褐色
Y76 31 F53 P54	A-16 住3 埋土	口、26.5 体、 底、 高、	●底部は約5cmと浅く、頸部は円柱状をなす。 ●口縁部内面は断面三角形に突出し、幅広い口縁部をつくる。 ●上面は凹内がためる、わずかに外傾する。	●口縁部に横ナデ調整。 ●頸部は家の形かいくがキ。 ●全面に丹が塗られる。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、茶褐色
Y77 29 F53 P54	A-16 住3 埋土	口、 体、 底、 高、	●高杯の脚部で厚部を欠く。 ●頸部より上部に内湾さみにのびるが、長い柱状部はつくりがでない。	●内外面とも割割はげしく調整痕観察できない。 ●頸部内面にはほり痕が見られる。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、明茶色
Y78 186 F53 P54	A-16 住3 埋土	口、30.4 体、 底、 高、	●頸部のみを欠く。杯部は約8.1cmと深く半筒形をなす。 ●口縁部内面の突出は小さく、上面は外傾する。	●内外面とも割割はげしく、わずかに丹塗痕が認められるにすぎない。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、茶色

番号	出土区 遺構	器種	法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備 考
Y79 114 F55 P54	A-16 住3 埋土	酒杯	口、 体、 底、22.0 高、	●高杯の脚座部である。脚座部は、わずかに水平に屈曲し、その端部は断面方形をなす。	●内面は横ハケ目調整で横ナゲを加え滑している。 ●外面は丹塗り。	胎、硝子 澁、青褐色、灰色 焼、
Y80 32 F55 P57	A-16 住3 埋土	酒杯	口、16.4 体、 底、 高、	●大型酒杯の上半部である。いわゆる筒形部向であるが筋はない。	●内面は横ナゲ調整で、筒部にはしぼり痕が認められる。 ●外面は丹塗りされているが、内面は塗付されていないようである。	胎、小砂粒多い 澁、青褐色、赤褐色 焼、
Y81 112 F55 P54	A-16 住3 埋土	酒杯	口、10.0 体、 底、 高、	●体部下下部を欠く。 ●体部の括れ部より内凹しながらのびる。	●外面は粗いハケ目調整で、上部は横ナゲ調整を加える。	胎、砂粒少ない 澁、黄褐色、灰色 焼、
Y82 111 F55 P54	A-16 住3 埋土	酒杯	口、10.6 体、 底、 高、	●体部括れ部より下平を欠く。薄い唇壁のつくりをなす。 ●上部より下部の底が大きい。	●上部内面は粗いハケ目調整。 ●外面は肌磨し不明。	胎、砂粒少ない 澁、青褐色、灰色 焼、
Y83 19 F55 P54	A-16 住3 埋土	酒杯	口、19.7 体、 底、12.3 高、15.7	●全体的にいびつなつくりをなす。体部の括れは上位にある。	●内面は上下部とも粗い横ハケ目、外面は縦ハケ目調整。 ●括れ部の内面には指押え痕が見られる。	胎、小砂粒多い 澁、やや甘い 色、茶褐色 焼、
Y84 18 F55 P54	A-16 住3 埋土	酒杯	口、10.9 体、 底、12.1 高、17.0	●Y83とともに接合完形品である。体部の括れは中位よりやや上でありこのため上半部の消曲が強い。 ●上下の端部とも外傾する。	●外面は粗いハケ目調整であろうが、磨耗し調整痕不明。	胎、小砂粒少ない 澁、青褐色、茶褐色 焼、

第4号住居跡

Y85 53 F60 P61	E-12 住4 埋土 上層	壺	口、29.0 体、 底、 高、	●口縁部の小破片。く字形に外反する口縁部は外湾ぎみにのびる。 ●口縁下には断面三角形の突起をめぐらせる。	●口縁部は、おりに「家」字の横ナゲ調整である。	胎、砂粒少ない 澁、青褐色、灰色 焼、
Y86 54 F60	E-12 住4 埋土 下層	壺	口、28.0 体、 底、 高、	●垂りのない体部にく字形口縁がつく。 ●口縁部は長く直線的にのびる。	●口縁部は横ナゲ、体部外面は縦のナゲ調整。 ●体部内面は地付し、砂粒露出する。	胎、砂粒多い 澁、青褐色、外：赤褐色 内：灰褐色 焼、
Y87 55 F60 P61	E-12 住4 埋土	壺	口、 体、 底、 高、	●口縁部の小破片のため、口径は不明。 ●口縁部は、わずかに内湾しながらのび、外端は団状をなす。	●口縁部内面は横ハケ目後に横ナゲ調整を加える。	胎、小砂粒多い 澁、青褐色、赤褐色 焼、
Y88 50 F60 P61	E-12 住4 埋土 上層	壺	口、17.0 体、 底、17.0 高、	●壺台としては薄手のつくりで、ハ字形に大きく深く器形をなす。	●全面磨耗する調整痕観察できない。 ●内面はナゲ調整か。	胎、小砂粒を含む 澁、青褐色、赤褐色 焼、

番号	出土区 遺 構	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
Y89 51 F60 ---	E-12 住4 床面	口 杯 (器底)	口 径、 底、 高、 7.6	● Y89・90は底部の小破片である。 ● 底部から体部へは明確な段を なぞずに移行する。	● 外面はナテ調整か。 ● 全体的に刺刺している。	胎、小砂粒 焼、黄褐色 色、外：赤褐色 内：赤灰色 他。
Y90 48 F60 p61	E-12 住4 埋土 中層	口 杯 (器底)	口 径、 底、 高、 8.2	● Y89に比べ、やや口径大きく、 かつ上げ底状になる。	● 内面はナテ調整、外面は調整痕 不明。	胎、小砂粒多い 焼、黄褐色 色、外：褐色 内：赤褐色 他。
Y91 49 F60 P61	E-12 住4 埋土 中層	口 杯 (器底)	口 径、 底、 高、 1.6	● やや支りぎみの丸底をなす。	● 外面の調整痕は不明であるが、 内面はナテ調整である。	胎、大砂粒を含む 焼、黄褐色 色、茶色 他、底：灰黒色

第5号住居跡

H1 47 F66 P59	A-11 住3	壺	口、10.8 径、 底、 高、	● 小型丸底壺で、体部下半を欠く。 ● 体部の最大径は中位にあり、 球形をなす。 ● 口縁部は直線的にのび、上部 でさらに小さく外反し、端部 を丸くおさめている。	● 口縁部より体部上半までは横ナ テ調整。 ● 体部下半は横のハケ目をナテ 滑し。 ● 体部内面には指押え痕が見ら れる。	胎、小砂粒 焼、普通 色、外：茶色 内：黒褐色 他。
H2 70 F66 P59	A-11 住5 B溝	壺	口、13.8 径、 底、 高、 2.5	● 球形の体部は、器壁が厚くつ くられている。 ● 口縁部は、わずかに外反し、 外側の器面は凹凸がある。	● 口縁部は横ナテ調整。 ● 体部は内外面ともにナテ調整。	胎、精良(灰黄) 焼、普通 色、外：赤褐色 他。
H3 69 F66 P59	A-11 住5 B溝	壺	口、15.2 径、 底、 高、	● く字形に外反する口縁部で、 端部は前面方形に返り。 ● 器底部内面はにぶい縁を持つ。	● 口縁部内面は横の粗いハケ目、 外面は横ナテ調整。 ● 体部外面は粗い縦ハケ目をナテ 滑す。 ● 体部内面は、ヘラ削りで、器面 部より下方よりなされる。	胎、砂粒 焼、普通 色、外：茶褐色 内：茶色 他。
H4 88 F66 P59	A-11 住5 B溝	壺	口、25.4 径、 底、 高、	● 口縁部と体部下半を欠く。破 片のため縁きや歪み不正。 ● 体部の通りは中位付近にあり、 下ふくらみの器形をなす。	● 体部内面は黒曲部より約2cm下 方よりヘラ削りされ、その後には ナテ調整が加えられている。 ● 口縁部は横ナテ、体部外面は横 のハケ目調整。	胎、砂粒多い 焼、他、外：茶褐色 内：褐色 他。
H5 43 F66 P59	A-11 住5	壺	口、 径、 底、 高、	● 体部の張りは大きく、上半部 は球形をなす。 ● 口縁部への黒曲部は丸みを持 つ。	● 口縁部は横ナテ、体部外面は縦 のハケ目調整。 ● 黒曲部では口縁部の接合が観察 できる。	胎、砂粒 焼、普通 色、外：淡茶色 内：淡灰茶色 他。
H6 42 F66 P59	A-11 住5	壺	口、19.0 径、 底、 高、 16.6 底、 高、 10.7	● 底部は尖りぎみの丸底で、張 りのない長い体部がつく。 ● 口縁部は、直線的にのび、端 部は水平につくられている。	● 口縁部内外面は斜めのハケ目を ナテ滑す。 ● 体部外面には縦のハケ目。	胎、砂粒 焼、普通 色、褐色 他。
H92 73 F66 P67	A-11 住5	口 杯	口、 径、 底、 高、 8.0	● わずかに上げ底状になった底 部中央には焼成後の小孔が見 られる。	● 外面は縦のハケ目調整、内面は ナテ調整である。	胎、小砂粒を含む 焼、普通 色、外：茶色 内：黒褐色 他。

番号	出土区 造 墳	器種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
Y93 72 F66 P67	A-11 住5	口 体 底 高	3.0	●底部は浅の小さな平底をなし、 大きく開く。	●内外面とも磨耗し調整痕不明。 ●底部外面には平行する条痕が見 られる。	胎、小砂粒を含む 焼、普通 色、外：灰茶色 内：茶色 他。
Y94 71 F66 P67	A-11 住5	口 体 底 高	17.4	●高径の頸部と考えたが、径 は小さい。 ●肩部は断面方形で、内湾さみ で緩やかにのびる。	●全面が磨耗する調整痕観察で きない。	胎、小砂粒を含む 焼、普通 色、うす茶色 他。

第1号掘立柱建物

Y95 218 F73	D-7 溝1 柱穴 P23	口 体 底 高	8.0	●平底の中央部はわずかに凹状 となり、外縁部は少しあがっ ている。 ●体部へは、底部と縁をもって 移行する。	●全面磨耗し、調整痕不明。	胎、小砂粒少ない 焼、 色、外：茶色 内：灰茶色 他。
Y96 178 F73 —	D-7 溝1 柱穴 P25	口 体 底 高	10.6	●平底の底部は厚手のつくりを なし、体部への移行は外湾さ みにのびる。	●内面はナゲ調整。外面は砂粒露 出し、調整痕残っていない。	胎、小砂粒を含む 焼、普通 色、外：茶色 内：灰茶色 底：黒色
Y97 317 F73 P75	D-7 溝1 柱穴 P25	口 体 底 高	21.6	●口径の小さい壁で、体部の透 りは小さい。 ●口縁部はL字形に突出するが、 端部は丸くおさめられている。	●体部はナゲ調整。 ●口縁部は横ナゲ調整。	胎、小砂粒が多い 焼、良（かたい） 色、外茶色 内：黒茶色 他。
Y98 216 F73 P75	D-7 溝1 柱穴 P25	口 体 底 高	29.6	●口縁部は内縁が強く、く字形 をなす。 ●体部の最大径と口径とが、ほ ぼ等しい筒形となる。	●口縁部は横ナゲ調整だが、体部 は砂粒露出し調整痕不明。	胎、小砂粒多い 焼、普通 色、明茶色 他。
Y99 172 F73 P75	D-7 溝1 P26	口 体 底 高		●口縁部と胴部下半を欠く。胴 部上半は球形に外湾し、直立 さみの頸部がつく。 ●胴部には断面台形の突起1条 が上向きにつけられている。	●内外面とも磨耗し、調整痕残っ ていない。	胎、小砂粒を含む 焼、悪い 色、外：茶白色 内：灰茶色 他。
Y100 173 F73	D-7 溝1 P26	口 体 底 高	9.6	●平底の底部から、体部は直線 的にのびる。	●砂粒露出し、調整痕不明。	胎、砂粒多い 焼、普通 色、外：茶色 内：茶褐色 底：黒色
Y101 174 F73 P75	D-7 溝1 P26	口 体 底 高	44.8	●大型の広口蓋の口縁部で幅広 い口縁部を持つ。	●口縁部は横ナゲ調整。 ●口縁部外縁には刻み目はない。	胎、小砂粒多い 焼、普通 色、赤茶色 他。
Y102 223 F73 —	D-7 溝1 P27	口 体 底 高	32.8	●口縁部小破片で、内縁は断面 三角形に貼りつけられてL字形 の口縁部をつくっている。 ●口縁部上面はほぼ水平をなす。	●口縁部は横ナゲ調整。 ●口縁部内縁の粘土貼りつけがよ く観察できる。	胎、小砂粒多い 焼、良 色、茶色 他。

番号	出土区 通 標	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
Y103 167 F73 P75	D7 建1 柱穴 P27	壺	口、29.4 体、 底、 高、	●口縁部内縁の突出はなく、上 面も内傾している。	●口縁部に横ナゲ調整。 ●口縁部内縁はシャープなつくり で縁をなす。	胎、小砂粒多い 焼、普通 色、灰茶色 焼。
Y104 224 F73 P75	D7 建1 柱穴 P27	器 台	口、 体、11.2 底、 高、	●小型の器台で、腰部中位が括 れる器形をなす。	●内外面とも調整痕が残っていない。	胎、小砂粒 焼、普通 色、赤茶色 焼。
Y105 225 F73 P75	D7 建1 柱穴 P27	器 台	口、 体、 底、10.2 高、	●Y104と同様に八字形に開き、 腰部中位が括れる。	●全面磨耗し、磨粒露出している。	胎、砂粒 焼、普通 色、赤茶色 焼。

第2号掘立柱建物

Y106 175 F78 P79	E-7 建2 柱穴 P1	器 台	口、 体、 底、 高、	●いわゆる段形土器の小破片で ある。 ●頸部端が欠け、頸は上向き につけられている。	●磨粒は少ないが、それほど精良 ではない。 ●頸部は横ナゲであろうが、磨粒 のため観察不可。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、赤色 焼。
Y107 219 F78 P78	E-7 建2 P1	壺	口、 体、 底、 高、	●小破片のため口径測定不可。 ●体部上半の内縁は強くなく、 L字形の口縁部がつく。 ●口縁下には断面三角形の突雷 を認らう。	●外面は調整痕不明。 ●内面は上部より横ナゲ、ナゲ調 整である。	胎、砂粒少ない 焼、良 色、明茶色 内：赤茶色
Y108 220 F78 P79	E-7 建2 P3	壺	口、 体、 底、 高、	●口縁部の小破片のため口径は 不明。 ●L字形口縁部の上面は水平を なすが、外縁はわずかに垂れ る。	●口縁部内縁は縁を持つ。 ●磨粒が進んでいるが、口縁部は 横ナゲ調整であろう。	胎、小砂粒が多い 焼、良 色、茶色 焼。
Y109 168 F78 P79	E-7 建2 P5	壺	口、31.0 体、 底、 高、	●L字形口縁部は外側に長くつ くられており、上面は丸く凸 状をなす。	●口縁部は横ナゲ調整。 ●全体的にシャープなつくりをな す。	胎、小砂粒 焼、普通 色、外：赤褐色 内：茶色
Y110 166 F78 P79	E-7 建2 P6	壺	口、33.8 体、 底、 高、	●腹のない体部にL字形の口縁 部がつくが、口縁部は外縁が 強く外縁は下方に垂れ下みで ある。	●口縁部は横ナゲ調整。 ●外面は丹塗りでであろう。 ●粘土は、わりに精良であるが、 2-3cm大の砂粒を含む。	胎、小砂粒 焼、普通 色、茶色 焼。
Y111 164 F78 P79	E-7 建2 P6	壺	口、36.4 体、 底、 高、	●口縁部は、廻りがまわく、やや 厚手のつくりをなす。 ●上面はほぼ水平をなすが、わ ずかに凹凸がある。	●口縁部から突雷部にかけては横 ナゲ調整。 ●体部内面はナゲ調整。	胎、砂粒多い 焼、普通 色、淡茶色 焼。
Y112 165 F78 P79	E-7 建2 P6	壺	口、36.4 体、 底、 高、	●体部上半は外湾しながら内傾 し、倒筒形の体部となるので であろう。 ●口縁部は内傾し、外縁は丸み がある。	●全面剥離して調整痕不明だが、 横ナゲ調整であろう。	胎、小砂粒多い 焼、普通 色、赤茶色 焼。

番号	出上区 道標	器 種	法 量 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
Y113 169 F78 P79	E-7 道2 P6	壺	口、22.0 体、 底、 高、	● 腰部と上半は内傾が強く、内傾する口縁部がつく。 ● 1/3以下には楽季1条を巡らす。	● 体部内面はナデ、口縁部から体部外面は横ナデ調整。 ● 胴部内側は丸く、稜をなさない。	胎、小砂粒多い 焼、青褐色 色、茶色 内、灰茶色 他、
Y114 11 F78 P79	E-7 道2 P6	(器底)	口、 体、 底、6.8 高、	● 底部はよくしまり体部は直線的に開く。 ● 底部は厚手のつくりをなす。	● 内外面ともにナデ調整。 ● 外面は磨耗すすた。	胎、砂粒少ない 焼、青褐色 色、外：明赤褐色 内：灰茶色 他、
Y115 176 F78 —	E-7 道2 P6	(器底)	口、 体、 底、8.6 高、	● 半瓶の底部は凹凸がめがつ。 ● 体部はY118と同様に微妙に湾曲しながらのびる。	● 全面磨耗はげしく、砂粒が露出している。	胎、小砂粒多い 焼、青褐色 色、淡赤灰色 他、
Y116 6 F78 P79	E-7 道2 P6	(器底)	口、 体、 底、6.0 高、	● 底部は上げ筋をなし、体部は大々開く。	● 砂粒の少ない精良な粘土で、おそらく丹塗りにされていたのであろう。 ● 全面磨耗し、調整不明。	胎、砂粒少ない(精良) 焼、淡茶色 色、淡茶色 他、
Y117 7 F78 P79	E-7 道2 P6	(器底)	口、 体、 底、9.6 高、	● 平底の底部に比べ、体部の器壁はまわめて薄いつくりをなす。	● 外面はナデ調整か。	胎、砂粒多い 焼、青褐色 色、外：灰茶色 内：茶色 底：黒色 他、
Y118 177 F78 —	E-7 道2 P6	(器底)	口、 体、 底、8.4 高、	● 底部の小破片で中央部は、わずかに窪みであろう。 ● 体部は微妙に内湾しさらに外湾してのびる	● 内外面ともナデ調整で、内面のナデ調整は丁寧である。	胎、小砂粒多い 焼、青褐色 色、外：濃褐色 内、赤茶色 他、
Y119 171 F80 P79	E-7 道2 P6	壺	口、42.6 体、 底、 高、	● 大型の穴口蓋の口縁部とした。 ● 口縁部は内側に断面三角形に突出し、軽微の口縁部をつくる。 ● 胴部は直線的で、外面は口縁部と胴部を境をなさない。	● 口縁部は横ナデ調整。 ● 胴部外面はナデ調整。	胎、砂粒少ない 焼、青褐色 色、外：赤褐色 内：灰茶色 他、
Y120 185 F80 P79	E-7 道2 P6	壺	口、 体、41.2 底、 高、	● 口縁部と底部を欠く。胴部の最大径は内径よりわずかに上にあるが、ほぼ球形をなす。 ● 胴部は、やや内傾し、直線的にのびる。	● 胴部上部に横ナデ調整と思われるが、磨耗はげしく不鮮明である。	胎、小砂粒を含む 焼、青褐色 色、茶色 他、
Y121 170 F80 P79	E-7 道2 P5	器台	口、 体、 底、34.6 高、	● 器杯の器部としては、あまりにも大きいことから、いわゆる筒形器台を考えた。 ● 胴部は断面方形に近く、縁部は小さい。	● 精良ではないが、砂粒の少ない粘土が用いられている。 ● 調整は全面磨耗し、観察できない。したがって丹塗も推定されない。	胎、砂粒少ない 焼、青褐色 色、赤褐色 他、
Y122 221 F80 P79	E-7 道2 P6	器台	口、 体、 底、 高、	● 上下端部を欠く。体部中位で広がるが、外側の湾曲は緩やかである。	● 内面の灰白色より下方は横ナデ調整か？ ● 全面砂粒が露出する。	胎、砂粒 焼、青褐色 色、茶色 他、

第1号土器溜

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y123 147 F102 P103	E-9 溜1	盥	口、30.9 体、 底、 高、	●口縁部の頸部で、口縁部の一部を欠く。 ●頸部は緩やかに内湾しながらのび、幅広い口縁部がつくのである。 ●胴部と頸部の境には断面三角形の突帯がつく。	●全面割刷しているが、頸部の突帯部にはわずかに丹が認められる。	胎、小砂粒、良焼、普通色、茶色他。
Y134 143 F102 P103	E-9 溜1	盥	口、17.27.0 体、 底、 高、	●口縁部は扇先形をなし、両端ともシャープなつくりをなす。 ●頸部は緩まないが、よくしまっている。	●頑直な胎土が用いられており、丹塗りされていたのであろう。 ●割刷のための調整不明。	胎、精良焼、普通色、茶色他、丹塗りの可能性あり
Y125 149 F102 P103	E-9 溜1	盥	口、 体、 底、 高、	●Y125・126はともに甕形土器の胴上部破片である。 ●突帯は長く筒状をなすし、下方を曲く。	●割刷痕が見られるのは、筒の下のみである。 ●頸部は横ナゲ調整で、シャープなつくりをなす。	胎、砂粒多い焼、普通色、茶色他。
Y126 148 F102 P103	E-9 溜1	盥	口、 体、 底、 高、	●Y125より径が大きいのが、筒状の特徴は同じである。 ●筒状の内面の屈曲は丸みがある。	●全面に割刷がすすみ調整痕が残らない。	胎、砂粒多い焼、普通色、茶色他。
Y127 129 F102 P103	E-9 溜1	甕	口、35.8 体、 底、 高、	●1.字形口縁部の上面は、わずかに丸みがあり、外縁は下向きである。 ●口縁下に断面三角形の突帯を巡らす。	●全面割刷し、調整痕不明。 ●口縁部内縁下は横ナゲされ凹状となる。	胎、小砂粒を含む焼、普通色、茶色他。
Y128 128 F102 P103	E-9 溜1	甕	口、33.8 体、 底、 高、	●1.字形の口縁部は、内傾し、外縁部は丸くおさめられている。 ●断面三角形の突帯は口縁直下にある。	●口縁部は横ナゲ調整。 ●他は割刷のための調整痕不明。	胎、砂粒多い焼、普通色、赤茶色他。
Y129 127 F102 P103	E-9 溜1	甕	口、43.9 体、 底、 高、	●Y128と同様に口縁直下に突帯を巡らせるが、口縁部上面は内傾が強い。 ●屈曲部内面は丸く緩まきない。	●内外面とも割刷しているが、口縁部は横ナゲ調整であらう。	胎、砂粒少ない焼、普通色、茶色他。
Y130 126 F102 P103	E-9 溜1	甕	口、33.8 体、 底、 高、	●体部上半の内傾は強く、く字形の口縁部がつく。 ●口縁部は外湾してのび、端部を丸くおさめ。 ●割刷部の体部となるのであろう。	●屈曲部内面は、丸く緩まきない。 ●口縁部から突帯部にかけて横ナゲ調整。	胎、砂粒多い焼、普通色、茶色他。
Y131 130 F104 P103	E-9 溜1	甕	口、30.8 体、 底、 高、	●他の甕形土器とは器形を異にする。 ●体部は上位に張りがあり、口縁部はく字形に外反し、端部の断面は方形をなす。 ●口縁下に突帯はない。	●口縁部の横ナゲ量はよく残る。 ●体部外面は縦のナゲか？	胎、小砂粒多い焼、普通色、赤茶色他。
Y132 132 F104 P103	E-9 溜1	甕	口、35.2 体、 底、 高、	●Y132-135は同じような器形をなすが、それぞれ口縁部がつくりを異にする。 ●口縁部は外湾しながらのびるが、内縁は小さく突出し縁を持つ。	●内外面ともに砂粒露出している。	胎、砂粒多い焼、普通色、外：赤茶色内：茶褐色他。

番号	出土区 遺構	器種	法 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y133 124 F104 P103	E-9 溜1	甕	口、39.4 体、 底、 高、	●体部上半は強く内縮する。 ●口縁部の外縁は強くなり、外 周部で小さく溝出し、細丸く つくる。	●口縁部は横ナデ調整。 ●体部内外面は割離して観察不 明。	胎、砂粒を含む 焼、青透 色、外：うす茶色 内：黒褐色 他。
Y134 152 F104 P105	E-9 溜1	甕	口、38.6 体、 底、 高、	●口縁部の両面部は丸みがあり、 縁をつくらない。 ●口縁部の立ちあがりは強く、 厚手のつくりをなす。	●口縁部は横ナデ調整。 ●体部の内外面はナデ調査。	胎、小砂粒多い 焼、青透 色、茶色 他。
Y135 131 F104 P103	E-9 溜1	甕	口、46.4 体、 底、 高、	●口縁部は短筒部付近で薄くな っており、この直下に突舌を 透らしている。 ●口縁部の外縁も強い。	●口縁部から突舌部にかけては横 ナデ調整。 ●短筒部内側は丸く縁はない。	胎、砂粒をきむ 焼、青透 色、茶色 他。
Y136 126 F104 P105	E-9 溜1	甕	口、57.6 体、 底、 高、	●中型甕の口縁部である。 ●体部上半の内縁は強く、口縁 部とは鋭角をなす。 ●口縁部上面は、わずかに凹凸 がある。	●口縁部から突舌部にかけては横 ナデ調整。	胎、小砂粒 焼、青透 色、赤茶色 他。
Y137 153 F104 P105	E-9 溜1	甕	口、63.2 体、 底、 高、	●体部上半は直立し、張りはない。 ●口縁部は厚手のつくりで内縮 する。	●口縁部内縁の突出部下まで丹塗 りされていることから、外面も 丹塗りされたのであろう。 ●口縁部は横ナデ調整。外面は割 離している。	胎、砂粒多い 焼、青透 色、外：赤茶色 内：茶色 他。
Y138 137 F106 P105	E-9 溜1	蓋	口、 体、 底、 高、	●蓋の小破片。中央部の残みは 円盤状で、中央部がへこむ。	●内面はナデ調整。 ●外面は縦のハケ目調整のみ。	胎、砂粒多い 焼、青透 色、赤茶色 他。
Y139 135 F106 P105	E-9 溜1	蓋	口、 体、 底、 高、	●蓋形の蓋で残みの形は約4.7 cmと小さい。 ●残みの外縁は外側に張り出し、 中央部はへこむ。	●内面はナデ調整。 ●外面は割離し不明。	胎、小砂粒多い 焼、青透 色、赤茶色 他。
Y140 138 F106 P107	E-9 溜1	(部瓦)	口、 体、 底、 高、	●底部中央はやや窪み、外側は よくしまっている。	●全面磨耗はげしく、調整痕不明。	胎、砂粒少ない 焼、青透 色、赤褐色 他。
Y141 141 F106	E-9 溜1	(部瓦)	口、 体、 底、10.0 高、	●底部には焼成前の穿孔が見ら れる。 ●体部へは大きく開きながら移 行する。	●全面割離がはげしい。 ●底部の孔は、径約8cmと大きい。	胎、砂粒を含む 焼、青透 色、茶色 他。
Y142 140 F106	E-9 溜1	(部瓦)	口、 体、 底、9.0 高、	●平度の底部から、体部は直線 的に開く。	●体部内面はナデ調整、外面には わずかに縦のハケ目痕が見られ る。	胎、小砂粒多い 焼、青透 色、赤茶色 底：黒色 他。

番号	出土区 遺構	器種	法量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
Y143 141 F106	E-9 溜1	(器底)	口 径、 底、 高、 7.6	●平底の外縁は丸みがあり、中央部は窪んでいる。 ●体部への移行は、底部近くでわずかに内湾する微妙な折れがある。	●体部外面は縦のナデ調整。 ●内面は割離している。	胎、砂粒多い 焼、普通 色、赤褐色 底、黒色
Y144 139 F106 P107	E-9 溜1	(器底)	口 径、 底、 高、 7.4	●体部は微妙に内湾しながらのびるが、底部とは明確な境をなさない。	●内外面ともナデ調整。 ●全面砂粒が露出している。	胎、砂粒多い 焼、普通 色、外、赤褐色 内、茶褐色 他。
Y145 26 F106 P107	E-9 溜1	(器底)	口 径、 底、 高、 7.8	●平底の底部外縁は縁がなく丸くつくりされている。	●全面磨削し、調整痕は不明。	胎、砂粒多い 焼、普通 色、外、赤褐色 内、茶褐色 他。
Y146 2 F106 P107	E-9 溜1	(器底)	口 径、 底、 高、 11.0	●底部径は大きい。器壁は同じように窪みつくりをなす。 ●体部へは内湾したのも外湾してのびる。	●内外面とも磨削はげしく、調整痕不明。	胎、砂粒多い 焼、普通 色、外、赤褐色 内、赤褐色 他。
Y147 144 F106 P107	E-9 溜1	高杯	口、 径、 底、 高、 28.0	●杯部の小破片である。 ●溝曲からみて、杯部はあまり深くはないようである。 ●口縁部は外傾し、内端の突出も小さい。	●粘土からすれば、Y148かY149の杯部の可能性がある。 ●丹塗痕は認めない。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、外、明茶色 内、茶色 他。
Y148 145 F106 P107	E-9 溜1	高杯	口、 径、 底、 高、 17.8	●端部から種やかに内湾しながらのび、長い砂粒部をつくらない。 ●端部は小さくハ字形に開き、1点で接合する。	●全面割離し、調整痕認められない。 ●粘土は砂粒少ないが、粗良ではない。	胎、砂粒を含む 焼、普通 色、外、赤茶色 内、茶色 外。
Y149 123 F106 P107	E-9 溜1	高杯	口、 径、 底、 高、 18.2	●脚部でY148より、厚手の習性をなすが、端部の特徴は同じである。	●Y148と同じような粘土が用いられている。 ●内外面とも割離している。	胎、小砂粒を含む 焼、普通 色、外、明茶色 内、茶色 他。
Y150 146 F106 P107	E-9 溜1	高杯	口、 径、 底、 高、	●高杯脚部で円柱状をなす。 ●杯部との接合部には突帯を部らす。	●縁に片に割れている。 ●脚柱状部の内面は、しぼり痕が見られる。 ●外面は不明、丹塗痕も認められない。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、茶色 他。
Y151 23 F106 P107	E-9 溜1	器台	口、 径、 底、 高、 7.1	●小型の器台で体部の括れは小さい。 ●上部は小さく外反し、内面の溝曲部は、よい縁を持つ。	●調整痕は不明だが、外面と括れ部内面にはへら様のもので磨いている。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、赤褐色 他。
Y152 124 F106 P107	E-9 溜1	器台	口、 径、 底、 高、 11.0	●下半部を欠く。 ●体部の括れはなく、上部は種やかに開く。	●全面割離しており、調整痕は観察できない。	胎、砂粒多い 焼、普通 色、赤茶色 他。

番号	出土区 遺構	器種	法 無 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備 考
Y153 I20 F108 P108	E-9 溜1	器 口	口、17.0 体、 底、 高、	●Y153・154は、体部の残れの 小さい円筒形の器形を考えた が、上下逆の可能性もある。	●内外面ともに調整痕不明。	胎、砂粒を含む 焼、普通 色、うす茶色 焼。
Y154 I21 F108 P107	E-9 溜1	器 口	口、23.0 体、 底、 高、	●Y153よりひとまわり大きい が、端部は、わずかに凹状を なすなど、同じ特徴を持っている。	●内面はナゲ調整、外面は中位か ら緩のハケ目調整。	胎、小砂粒を含む 焼、普通 色、茶褐色 焼。
Y155 I22 F108 P109	E-9 溜1	器 口	口、20.4 体、 底、28.5 高、43.4	●胴縁部とは接合しないが、同 一器種とした。 ●上下部とも大きく開き、上部 には口唇部の突起を認める。 ●胴縁部は、裏面三角形の隆起 部をなす。	●上部は横ナゲ調整であろうが 磨耗してよく観察できない。 ●注伏部内面はしぼり痕が見られ る。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、茶色 焼。
Y156 I36 F108 P109	E-9 溜1	器 口	口、 体、 底、56.0 高、	●口径56cmと大きく開いており、 大型器台の脚明部とした。 ●丹塗られていることから、 鍋形器台と考えられる。	●外面は磨耗が進んでいるが、丹 塗痕が認められる。 ●内面には丹塗痕はない。	胎、小砂粒のみ 焼、普通 色、外：丹塗り 内：茶色

第2号土器溜

Y157 I54 F113 P114	E-9 溜2	器 口	口、 体、 底、 高、	●瓶形の器で、上半部の残れ部 に断面台形の突起を認めて いる。 ●この突起下にも小さな突起を つけている。	●丹塗りと認められるが、磨耗し ているために調整痕とも不明。	胎、砂粒少ない(良) 焼、普通 色、茶色 焼。
Y158 I30 F113 P114	E-9 溜2	高 口	口、28.4 体、 底、 高、	●口縁部内面は鋭角三角形に突 出させ、長い口縁部をつくる。 ●口縁部の上面は平坦でなく、 下方に垂れ込みである。	●Y158・159は胴部と杯部との接 合部により折れており、遺構内 には接合する跡部はない。 ●全面に丹が施されている。	胎、小砂粒多い 焼、普通 色、外：丹塗り 内：明赤茶色 焼。
Y159 I50 F113 P114	E-9 溜2	高 口	口、26.2 体、 底、 高、	●杯部のみで、接合する胴部は ない。 ●瓶形形の杯部は、そのまま先 縮みきめて口縁部を別につ くらない。 ●中位に小さな突起をつける。	●全面磨耗が進んでいるが、杯部 内面におそらく丹塗り痕が見ら れることから全面に施されてい たものであろう。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、茶色 焼。
Y160 I3 F113 P114	E-9 溜2	口 口	口、 体、 底、8.5 高、	●底部は外縁が割断して凹凸が めだつが平底であろう。	●内面はナゲ調整 ●外面はハケ目ではなく、ナゲ調 整であろう。	胎、むくみ多い 焼、普通 色、外：赤褐色 内：茶色 焼。
Y161 I55 F113 P114	E-9 溜2	口 口	口、 体、 底、7.4 高、	●平底の中央部はわずかに窪み 器縁は薄手のつくりをなす。	●砂粒露出しているために調整痕 観察できない。	胎、砂粒を含む 焼、普通 色、茶色 焼。
Y162 I53 F113 P114	E-9 溜2	器 口	口、40.2 体、 底、 高、	●Y162・163は上部に張りを持 つ筒筒形の体部で外反する口 縁部がつく。 ●口縁部は上面が丸く内傾する。	●口縁部に横ナゲ、体部の内外面 はナゲ調整である。	胎、砂粒多い 焼、普通 色、内：茶色 焼；

番号	出土区 遺構	器 種	法 量 (cm)	形態の特徴	手法の特徴	備 考
Y163 151 F113 P114	E-9 溜2	甕	口、38.0 体、 底、 高、	●同じような器形をなすが、口縁部は外湾しながらのびる。 ●底部内側は小さく突出している。	●口縁部は横ナテ調整で、内端下は凹状となっている。	胎、小砂粒多い 焼、普通 色、茶色 他、
Y164 156 F113 P114	E-9 溜2	(底部) 甕	口、 体、 底、17.0 高、	●径の大きい平底の底部で、体部へ大きく開いている。	●外面はナテ調整。 ●内面は鋭利な凹凸となっている。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、茶色 他、

第3号土器溜

Y165 35 F118 P117	A-19 溜3	甕	口、22.8 体、 底、 高、	●腹部は緩やかに内湾してのび、広口となる。 ●口縁部は厚手のつくりで、上面は丸みがある。	●精良ではないが、砂粒の少ない粘土が用いられている。 ●器面は剥離しており、調整痕不明。	胎、砂粒少ない 焼、普通 色、明茶色 他、
Y166 161 F118 P117	A-19 溜3	甕	口、 体、 底、 高、	●腹部の皿で、小型である。 ●胴部と底部には安帯を巡らす。 ●腹部は直立ぎみにのびている。	●外面は丁寧な横ナテ調整の後に丹塗りを加える。 ●内面はナテ調整。	胎、良 焼、普通 色、茶色 他、
Y167 163 F118 P117	A-19 溜3	甕	口、16.8 体、18.0 底、6.4 高、	●いわゆる無頸皿で、底部とは接合できないが、同一個体であろう。 ●胴部の最大径は中位にあり、口縁部はほぼ水平に外反する。	●薄い器壁をなす。 ●外面は丹塗りで、内面は横ナテ調整。	胎、良 焼、普通 色、外：丹塗り 内：明茶色 他、
Y168 158 F119 P117	A-19 溜3	甕	口、28.6 体、 底、 高、	●体部に張りはなく、口縁部は直線的にのび、外縁部は丸くおさまる。	●口縁部は横ナテ調整。 ●体部外面は粗い縦ハケ目、内面はナテ調整。 ●全体的に調整は丁寧である。	胎、小砂粒多い 焼、普通 色、赤褐色 他、
Y169 160 F119 P117	A-19 溜3	甕	口、31.8 体、 底、 高、	●体部上半は直線的に内傾している。 ●底部内側にはよい線をなす。	●口縁部は横ナテ調整。 ●体部は砂粒露出し、調整痕不明。	胎、小砂粒多い 焼、普通 色、赤味をおびた茶色 他、
Y170 159 F119 P117	A-19 溜3	甕	口、31.0 体、 底、 高、	●内傾する体部に口縁部は直線的に屈曲する。	●内外面とも磨耗すすみ、調整痕不明。 ●口縁部は横ナテ調整か？	胎、小砂粒少ない 焼、普通 色、茶色 他、
Y171 157 F119 P117	A-19 溜3	甕	口、37.2 体、 底、 高、	●体部上半は緩やかに湾曲しながら内傾する。 ●体部、口縁部とも器壁は厚いつくりをなす。	●内面は砂粒が露出し、調整痕不明。 ●口縁部から突帯部にかけては横ナテ調整。 ●体部外面は縦ハケ目調整。	胎、小砂粒多い 焼、普通 色、茶褐色 他、
Y172 40 F119 P117	A-19 溜3	甕	口、 体、 底、11.0 高、	●体部の上半部を欠く。 ●平坦の底部より、緩やかに体部はのび中位より上に最大径がある。	●内面の調整痕不明。 ●外面は緩のハケ目調整。	胎、砂粒多い 焼、普通 色、茶色 他、

番号	出土区 遺 構	器 種	法 無 (cm)	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
Y173 162 F119 P117	A-19 塚3	(底部)	口、 体、 底、 高、 9.0	● 扁球形の小破片で、中央部がわずかに窪む。	● 底部内面は横ナテ調整。 ● 体部外面は縦のハケ目調整。	胎、砂粒多い焼、黄褐色、赤色生。

その他

Y174 182 F123 P124	B-2 柱穴	壺	口、15.6 体、 底、 高、	● 扁球形の胴部に直線的に開く頸部がつき、口縁部は水平に折曲する。	● 口縁部は横ナテ。頸部はナテ調整か。 ● 体部はナテ調整か。	胎、砂粒少ない焼、黄褐色、赤褐色。
Y175 18 F123 P124	Eトレンチ 18 東 側	器台	口、 体、 底、 高、	● 筒形器台の頸部破片である。 ● 頸部は、ほぼ水平につけられ、頸部は丸みがある。	● 頸部は横ナテ調整。 ● 外面には、わずかに丹塗り痕が認められている。 ● 胎土は積良ではない。	胎、小砂粒焼、黄褐色、赤褐色。
Y176 179 F123	D-7 柱穴	(底部)	口、 体、 底、 高、 7.0	● 壺の底部と考えられるもので平底の底部から体部は大きく開きながらのびている。	● 割破れているが、内外面とも横ナテ調整であろう。	胎、小砂粒焼、黄褐色、外：茶褐色内：赤褐色。
Y177 183 F123 P124	Hトレンチ 183 東側 柱穴	(底部)	口、 体、 底、 高、 6.4	● 厚子のつくりの底部で、体部への移行は、いったんしまってからつがる。 ● 底部は上げ底で断面はハ字形をなす。	● 全面砂粒が露出しているために調整度不明。 ● 底部上げ底部はナテ調整。	胎、小砂粒多い焼、黄褐色、外：赤褐色内：黒色。
Y178 4 F123 P124	D-4 柱穴	(底部)	口、 体、 底、 高、 7.2	● 平底の底部には小孔が見られるが、焼成の前か後か判断できない。	● 全面、割離はげしい。	胎、小砂粒多い焼、黄褐色、外：赤褐色内：茶褐色。
Y179 25 F123 P124	A-9 柱穴	(底部)	口、 体、 底、 高、 8.4	● 底部外縁が高くつくられ、円盤状をなし、体部とは滑曲を興にする。	● 内面はナテ調整。 ● 外面は砂粒露出している。	胎、砂粒多い焼、黄褐色、外：赤褐色内：赤褐色。
Y180 8 F123 P124	柱穴	(底部)	口、 体、 底、 高、 9.0	● 底部と体部とはあまり境がなく移行する。 ● 体部の器壁は薄いつくりをなす。	● 全面が磨耗し、調整痕はよく観察できないが、外面はハケ目調整ではない。	胎、砂粒多い焼、黄褐色、外：黄褐色内：黄褐色。
Y181 9 F123 P124	柱穴	(底部)	口、 体、 底、 高、 9.0	● 底部とも体部とも器壁は厚く体部への立ち上がりは強い。	● 内外面ともナテ調整。 ● 底部内面には指押え痕が見られる。	胎、砂粒少ない焼、黄褐色、赤褐色。
Y182 5 F123 P124	柱穴	(底部)	口、 体、 底、 高、 8.4	● 体部は小さく内湾した後、外湾してのびる。 ● 平底の底部は、やや凹凸がある。	● 外面はナテ調整か？ ● 磨耗はげしく、内外面とも砂粒が露出する。	胎、砂粒多い焼、黄褐色、外：赤褐色内：赤褐色。

第3章 おわりに

久保園遺跡の発掘調査は、公園建設の事前協業を無視した野球場工事が直接の動機となりました。これに対して文化課の対応はあまりにも遅く、調査範囲は残されていた外野部のみにとどまりました。発掘作業は1976年4月から開始しましたが、当該地は青柳権伯の『筑前国統風十記拾遺』に「道乗寺跡」と記されている所に比定されることから、慎重に発掘作業を進めました。この結果、住居跡、掘立柱建物、墓、土器類などの遺構を検出し、同年10月中旬に終了しました。各遺構と出土遺物の詳細については、これまでに述べてきましたが、若干の検討を加えるとともに問題点などをまとめておきたいと思えます。

住居跡 検出した5軒の堅穴住居跡は、すべて工事や閉塞時に削平破壊されており、全形をとどめているものはありません。第4号住居跡を除く他の4軒は、ほぼ同一等高線上に並んだかのような位置にあり、相互の切り合いは見られません。各住居跡の時期は、出土遺物やプランなどから、第1号住居跡は弥生時代中期頃、第2号住居跡は弥生時代中期頃から後半にかけて、第3号住居跡は弥生時代中期終末から後期前半頃、第4号住居跡は弥生時代後期、第5号住居跡は古墳時代と考えられます。これら5軒の住居跡は時期がそれぞれ異なることから同一時期には重複を考えてもわずかに1、2軒の住居跡が営まれていたにすぎません。発掘区の面積からすればきわめて少ない軒数です。これは今回の発掘区が遺跡の中心からはずれていることによるものと思われれます。また、第1・2・3号住居跡は柱穴の数や重複などで建てかえを想定しましたが、その際、別地点へ移動するのではなく同一地点で拡張するにとどめています。もちろん、5軒の住居跡の家族が同一系であったとは断定できませんが、新しい住居を作る際にも、面的な制約があったことは、発掘区の中央より西側に住居跡が見られないことから納得できるでしょう。またこの西側の部分こそ、平野部にも近く、かつ緩斜面で住居跡の立地としては好適地と思われるが、ここに住居跡とほぼ同時期と考えた掘立柱建物が位置していることも、住居跡が全面に展開していない一因としてあげることができるでしょう。席田遺跡群とその周辺の遺跡分布を見ると、弥生時中期になって墓塚遺跡が急激に増加していることが知られています¹¹⁾。この現象を、墓塚という墓制の流行とともに平野部に居住する人達が、この地を墓地として選んだ結果とするか、あるいは平野部での耕地開発がほぼ完了し、人口増加の解消として丘陵部から山間部にかけて再進出をした結果とするか、さらには本来この地に居住していた集団が、経験の蓄積などによる生産技術の向上から安定期を迎え、人口が増加したことなどが推測されます。いずれの推測も住居跡や生産基盤である水田との関連追究が重要となります。席田遺跡群における第8次までの調査では、住居跡は大谷遺跡、久保園遺

跡、中尾遺跡、北ノ浦遺跡、赤穂ノ浦遺跡などで検出されています。これらの住居跡は、弥生時代中期中頃から出現しており、壜棺墓の時期と一致しています。これ以前の住居跡については知られていませんが、宝満尾遺跡では弥生時代前期と推測される貯蔵穴が検出されていることから、この時期にはすでに生活領域として利用されていたことは明らかです。しかし住居跡を営むようになるのは弥生時代中期を待たなければなりません。壜棺墓遺跡が平野部に突出した小丘陵の先端に位置しているのに対し、住居跡は、その背後の小丘陵のつけ根付近に立地していることが多いようです。各丘陵の全域を発掘した例はありませんが、同時期には数軒の住居跡があるにすぎず、丘陵の全面に展開していたとは考えられません。古墳時代になると住居跡はさらに軒数を増していますが、この傾向に大きな変化は指摘できません。したがって、各丘陵において住居跡と墓地とが対とはなっているものの、丘陵の住居跡数のみでは壜棺墓を主とする共同基地の形成過程を説明するのは困難のようです。また各遺跡の住居跡を見ると、石庖丁などの取巻具は持っているものの、丘陵部の住居跡のすべてが水稲農耕を生活基盤としていたかは速断できず、むしろ住居跡数軒という小集落のあり方からして、多面的な考察が必要でしょう。

掘立柱建物 掘立柱建物が検出されたことから、付録の小冊子に書いているように、官衙に伴う遺構ではないかと推測しました。席山郡衙については日野尚志氏は、現在の火井町付近の字大浦に比定されています^{註9}。この根拠は、大浦が宇美川と官道の交点に当り、さらに「浦」が郡浦に由来する可能性があることなどをあげています。この説は遺跡、遺物など考古学的に証明されているわけではありません。また根拠の一つとなった官道についても、現在は別の説^{註9-10-11}が提出されています。官道について日野尚志氏は、大宰府への駅順を「延喜式」の記載順序の夷守駅→美野駅→久爾駅→大宰府とし、夷守駅を箱屋町日守、美野駅を博多区住吉付近、久爾駅を博多区板付遺跡の北測付近にそれぞれ比定しています。これに対して、江戸時代の貝原益軒、青柳種信以来の説は、久爾駅を月隈か東平尾周辺に置いています。とすれば、夷守駅から美野駅を経由して久爾駅という道順は、遠回りとなり、また駅の間隔も駅制の規定よりも短いなどの問題点が指摘できます。夷守駅については、各駅跡と同じように調査されたわけではありませんが、夷守駅の推定地より、官道沿いに東に約1.3kmにある内桶庵寺では、「官道線に沿って門らしき痕跡があり、その周辺から多量の瓦が出土した^{註9}」ということで、8世紀後半代の建物と考えられています。その後の調査で「寺院址としての確証はなく、寺院址以外の遺跡として再考の余地がある」とされています。また夷守駅より北東約1.6kmの多々良込山^{註9}遺跡では、8世紀後半から10世紀中頃の掘立柱建物や、瓦、緑釉陶器、越州窯青磁、鈔幣、石帯などが出土し、官衙に関係した遺跡とされています。これらは夷守駅を直接証明しているわけではありませんが、この付近に官道があったことは間違いないでしょう。先の問題点については、高橋

誠一氏は次のように考えています。久爾駅を従来の説通りに月隈に比定する有力な根拠はないとしながらも、順序を『延喜式』と違えて夷守駅から美野駅を經由せず久爾駅・大宰府のルートがあった可能性を指摘し、さらに美野駅については那ノ津から大宰府に至るルートの駅とし、西海道（註1）の駅とは区別しています。夷守駅→久爾駅のルートがあったとすれば、当然のごとく月隈丘陵の西裾部を通っていたことが推測され、久爾駅の位置については明確にできないものの、先に記したように内橋庵寺や多々良込田遺跡に類似する遺跡の存在が月隈丘陵でも予想されてきます。しかし、久保園遺跡では重複する2棟の掘立柱建物が検出されたのみで、奈良時代以降の遺物は、わずかに数点にすぎません。掘立柱建物の時期についても律令時代とは考えがたいようです。掘立柱穴より出土した遺物は、図示したようにほとんどが弥生式土器で占められています。出土遺物から掘立柱建物の時期を決定するのは早計で、あくまでも上限を示しているにすぎません。第2号掘立柱建物のY 120のように意識的に埋めこんだような土器もあり、また2棟の建物は先後関係が明らかですが、出土遺物から考えられる時期にも矛盾はありません。久保園遺跡の南側に隣接する赤穂ノ浦遺跡でも同じような柱間距離を持つ2間×1間の掘立柱建物が数棟検出され、弥生式土器のみが出土することなどから、ここでは弥生時代の建物とし、中期後半頃の時期を考えておきたいと思います。ただ、その上部構造や性格などについては、いま明確にできません。

墓 第1号石棺墓は、側壁と思われる石材が1枚残っているにすぎませんが、その構造や、壙棺墓遺跡である林崎遺跡に隣接していること、さらに墓地を祭祀対象としたと見られる土器溜が発掘区内に存在することなどから、弥生時代の石棺墓と判断しました。しかし、これらの根拠は逆に林崎遺跡からはやや距離があり、発掘区内では他に同時期の墓が見られないこと、墓地祭祀とした土器溜も林崎遺跡からはさらに隔絶した位置にあり、第1号石棺墓を対象としたとも思われぬことなど否定される性質をも合わせて持っています。第1・2号土塚墓は、中国製輸入磁器を副葬しており、その磁器から13世紀頃の墓と考えられます。福岡市内では同じような中世墓は、和白遺跡、博多遺跡群、有田遺跡群、藤崎遺跡、西新町遺跡、今津遺跡などで知られており、白磁、青磁の碗や皿、土師器、鉄製品などを副葬することが特徴です。今津遺跡は、土砂採取中に約200体以上の人骨が発見されていることから集団墓が形成されていたようですが、他の遺跡では中世墓のみが単独に検出される例が多いようです。久保園遺跡でも白磁、青磁片は20数点出土するものの、土塚墓は2基のみで、他に同時期の遺構はありません。白磁碗を副葬していた第1号土塚墓は、第1号掘立柱建物の中央に位置し、主軸方向もほぼ等しいことから、検出当初は両者の関係を検討しましたが、直接結びつけることはできません。この2基の中世墓は、江戸時代にはすでに忘れ去られていたようで、青柳種信の『筑前国統風土記拾遺』には記されていません。ただ、「道乗寺跡」という当時の伝承は、この他にも中世墓が野

球場測にあり、またこの中世墓と関係する建物があつたことを物語っているのかもしれませんが。

土器溜 土器溜は3か所で検出しましたが、第1号土器溜と第2号土器溜は近接しており、本来は区別すべきものでないかもしれません。土器溜より出土する土器は、甕形土器、甕形土器、高杯形土器、甕台形土器、蓋形土器の器種で構成されており、住居跡より出土する土器の構成と大きく異なることはありません。しかし、土器溜出土の土器には、丹塗土器が多いこと、接合復元できないなど故意に破砕された形跡を示す土器が多いこと、さらに住居跡からの出土例が少ない大型の器台が含まれていることなどから、単なる土器捨て場としてではなく、祭祀遺構ではないかと考えました。出土土器から弥生時代中期終末を主とする中期後半から後期前半にかけての時期が考えられ、3基の土器溜にはあまり時期差は見い出されず、ほぼ同時期に併在していたようです。弥生時代の祭祀遺構の多くは、墓塚などの共同墓地から検出されています。久保園遺跡の土器溜も、当初は墓地を対象としていたと考えて、前述したように林崎遺跡との関連から第1号石棺墓を弥生時代の墓としましたが、3基の土器溜は、墓地の周縁部とはいえ、あまりにも離れており祭祀の対象を別に考える必要もあります。そこで問題となるのは、祭祀用土器と思われる土器が、第2・3号住居跡や第2号掘立柱建物にも見られることです。第2号住居跡では甕形土器(Y22)が柱穴より出土しました。出土状況は他の土器と比べ変りがなく、特別な扱い方をされているわけではありません。この甕形土器については、赤穂ノ浦遺跡と同じように横帯文銅鐸の鋳型片を出土した佐賀県鳥栖市安永田遺跡では20~30個体が祭祀遺構や各遺構から出土し「青銅器鋳造に関わる祭祀行為に用いた土器の可能性」が考えられています。福岡平野でも数例の出土があり、ほとんどは墓地祭祀と関連づけられています。久保園遺跡の南側約1.3kmに位置する下月原宮ノ後遺跡では、祭祀遺構ではなく、墓塚に使用されています。従来祭祀行為に使用されていた土器が、その対象である墓地の墓塚に用いられていることからすれば、祭祀的意識がより強く直接的に表現された結果ともいえるでしょう。このように席田遺跡群周辺では、鳥栖市安永田遺跡とはやや違った用いられ方をしています。第3号住居跡では、大型甕台(Y80)が、他の土器とともに住居跡廃絶後に投げ込まれた状態で出土しました。このY80は、通例の筒形土器が上部に鈎状環縁部を持つものに対して、筒状の体部が上部で大きく開くのみで、上部近くに1条の断面口唇形の突帯を巡らしています。同器形の土器は、福岡県甘木市小田遺跡、佐賀県神埼郡塚山遺跡、鳥栖市安永田遺跡、鳥栖市フケ遺跡で知られています。墓地祭祀遺構ばかりではなく、集落の溝や住居跡からも出土しており、鈎状環縁部を持つ筒形土器を相伴する例はありません。このような事例からすれば、筒形土器を使用する祭祀圏の中には含まれているものの、いわゆる筒形器台とは系譜やその用途などに違いがあつたことが推測されます。久保園遺跡の第3号住居跡では、住居跡の廃絶後、あまり時間を経過しないで祭祀が行なわれているのがわかります。ただその祭

祀が、住居跡排棄に伴う一儀式なのか、住居跡自体、あるいは、居住していた者に対するものかは明確にできません。また、大型器台は第1号土器溜(Y 155)からも出土しており、久保岡遺跡ではその祭祀対象が多様であったことが考えられます。第1～3号土器溜については、その祭祀対象が明確ではありませんが、その検出位置や、住居跡と同じ土器を持つことなどから、ここでは掘立柱建物や住居跡に対する祭祀遺構と推測しておきます。第2号掘立柱建物からは筒形土器(Y 126)が出土しました。掘立柱穴から出土する遺物については、柱を掘えて土を戻す際に混入したことも考えられますが、第2号掘立柱建物においては、先に記しているように意識的に埋め込まれた状況を示すものがあり、建物に対する祭祀が行なわれた可能性があります。

これまで、久保岡遺跡の祭祀遺構と祭祀遺物について検討してきました。祭祀遺構自体は、祭祀行為の結果であって、祭祀行為の内容を示してはいません。またその検出位置も、祭祀対象を直接示しているとは限りません。このような祭祀遺構の性格と、また遺跡の中心部が調査できなかったことも障壁となり、すべて推測に終始せざるをえませんでした。ただ、鳥栖市周辺とは祭祀遺物の用いられ方がやや異なるものの、類似する器形が多く、さらに同じような銅鐸型を出土するに及び、両地域に強い関連があったことが考えられます。久保岡遺跡や赤穂ノ浦遺跡で銅鐸が鑄造されていたかはいまだ証明できませんが、銅鐸自身が祭祀儀器であることから、その製作地と工人(集団やその主導者)に対して、あるいは製作時において祭祀が行なわれたことは当然考えられることでしょう。赤穂ノ浦遺跡では本調査部が広範囲に残されており、これからの発掘によって久保岡遺跡の祭祀性をおよびた掘立柱建物や住居跡、そして土器溜などが、銅鐸製作と関連づけて説明しうることができるともかもしれません。

引用・参考文献

- 1 福岡市教育委員会『鹿玉遺跡群第1次発掘調査概報』福岡市埋蔵文化財調査報告書第44集 1977年
『栢田遺跡群調査概報II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第46集 1978年
- 2 福岡市教育委員会『多々良田遺跡II』福岡市埋蔵文化財調査報告書第53集 1980年
- 3 鳥栖市教育委員会『栢比遺跡群範囲確認調査第3年次概要報告書—安永田遺跡の調査—』鳥栖市文化財調査報告書第7集 1980年
- 4 同上『栢比遺跡群範囲確認調査第4年次概要報告書』鳥栖市文化財調査報告書第12集 1982年
- 5 同上『安永田遺跡本調査第1年次概要報告書』鳥栖市文化財調査報告書第13集 1982年
- 6 石橋新次『佐賀県鳥栖市フケ遺跡出土の祭祀遺構』古文化誌第10集 1982年
- 7 藤瀬祐博『筒形器台について』古文化誌第10集 1982年
- 8 日野尚志『筑前国那珂・席田・粕屋・御立四郡における采里について』弘賢大学教育学部研究論集 24 1976年
- 9 西日本新聞社『福岡県百科事典』渡辺正気『大宰府通』
- 10 竹内理三他編『日本歴史地図』原始・古代編下 1982年
- 11 藤岡謙二郎編『古代日本の交通路IV』当橋誠一「西海道 筑前国」1979年 大明堂
- 12 森浩一編『考古学と古代史』鈴木重治「中世墓に副葬された青磁碗の検討」1982年
- 13 佐木茂『九州の祭祀遺跡』『九州考古学の諸問題』1975年
- 14 福岡県教育委員会『福岡県二井郡小郡遺跡発掘調査概報』1967

福岡市博多区

席田遺跡群

久保園遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書第91集

©1983年3月31日発行

編集
発行

福岡市教育委員会

福岡市中央区天神一丁目7-23

電話(福岡)711-4667

印刷

栄光印刷株式会社

福岡市東区箱崎下人道800

電話(福岡)611-3838

